神風のむすび





講話集

神風のむすび

第二十四回神道講演全国研修大会・伊勢大会

目次

御挨拶　神社本庁　総長　矢田部正巳
序　神宮　少宮司　高城治延
植樹　武智輝子　1
子どもに神宮参拝の促進実施を　石塚智康　4
先達　村田和弘　10
心のふるさと　二ノ宮雅子　14
聖なる営みの継承―祭祀とイベントの違いについて―　玉井利明　17
思い出の神都・伊勢　田中淳　21
神職　大野一省　25
大学生活で学んだこと　重村正親　29
自分の体験から神について　木佐木誠二　35
果つることなき大木　畠田明彦　40
家族　石井昌孝　45
言ひし言葉ぜ忘れかねつる　鈴木明子　49

神国日本　村瀬佳子　53
命日祭を終えて　小野日隆　57
昭和の日によせて　中嶋俊史　62
神主を志したとき　多田利子　66
奉務を通じて学んだこと　畠山智　70
至誠通神―あすは晴天―　大野康孝　73
常識について　神武徳彦　80
我が故郷は日本一　長谷川宏幸　84
「遷宮」宗教を超えて　佐伯正則　89
年男の独り言　寺本正徳　93
神人和合について　番定善寛　99
男神社の森とホタル　菅野洋子　103
お山に仕えて　宗像崇史　106
後の世のすぐれたること　中木屋豊　110
心の持ち方「ありがとう」感謝の気持ち　吉野太加秀　114

地震と伊勢の神宮　小林友博　118
多度祭上げ馬神事について　平野直裕　123
日本人の命のつながり　西尾酒子　127
御神木と真清田神社　楠田晴明　133
沖縄県における伊勢信仰と大麻頒布について　松井英二　138
幼年期に感じたお伊勢さん　伊藤克孝　142
熊さん、八つぁんのご遷宮　河本文夫　146
ご遷宮「生命（いのち）の鼓動」　宮﨑國忠　151
神宮と興玉神　小倉孝之　157
神宮への祷り　波多野學　162
神領民に生れて　坂口文彦　166
心・技・体　田村美津男　170
幼児剣道　久田貴之　174
神　感じるこころ　櫻井田鶴子　180
からだの中から日本をよびさます　中道豪一　185

伊勢神宮六月月次祭参加して　松吉宣和　189
神宮式年遷宮御装束神宝の謎と甦り　山元義清　193
「一日神領民」となりて　牟禮照子　198
お伊勢さまと神宮大麻について　綾川憲子　203
御遷宮　西村純子　208
ご奉賛のお願い　黒田明司　211
杜と米づくり　熊谷房重　215
感　謝　湊　久昌　220
伊勢参宮の思い出　今村早紀子　223
心のふるさと　松坂公宣　228
開拓前夜　芦原高穂　231
お伊勢さま　佐々木美津子　236
天照皇大神宮と刻み込まれた自然石に学ぶもの　川﨑太久美　240
御遷宮のこころ　山下裕嗣　245
三つ叱って・・・　田代壽興　249

心意気　原　茂子　253
御遷宮の出仕として　木下鎁二　260
神宮の祭祀と神主の使命　佐古一洌　264
食の至誠　村田和之　271
神道講演構成法　277
伊勢大会の記録　281
神道講演全国協議会役員名簿　285
あとがき　伊勢大会実行委員長　村田和之　286

御挨拶

神社本庁総長　矢田部　正　巳

第二十四回神道講演全国研修大会・伊勢大会の開催にあたり、一言御挨拶申し上げます。

神道講演全国協議会の皆様には、日頃より神社本庁の教化活動に、多大なる御貢献を戴いてをりますことに、厚く御礼申し上げます。

さて、本研修大会は、昭和四十六年に第一回大会が開催されてより今日まで、回を重ねるごとに内容も充実し、神職歴の長い方も、また、浅い方も一丸となって取り組む姿に心を熱くさせられる想ひが致します。研修会に参加の皆様方は、我々の大先輩とも言ふべき、石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の御志を受け継ぎ、斯界における神道講演の重要性を常に考へてこられ、その成果を、神社の活動の場で実践してこられました。このことは、斯界にとりましても実に心強い限りであり、深く敬意を表する次第であります。

本年は、今上陛下が御即位されましてから二十年目の佳節にあたります。日本は戦後、幾多の苦難を乗り越えて参りましたが、我が国の復興と繁栄は、常に、昭和天皇の大御心

とその御精神を受け継がれた今上陛下の大御心のもとにあったと申し上げても過言ではありません。

然しながら、昨今の我が国は、社会構造や価値観が大きく変化し、報恩感謝の精神の希薄化をはじめ、人々の心の荒廃を心配する声が大きくなってゐます。そのやうな秋だからこそ、私どもの祖先が営々と培ってきた普遍的精神に立ち返らなければならないのではないかと痛切に感じざるを得ません。

かかる状況にあって、我々は、奉仕神社において、氏子・崇敬者や参拝者に対して、我が国の歴史や文化・伝統、また、皇室や神宮の御事、更には、神道の信仰や精神等について、分かり易い言葉で説き、伝へてゆくことが大切であると肝に銘じ、ここに本大会の意義は、益々重要性を増してゆくものと存じます。

どうか御参会の皆様には、教化活動の第一線に立ってゐるとの自負と気概を高く持たれ、国民精神の昂揚を以て、斯道の興隆を図るために、尚一層の御尽力を賜りますやう切にお願ひ申し上げます。

結びにあたり、貴会の愈々の御隆昌と参加各位の御健勝、御活躍とをお祈り申し上げまして、御挨拶と致します。

序

第二十四回神道講演全国研修大会・伊勢大会が神都伊勢の地にて開催され、ここに講話集が発刊されますにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

神道講演全国協議会は、神道講演を通し斯道興隆の為にご尽力頂いた石井寿夫・佐古幸嬰両氏の意志を受け継がれ、昭和四十六年に第一回の研修大会を開催されました。爾来、全国各地にて研修を重ねられる中で、数々の成果を挙げてこられましたことに対し、衷心より敬意を表する次第であります。

ご関係の皆様方には斯道興隆はもとより、神宮の御事につきましても格別のご高配を賜り厚く御礼を申し上げます。

第六十二回神宮式年遷宮につきましては、お蔭をもちまして諸祭儀・諸行事とも全て順調に執り進んでおります。清流五十鈴川に架かる宇治橋の修造につきましては、去る二月に橋をお守り頂きました萬度麻の奉下式が厳粛に行われ、いよいよ本格的工事が始まって参りました。本年十一月三日には、木の香もかぐわしく、新しい宇治橋の渡始式が執り行

われる運びでございます。

また、遷宮募財に関しましても全国各地にて力強く奉賛活動を展開頂き、素晴らしい成果を挙げて頂いておりますこと、洵に有難く存じます。

さて、長い歴史の中で培われてきた伝統的価値観や共同体意識の希薄化が問題視される昨今、日夜奉務神社にて氏子崇敬者の教化・育成にご活躍頂いております皆様方には、心のふるさと伊勢の地に於いて磨かれました研修の成果を遺憾なく発揮され、平易な中にも魂の籠もった言葉を以て、現代に生きる御師として、多くの方々へ神道の精神を伝え、美わしい日本の心を喚起し、本来あるべき姿を取り戻すべく、尚一層のお力添えを宜しくお願い申し上げます。

結びに、神道講演全国協議会の更なるご隆昌と、会員の皆様方の益々のご活躍を祈念申し上げ、私の挨拶と致します。

伊勢大会会長・神宮少宮司　髙　城　治　延



第24回　神道講演全国研修大会　伊勢大会　　平成20年6月17日～19日

第二十四回　神道講演全国研修大会・伊勢大会

とき　平成二十年六月十七日～十九日

ところ　三重県　神宮会館

植樹

武智輝子

私が小学生の頃、梅雨時になると家の前の小川が氾濫し、土砂が玄関を塞ぎ、高窓から出た記憶があります。母が「戦後食糧難で山を切り開いて、蜜柑の木や農作物を植えたから」と言っていました。ひどい時は川の氾濫が五、六年続いた事もあります。

今、里帰りして、コンクリートの三方張りになった川を見ると、昔の事が懐かしく思い出されます。

以前の勝岡八幡神社には、堂々と聳える樹齢二百年、三百年の松の木が、四百メートルの参道を中心に林立し、松山城の天守閣から見渡すと、そこが境内であると一目でわかりました。私が嫁いで来た時は参道がうっそうとして、雨の日は恐い感じがしたくらいです。私達の先祖が何十代に渉りこの松の木を愛育継承してきた努力は、紛れもない崇敬の念の表れであり、神社の貴重な宝であり、氏子の誇りでもあったのです。

昭和五十年代になり、台風が来たり梅雨になると、枝が次々と折れていくようになりま

した。翌年から追加予算を立て、業者の方に木の枝打ちや伐採をして頂くようになりました。松の木の消毒等も二回を四回にしたり、虫食いを未然に防ぐ努力もして来ました。又、裏山に雑木、参道には桜の木等を植えました。（丁度その頃、昭和天皇様が植樹祭のため全国を巡られ、この松山へもお越しになられました。）松山市の市役所から松の木散布薬や土地への散布剤等を五年位続けて頂きましたが、一向に松枯れの止まる様子はありませんでした。

とうとう昭和の御代が終わると共に、四十本位あった松の木は枯れ果ててしまいました。参道からは御社殿がまる見えで、殺風景な宮の杜となってしまいました。又雨が降ると御社殿の上の方から下の参道へ水がどんどん流れ落ちるようになり、鍬で堰をしたりで大変でした。その甲斐あって平成七年には松山市の景観樹林地区に指定され、松山市から補助金を頂くようになり、それから年に二回、総代さんにご奉仕を頂きながら植樹、下刈り等を行いました。お陰で今、御社殿の裏には丁度見頃のつつじが咲き乱れています。又、杜には雑木、杉、檜、楠等が次第に育ち、三、四月になると参道に植えた樹齢二十年～二十五年の桜の花が見頃となります。参拝にこられた方々が森林浴を楽しまれ、何時しか私の心も和むようになりました。朝拝の時に聞こえるうぐいすの声も一段と透きとおっている様

な気がしてなりません。

今この松食い虫の騒動を思い起こすと、地球温暖化やヒートアイランド現象（アスファルト舗装やビルの輻射熱、エアコンや車の排気熱などによって都市部では外気温が上昇し、都市とその周辺地域に等温線を描くと、都市部が島の形に似ていることからそう呼ばれている）の要因となる自然破壊、つまり人間の都合で引き起こされた環境変化により、虫の世界も異変を来たし、その仕返しとして虫が人の暮らしに悪影響を与えていたのではないかと思えるのです。自然は当時からじわーっと私達に警告を発していたのです。

私も植樹を通して、地球にやさしい環境作りに取り組んで行きたいと思っています。

伊勢神宮の月次祭に参列して一首

「神宮さまの月次祭や蛍の夜」

（愛媛県　勝岡八幡神社　宮司）

子どもに神宮参拝の促進実施を

（次期式年遷宮が斎行できるよう気運盛り上げる大人に成長することを願い）

石塚智康

本日は当山根神社祈年祭にご参列戴きましてありがとうございます

この祈年祭は国の基であります農作物、米が自然の恵みを得て豊かに実りますように、と神様にお願いするお祭りです。伊勢の神宮ではこの祈年祭がもっと時期早く二月十七日からの山入りの祭りから始まります。

なぜそんなに早くからと思われるかも知れませんが、それは五十鈴の川上から水を引いて苗代を作らなければなりません。その苗代を耕す鍬が要ります。そこで山の神様に許しを得て、鍬の柄になる樫の木を切らせて頂くお願いのお祭りが、二月十七日からの山入りの祈年祭から始まるのです。そして苗代が耕され、下種祭、田植祭と行われ稲が育てられるのです。

秋には稲穂が頭を垂れる実り豊かな御年になりますようにと祈られた新穀が神宮の大御

神様にお供えされ、御神恩に感謝申し上げる最も由緒深いお祭りが十月十五日の夜中、由貴夕大御神饌の儀式から始まり十七日まで執り行われます。このお祭りが伊勢の神宮では「神嘗祭」と言われ神宮の最も大きなお祭りです。

ですので伊勢の人達はこの「神嘗祭」を神宮正月と称して大きく賑わいます。

私も毎年神宮から「イセヒカリ」という籾種を下賜され、無農薬無化学肥料栽培した稲穂を初穂曳にエンヤーの声高らかに綱を引いて献納しています。特に今年この支部は「懸税力」奉献の番に当たっていますので、私がその任を負い稲を育てています。

この神嘗祭が毎年賑わしく美しくお祭りされることは喜ばしいことです。

人々も神様の御加護を頂かせてもらったと喜び、神宮にお参りする姿は活気に満ちています。神嘗祭が年毎行われる中、二十年に一度「大神嘗祭」として御神殿、御神宝装束類が現在の姿のまま寸分違うことなく新しく整えられ、神様には新宮へとお移りいただくお祭りがなされます。これが伊勢の神宮の「式年遷宮」と言われる皇室の重儀であり、神宮無窮の祭儀であります。

これは聖なるものの再生を通しての国家日本国民精神の蘇りでもあります。この蘇り、これこそ民族の新たな生き方の出発であり、これまでの繰り返しそのことが伝統であり文

化であると思います。

この式年遷宮はかつては国家としての位置付けがなされ、国家予算を以って祭儀が行われていましたが、皆様ご案内のとおり敗戦後ＧＨＱにより神宮さまといえども一宗教法人にされ、昭和二十八年の第五十九回式年遷宮から私財での遷宮を止む無くなされ今日に至っています。そして平成二十五年秋に予定されております第六十二回式年遷宮に向けて、神宮では緒祭儀が滞りなく着々と進められております。

この式年遷宮には莫大な費用が必要となります。

次期第六十二回式年遷宮総予算五五〇億円の内二二〇億円を広く全国の募財を募ることになっています。

これを国勢調査の人口動態を基に前回の実績等を勘案し、私共の支部で四千万円を目標に募ることになりました。

皆様にはこの事は時折お話申し上げておりますので、大方のご理解は頂いているものと思っていますが、奉賛本部支部も立ち上がりましたので、これから皆様方のご家庭にお伺いし、遷宮奉賛にご協力頂こうと考えております。よろしくお願い申し上げます。

皆様のご協力で平成二十五年のご正宮遷宮が済みますとその後別宮摂社末社の遷宮、そ

の二十年後、平成四十五年には第六十三回式年遷宮を、更にその二十年後、平成六十五年には第六十四回式年遷宮を斎行せねばなりません。

このことを考えてみますと今の子どもたちにその意義を伝え遷宮に力を注いでもらわなければなりません。

次第次第に少子化が進んできた現在、国民一人ひとりの任が増してくるものと思われます。故にその力は今の私共よりもっと力強くなくてはなりません。

日本の国柄に逆らう精神と、我関せずという無責任投げやりの人達が増えたら。そうなったとき今の子どもたちが、式年遷宮という制度にそっぽを向くような事になっては到底神宮のご遷宮は、斎行困難になりはしないかと危惧するところです。

そうならない為には色々な工夫対策が必要だと思います。その一つに子どもたちの足を神社に向けること。自分の住んでいる地域の神社にお参りする。神社に関心を抱かせることが大事だと考えます。そこから伊勢の神宮様にお参りしてみようと関心を抱かせる。そこは神主と地域の人達の役目でもあります。

目で視覚に訴え体で神宮の森の空気を感じて欲しいと思います。

西行法師の句にあるように『何事がおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる

る』子どもたちは小さい時に体感した雰囲気は忘れるものではないと思います。

でもこんなに素晴らしい神宮へのお参りも子ども一人では到底無理です。かつて昔は学校の修学旅行でお伊勢参りが定番でした。今日お参りのお爺さん、お婆さん方も学校からの伊勢参りをされた方も多いと思います。

でも、今は学校からは伊勢の地へ引率して赴くことはありません。ではどうすればよいでしょう。

それは家庭からお参りするしかありません。かといってそれぞれの家庭で参宮に連れて行ってくださいとお願いしても種々問題もあり無理な事でしょう。

そこで神社が主体となって、それも一社だけでなく、支部内分会単位程度に広げて、子どもを対象に参宮団を編成しようと考えています。

これまで毎年実施しています支部総代会主催の参宮団は、一般の大人の方を対象にしていますので、今度は子どもを参宮に参加させたいと思います。

そこで遷宮のお話をしてそれぞれ年齢に応じた理解をしてもらうよう根気よく話すことを考えています。

その子どもたちが将来成長して、次期・次次期式年遷宮に直面した時、遷宮を理解し積

極的に盛り上げ力を結集し協力してくれることを強く望んでおります。

そんな大人に育てるために、子ども参宮団を編成して神宮参拝を繰り返し実施して行こうではありませんか。

ご理解とご協力お願い申し上げます。ありがとうございます。

（鳥取県　山根神社　宮司）

先達

村田和弘

先日、東京の秋葉原で起きた通り魔事件。歩行者天国には入ってはならない自動車が進入し無差別に人を跳ね、次に車から降り歩いている人達をナイフで次々と刺して行く・・・。殺人魂そのもの、しかしこの被告の話の中に、誰かに止めて欲しかった・・・。とても意味深い言葉が発せられました。自分ではどうしようも出来ない、誰かに助けてもらわないといけないと言う深い意味が含まれておりました。中学卒業するまでは学年でもトップクラスの勉強の出来る生徒だったと報道されています。どうしてその様に勉強の出来る子が大人になってこの様な悪質な事件を起こしてしまったのでしょうか?

今、日本中で広まっている異常な状況。子どもの未来を思い勉強勉強と教えた親の気持ちが意に反し、社会のルールを学校や家庭で教えしつけていないからこの様な凶悪な理解出来ない悪質な事件が起きているのではないでしょうか?。

私事ながら先月、私の奉仕しています高乃宮神社、石井寿夫先生の御霊を奉安させて頂

いている組織「神道氏子会」の研修旅行で、山口県乃木神社と松陰神社へ参拝致しました。その中で特に印象に残っているのが、松陰神社の吉田松陰先生の教えです。松下村塾で日本の将来を見、世界で翔る日本を教へ、伊藤博文先生を始め八人の総理大臣を生む基いを築かれたのであります。

神社界にも昭和の吉田松陰と言われた石井寿夫先生が、戦後の日本民族復興の為、松陰神社の境内で演説をされたと聞きます。天皇陛下様の心を心として力説された偉大な姿を思い浮べ痛感した次第です。誰かが先頭に立ち説き明す必要があるのであります。

先達とは、自分より先に道に達した人、つまり先輩であり先生であり道先案内者であります。仏教の座禅を指導する雲水と言われる行脚僧（あんぎゃそう）、勤行（ごんぎょう）を達した修験者。神社界では、錬成行法の道彦、山岳信仰でその道を指導、案内する「先達」。その道々で名称は違いますがその道を極めリードする人がいてこそ道は開けてくるのです。

私事ながら、祖父より続く三代目の石鎚神社先達と言う名称を平成十二年に授かりました。

学生時代より宮司の勧めで夏山大祭に奉仕し神明奉仕に励んでいるのであります。又、一つ、新しく神道行法道彦を目指し、父の修めた途方もない十五回参加と言う行法を修めんと励んでいる処でございます。

扨て、この聖地伊勢においても平安時代の中期、不況により御遷宮を斎行するに当り、御師と言う人達が先達となり布教、ご尽力頂て現在に継っていることはご承知の通りであります。その代表として活躍された慶光院（けいこういん）の名は今にも伝わる名声であります。

来る平成二十五年六十二回目の御遷宮を迎えるに当り我々神主が地域の先達として先頭になり教へ導きご奉仕しなくてはいけないのであります。誰か灯台のごとき道案内がいなくてはこの世は治らないと思うのであります。

私も今春より心を痛めつつ、一人の少年を保護司と言う立場から見守ることになりました。広島県で一番非行少年犯罪が多いと言われている私の住む安佐南区で今年の春、保護司になり早速十九才の未成年者を指導・支援しています。少年の話を聞いていますと自分では何も出来ず、グループで行動し先輩に言われるがままに悪質な犯罪に手を付けてしまう様であります。それも自分で好きこのんでしたのではなく、親の離婚という子供にとっては大変な事件からだんだんと非行に走ってしまった様です。いかにして、その先輩達から遠ざけグループから離れ、正道な道に導くのが私に置かれた任務であります。

まだ四十才、未熟者、指導を受ける立場ながら、先達の役目を受け持たなくてはいけない今の世相。今の自分は祖先より受け継ぐ現在生かされている自分の指命を全うする立場。

二度と無い人生、一日一日を大切にして若い人達に少しでも教へ導き社会人の一人として日本民族の品格と指命を伝えたいと思うのであります。

二十年に一度の御遷宮。先人達が守り伝えてきた日本の文化伝承行事、稲作民族を忘れることなく地域の先頭に立ち先達として神明奉仕に励む今日この頃であります。

（広島県　長束神社　禰宜）

心のふるさと

二ノ宮　雅子

先ず以て、心のふるさとである伊勢神宮の地におきまして、第二十四回神道講演全国研修大会に参加でき、素晴らしい御縁を授かり、これも神様のお導きと喜ばしく、皆様方と共にこの研修を受けられますことを大変ありがたく、厚く感謝申し上げます。

さて、今日本では心の疲れがひどい人がとても多くなりました。インターネットなどによる過度な情報の多さや、それによる犯罪の低年齢化、仕事が忙しく食事も家族別々など、心の在りかが少なくなっているようです。

毎朝起きて洗顔し歯を磨いて、神様の榊の水をかえさせて頂き神饌を供え、拝礼をして、一日がはじまるという感覚や、一月から十二月までのお家での行事、例えば一月はお正月、二月は豆まき、三月はひな祭りなど、家族で季節を大切にし、四季折々の恵みに感謝する気持ちも薄れています。

私の知り合いにも、仕事が忙しく人間関係などで、心は荒み、肌は荒れ、ただ仕事をこ

なすロボットのような生活を送っていた人がいます。感情表現がうまくできず、人間不信で、無味無臭無感動なのです。これでは元気の気も枯れて〝気枯れ〟（穢れ）てしまいますよね。

やはりいつまでも心身共に元気で若々しく清々しい日本人の精神を大切にしたいのです。本来あるべき姿を呼び起こして頂くためにも、日本の伝統で最大最高の祭りがあります。それは、神宮の式年遷宮です。二十年ごとに御社殿、御装束、御神宝などを新調し、大御神様に新宮へお遷り頂くことで全てを再生し、常に瑞々しく、永遠に若い常若を理念とし、それなどを寸分違わず未来へと繋げていく文化の伝承です。これは、他国に類はなくこの国独自のもので、一三〇〇年前から受け継がれ、昔ながらの技法を今に伝え時代を刻んでいます。そしてもう一つ大切なのは、御遷宮に使用される木を切っても必ず植樹をしているところです。ここで木々たちも生まれかわり再生をしているのです。山々に源を発する水も田畑を潤し川となり大海へ…というように自然の循環・再生があります。

こうしてみんなでよく考えてみると、御遷宮の大切さがわかり、感謝や祈りをもつことができ、国民の一人一人がこのように意識したとき、森羅万象に神が宿っていることにも気付き、人々の愛と真心と感謝の輪が国中に広がり、神道が神の道であると共に、日本人

の生活の道であることを思い起こし、原点にかえることができ、心の中にしっかりとした柱ができると思います。

人は一人では生きられません。人や自然を大切に共存共栄させて頂くことで、日本人の瞳にも輝きが戻ることでしょう。

世界中が環境問題にさらされている今、式年遷宮や鎮守の森（杜）がそれを教えてくれています。心のふるさとが力強い優しさで満たされるよう、私も日々学び研鑽しうるわしい文化を伝えていくために、神明奉仕に邁進したいと存じます。

皆様、これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

（福岡県　嘯吹八幡神社　出仕）

聖なる営みの継承 ―祭祀とイベントの違いについて―

玉井利明

この標題『聖なる営みの継承―祭祀とイベントの違いについて―』などと大上段にかまえた（しかも申込段階では殊更に正字・旧仮名で表記）ようでおもはゆく、新参者のくせに生意気そうで反省いたしております。

さて初参加の私、どんなお話をすべきか考えに考えました。思いつきましたのは、去る五月十日、或る兼務社での祭典後の講話とその後の展開のことであります。

そのときは、オリンピック聖火リレーにことよせて神道の話をしました。おりからチベット問題への抗議で妨害活動が起きていた頃のことです。

近代オリンピックの聖火リレーは今から七十二年まえの一九三六年、ベルリン大会のとき始められた。採火式は、ギリシアのオリンピア神殿遺跡で火の女神ヘスティアと太陽神アポロンにちなんで女優が扮する古代の巫女の手で行われる。けれども神殿遺跡はいうなれば廃墟であり、古代には壮大な祭祀が営まれていたにせよ現在は営まれ

ておらん。巫女をつとめる女優たちも、おそらくはキリスト教徒（東方教会系）であって、ヘスティアやアポロンに仕えているわけでなく、古代の神々を信じてもいないであろう。それに引き比べるも畏きことながら、伊勢の神宮では毎朝、身を清めた神職により神饌調理の忌火が古代さながらの方法で鑽り出される。これぞまさしく聖なる火。オリンピック聖火とは比較にもならん本物の「聖火」ではなかろうか。

―というような話をしたのです。すると後の直会で質問されました。

「先生、その、お伊勢さんで火をおこすちゅう行事とやらは、見せてもらえるんかな?」と。

さて、どう答えるべきか。一瞬脳裏をよぎりましたのは、父ならば何と答えたであろうか、ということでした。おそらくは、「大事なことは人に見せたりするもんじゃない。お前さんとこでも、夫婦でするいちばん大事なことを人に見せたりせんじゃろ?」と言って笑わせたにちがいありません。

父の時代ならそれでよかったと思います。その「大事なこと」が映像化・商品化されたりする現代です。かつての父のような言いまわしは今や下品な「しもネタ話」でしかなく、神前にふさわしくなかろうとも思い、結局「本当に大事なことは、人に見せるものではあ

りません」と言うにとどめました。なんだか意を充分に尽くせない、もどかしいような気がいたしました。

神事・祭祀は見世物ではありません。けれども現実として人に関心をもってもらわないことには存続がむつかしいという側面がございます。そこに、いわゆるイベントの要素が加わってまいります。

「まつり」とは、神様に奉仕する祭祀が本義です。そのことを我々神道人は理解しますが、世間一般では神様ぬきの「何々まつり」が横行しています。神祇不在の「まつり」は単なるイベントです。祭祀ではありません。

そこのところの道理がわからなくなりつつある。我々神社運営に携わる者においてさえ、ややもすれば・・・・・・。

それが問題です。人知れずに行われる事を無意味みたいに考える―そんなことになったら、神社神道はおしまいだと思います。

舞台・撮影や試合に臨む芸能人やスポーツ選手は、本番までにその何十倍・何百倍のリハーサルや練習を積み重ねます。人に見せるわざでさえそうなのですから、まして神様に奉仕するわざは、それ以上に真剣でなければならん。―そう思いつつも、朝夕の日供祭や

神拝のとき本当に真剣に取り組んでいるか、人が見ていないことで気がゆるんだりしていないか、自省しますと忸怩たるものがございます。

昨夜は内宮と荒祭宮の月次祭奉拝させていただきました。人に見せるためでない、祭祀というものの本質をまのあたりにした気がいたします。

昨夜の感動、今の余韻、そして祭祀の本義という道理。これをどう人に伝えたらいいのか。

やはり言葉だと思います。

言葉は万能ではありません。発した言葉に人が応えてくれない、理解してもらえない、そんな苦い経験が数えきれない程ございます。

それでも言葉をあきらめません。

せっかく授かった言葉の力。もっと磨きに磨きたい。そのために今回この研修大会に参加させていただきました。ご指導よろしく御願いいたします。

ご清聴ありがとうございました。

（愛媛県　高縄神社　禰宜）

思い出の神都・伊勢

田中　淳

私は、この伊勢の地で小学五年生より大学を卒業するまでの間を過ごしました。父の仕事により山間の地より、伊勢の平野の神宮神領地である度会郡御薗村、現在の伊勢市御薗町に移ってまいりました。今より約三十五年も前のことですので、現在のように開けてはおりませんでした。田畑風景が広がり、冬にはあちこちに伊勢たくあんの原料である、立派な大根が干されていたものです。現在の国道二十三号線がバイパスとして開通し、日増しに街は発展をして行きました。

小学生の頃は、神宮のお膝元とはいえ、感心もなく、信仰心も希薄であり、神社といえば遊び場でしかありませんでした。伊勢では、秋に〝伊勢おおまつり〟として、神宮の神嘗祭に合わせ新穀の豊作をお祝いするお祭りが、明治より続いております。このときは町中が祭り一色となり、多くの屋台が並び、学校も短縮授業となり、祭りの意味など知らずに、喜び勇んで自転車を走らせ遊びに行くのが楽しみでした。

昭和四十八年、小学六年生の時ですが、第六十回神宮式年遷宮が斎行されました。神宮が二十年に一度建物の全てが新しくなるとの知識しかありませんでした。しかし、神領民とのことより「お白石持ち行事」に参加させていただきました。

一般の人が正殿を目の前にするのはこの時だけですので、行こうとの思いだけでした。豊受大神宮（外宮）に奉仕させていただき、奉曳車と共に歩み、お白石を一個真新しい正殿の敷地にお納めいたしました。この時目の当たりにした正殿は、夏の太陽を浴びて輝いていたことを覚えています。青空に伸びる千木、鰹木は黄金に光っていました。高欄にある五色の居玉（すえだま）の美しさ。神様のお住まいの神々しさに圧倒されました。

伊勢に神宮が鎮座されたことは大変尊く、誇りでもあります。まさに神都である伊勢にて生活が出来たことは、大変光栄であったと思います。

私が奉職する椿大神社では、境内に流れる明神川にある金龍明神の滝におきまして、毎月みそぎを行っております。十一日を〝みそぎ修法会〟、第四土曜日を〝みそぎ特別修法会〟と申します。みそぎ特別修法会は、二年間に亘り、みそぎを中心として神道の勉強を行うもので、山本行隆先代が昭和四十三年に始めてより、現在第二十一期生を迎え、修了生も約五百名を数えております。この修了生は「椿惟神会（つばきいしんかい）」という奉仕会会員となり、当

神社の祭典・諸行事にお手伝いをいただいております。

この椿惟神会が、五十鈴川にてみそぎを行ったことがありました。椿惟神会は、年一回研修旅行を開催し、全国各地の主に滝を選びみそぎを行っておりますが、一度原点に返り、神宮への参拝と五十鈴川にてみそぎを行うこととなりました。

五十鈴川は、皆様ご存知のことと思いますが、千古の趣を称える森林の神路山と島路山を水源として、二つの流れが一つとなり流れています。その昔には、倭姫命が御裳（みも）のすその汚れを濯がれたことより、「御裳濯川」とも言われ、神宮を拝するに身も心も清めた祓いの場でありました。

椿惟神会のみそぎは、宇治橋下流の川原で行いました。七月の早朝とのことで、日は既に昇っておりましたが、川原に立てば川面の冷気が肌に触れ、何とも清々しく、神宮の正殿を見やれば瑞々しき緑深き杜を、朝靄（あさもや）が包み、我々にご神威をお授けいただくようでありました。川の流れは穏やかで、透き通り清く濁りないものでした。

この流れに身を委ねると、優しく体を包み流れてくれました。この流れは、悠久の時の経て変わることなく、人々の心の汚れを流してくれているのです。

国民もつねに心をあらはなむみもすそ川の清き流れに（明治天皇御製）

五十鈴川の流れに肩まで浸かり、大祓詞を唱和しつつ、眼の前に流れる川面を見つめた時、暫し世の流れを離れ、時の一駒に置かれたような思いでした。

この時のみそぎは、決して厳しいものではありませんでしたが、赤子が母親に抱かれるように優しく包まれ、安らぎに心身が清められエネルギーをいただけ、全員で感謝を申し上げました。

文豪吉川英治氏が

ここは心のふるさとか　そぞろ詣れば旅ごころ　うたた童（わらべ）にかえるかな

の歌を詠まれました。

神宮にお祀りされる天照大御神は、日本の親神様であり、伊勢は国民にとって心の故郷でもあります。皆、親を慕う童のように、純粋な気持ちで訪れるのでありましょう。

第六十二回神宮式年遷宮を五年後に控え、多くの方が伊勢の地を訪れ、日本民族の精神と伝統を伝える神宮を参拝いただきたく思います。

（三重県　椿大神社　権禰宜）

神職

大野一省

鈴鹿市山本町椿大神社権禰宜の大野一省です。今回「神職」と題しまして、私が三年間奉仕をさせて頂き感じた、「神職」にとって何が大切かと言うのをお話しさせて頂きます。

「神職」とは、神と人とを繋ぐ仲執り持ちであります。一般的には、祓いや祈祷ができる人を「神職」と呼ぶと思われていますが、果たしてそれが出来るだけで「神職」と呼んで良いのでしょうか。「神職」として、祓いや祈祷は勿論、それ以外に何か大切な物はないのかと考えますと、まずは、掃除が大切ではないかと思います。神道は「祓いで始まり祓いで終わる」と言われますが、では「神職」は。と考えますと、「掃除で始まり掃除で終わる」これが一番合うのではないかと私は思います。「神職」にとっての掃除は、神社を祓い清めるだけではなく、自分自身・参拝者の心を「清々しく」させることの出来る一種の祓いであると私は考えております。掃除が終わり境内を見渡すと「清々しい」と思いませんでしょうか。私は、奉職して一年目などは「清々しい」とはなかなか思うことができませんで

した。それは、掃除をやらされていると自分で感じていたからだと思います。掃除と言われ境内を掃除し「清々しい」と思えるでしょうか。掃除をすれば境内は綺麗になり、参拝者の方も「いつも綺麗にしてくれてありがとう。」と声をかけてくださいます。「掃除してよかった」と思うでしょうが、それは単なる掃除をした、達成感であり、「清々しい」とは違います。言われてやる掃除では、「清々しい」と思うことは絶対ありません。やはり、自ら進んで積極的に掃除をすることで初めて「清々しい」と思うことができると私は思います。二年目、三年目と奉仕を重ねて、やっとそう思うことが出来ました。私は思います。ごく僅かな当たり前の事を、毎日欠かさずやり続ける事が大切であり、そうすることで神社、自分自身、参拝者を祓い清め、「清々しい」氣持ちにさせることが出来るのではないでしょうか。落葉やゴミが落ちている神社に、御祈祷やお参りに参拝者は来られるでしょうか。掃除を徹底的にし、常に清浄な神社に参拝者は足を運ぶのだと思います。

次に「禊」でございます。みなさんは学生時代、伊勢の五十鈴川に於いて、禊を行ったと思いますが、その時のことを覚えているでしょうか。私は早朝の禊、ただただ寒かっただけで、早く終わって欲しいと思って行っていました。そんな私ですが今では、月に二度禊を行っております。始めは大学を出たばかりで、右も左も解らない状態だったので、何

も考えずにひたすら滝に打たれていたのを思い出します。ただ、そんな中でも内から湧いてくる何かがあります。実際にやってみて初めて解ることで、滝に打たれている最中、体の中から温かいものが出て、それが体を包むような感覚に陥ることがあります。これは、水の神によって内に沈んでいる罪・咎・穢れが体の外に出て、いっきに祓い清められ、森羅万象すべてのものから、新たな氣を戴くことで起きると私は考えております。しかし何かを考えながら滝に打たれてもこれは起きません。一心不乱に「祓え給ひ、清め給へ、六根清浄」と唱えることで、一切の罪・咎・穢れが祓い清められ、新たな気を戴くことが出来るのです。我々神職にとって禊とは、自らの心身を祓い清めるだけでなく、新たな気を戴くことだと私は思います。鳥船第一段の歌い文句に「朝夕に神の御前にみそぎして、皇御代に仕へ奉らむ」と言う詩があります。まさに、この御詩に詠われている詩こそ、神職にとって大切なことだと思います。

掃除と禊はやることは違いますが、祓うと言う意味では一緒のことであり、それを行うことは、神職にとって御祈祷よりも大切であると私は思います。神道は「祓いで始まり祓いで終わる」と先で述べましたが、そのことを実際に実行できるのは、我々神職しかいません。そのことをよくよく感じ、我々にとって何が一番大切かと言うのをもう一度よく考

えて、日々の神明奉仕に勤めていくと共に、掃除・禊にも今まで以上に力を入れていくことが、我々神職にとって一番大切なことだと私は思います。

（三重県　椿大神社　権禰宜）

大学生活で学んだこと

重村正親

私はこの春、皇學館大学を巣立ったばかりの新米神主です。

昔から勉強が大好きだったので、つい六年間も在学してしまいました。今日は学問の話は遠慮して伊勢での学生生活の中に感じ、学んだ事をお話したいと思います。

大学生活の中ではずいぶん沢山の方々と出会いましたが、その中で特に印象に残っている三つの大きな出会いをこれから述べさせて頂き、私の決意をお話したいと思います。

＊　＊　＊

先ずはじめに、私の考えを覆させられた出会いがありました。それは、あしなが募金活動での出会いです。この活動に参加するようになったきっかけは、私があしなが育英会から奨学金を受けることによって大学進学することができたことにあります。

あしなが育英会とは、親を亡くした遺児たちを進学させるために奨学金を貸し出す団体で、その財源は募金や寄付なのです。

私も小学生のころに、父を病気で亡くした遺児の一人です。父は私が現在奉職している東大野八幡神社の前宮司でした。…この伊勢の皇學館大学出身であります。

初めは奨学金をもらっているから仕方ないという思いからの参加でしたが、活動の一環で当時、小学四年生の男の子のお世話をさせて頂き、その思いもかけない出会いから考えが変わり、積極的に参加するようになりました。

その男の子は四人兄弟の長男で、小学二年生そして五歳、三歳の弟がいます。お父さんを二年前に亡くし、お母さんがおひとりで四人の息子さんを育てられていました。

事前にお母さんから女一人で四人の子供を育てることは苦しく、息子達には色々と我慢させている…という話を聞いて、私も幼い頃に父を亡くし、母の苦労を見てきた者として何か役に立てる事がないかと真剣に思い込みました。

その兄弟達と一泊二日を一緒に過したのですが、我々大学生スタッフが用意した一日目のお昼ご飯の時、二つ歳下の小二の次男が長男にお弁当のメインのおかずのハンバーグを指差し、「お兄ちゃん、それちょうだい」とおねだりをしました。

まだ小学四年生の長男は少しの間考え、すぐに弟にあげたのでした。子供達にとってはハンバーグは特別な御馳走なのです。兄弟でも譲りたくないものです。

お兄ちゃんは本当は自分で食べたいはずなのに、それを我慢して弟にあげたのでした。私はその時に、普段の生活の中にも長男には、弟達のために我慢をしていることが沢山あるのではないかと思いました。長男の心の中には「お父さんがいないからお母さんには迷惑をかけられない。自分が弟のために我慢しよう。」という考えがあるのでしょう。その光景を目の当たりにし、私は自分自身の幼い頃からの事を想い起しました。この子供達のために自分に出来る事は何だろうか…。出来るだけの事は叶えてあげたい、このような思いから私のあしなが募金活動は、自ずから力が入るようになりました。

＊　＊　＊

次は友人に誘われて参加したお木曳き行事での出会いのことです。お木曳きとは皆様もご存知の通り、神宮様の式年遷宮のために御用材を旧神領民の伊勢市民が「エンヤー」の掛け声とともに神宮へ運び込む盛大な勇壮な、お祭り行事です。伊勢の各町ごとに結成される奉曳団には厳格な伝統があり、それぞれが高いプライドを持って守り伝えています。

私はこの行事に参加させていただき、ある二十代後半の男性と知り合う事になりました。その方は奥さんと幼稚園に通うお子さんと一緒の参加でした。

先祖代々お木曳き行事に参加されている家庭に生まれ育った方のようで、子供の頃にはお父さんに連れられてお木曳きに参加したそうです。その時は何が何だかわからず、ただ雰囲気や非日常的な感覚が楽しかったという記憶しか残っておらず、成長していく過程の中で、伊勢に根付いたお木曳きの伝統の大切さを学び理解して来たと語ってくれました。

そして二十年後のこの度は、自分が子供に伝統の大切さを継承させる立場だと思って、子供連れての奉仕となったそうです。このようなことを次世代に伝えて行くには何よりも先ず、理屈抜きの経験が大事で理論はそのあとについて来る、とも言っていました。

私は、これこそが伝統文化を伝えていくことの実践ではないかと熱く感じました。

お木曳きの大切さを肌で感じ理解し得たからこそ、これを継承する気持ちが芽生え、自分が大人になった二十年後に、次世代へ伝える為にも子供達と奉仕し、継承することが適うのだと思いました。

親が子に、そして孫に・・・と伝え行かれる様な循環があるからこそ、伝統文化は守り伝えられて行くのだと感じた次第でした。

＊　＊　＊

最後の三つ目の大きな出会いは、学外活動で参加した神宮参拝禊会での事です。

この禊会は、私が生まれる前から毎年五十鈴川で行われているそうです。神主さんもいますが、全国からの総勢百名を越えるほとんどの参加者が一般の方々であります。

それまでの私の印象では、禊祓いの祈りとは、祭祀に関わる神職が心魂の穢れを祓って身を清めるための行事でしたので、一般の方々の参加がこんなに多い事に驚きました。

学校の神務実習でも禊行を学びましたが、学生が行う禊とは大きく異なり、素晴らしいものがありました。とても気合の入った貫禄のある禊で、言葉では言い表せないような深い敬神の念や日本民族としての誇りと自覚を感じさせられ、この禊に参加させて頂いたことによって、とても清々しい気持ちになりました。私にとって神職を志す意識を大きく変えさせられる経験であり、貴重な体験となりました。

このように社会と人々との出会いの中から色々な事を学ばせて頂きました。この貴重な経験を生かし、神職という立場からこれからの時代に何をしなくてはならないかをもっと深く考え、地域に根付いた伝統文化をいかに継承発展させていくべきかを日々の奉仕の中に学んで、このような時代だからこそ、日本民族の自覚のもとに神職としての誇りを失わず、日本文化の大切さや必要性を守り伝えていかなければならないと思います。

ご静聴ありがとうございました。

（福岡県　東大野八幡神社　権禰宜）

自分の体験から神について

木佐木　誠　二

「社頭講話」に付いて、当社では敬神婦人会の月例会を毎月一日に行なっている。そこにおいて約二十分程度の社頭講話としての時間を設けており、神社や神道についての疑問や質問等を時折受けている。今回講演として発表させて頂くのは、その中から熱心な会員からの「神様」について詳しく知りたいとの質問を受けた事による。翌月、さっそく専門書等を参考に古代における神々の形態から中世、近代においての移り変わりをコピー用紙二枚にまとめ説明するも、一部会員の表情から理解を得られていない雰囲気を受けてしまう。その時ふと思った事は、神様とは普段身近な存在として感じているからこそ毎月こうして欠かさず参拝に来られているのではないか、そう考えた時、内容を変更し、身近な存在として受け止められるよう説明しなければならないのではないか、そう思った。又、この事は以前、外祭においても似たような質問を受けた事も思い出した。内容は「地鎮祭を始めお祭をする度、神様は何処の場所にも居られる、納得は出来ても神社の神様と比較して何

か違うイメージを受けてしまう」との事であった。共通することは「神様」の存在をどう理解してもらい、又どう親しみを感じて頂くか、色んな表現での例えがある中、自分の体験を基に話をさせて戴いた。

事の起こりは数年前に遡る。社内での仕事が庶務課に配属されている関係もあって、毎年献酒における回礼で県内を回っていた時の事である。当時、車の機能も進化しナビシステムを付けた車を所有、その甲斐あってか各場所をリセットしてから出発、時折テレビも見る事もあると思い周波数もセットし各放送局が映る事もしっかり確認する。行程も検索機能のおかげで思い通りにはかどり無事終える事が出来た。そこで、早く終えた事を理由に休みを取るつもりでテレビのスイッチを入れてみると、映ると思っていたはずの映像は全く映らない状態になっていた。多分、電波の周波数が合わず画像を捉え切れないのだと思った。行く前はあんなに鮮明に映し出していたのに場所が変わればこんなにも違うものかと思った。この事は何でもない行為ではあったが、神職として成り立ての頃を思い出した。当時杉並区に鎮座する神社に奉職、そこに今の自分の基本となる人と出会う。八十歳を越える年配の方であったが、教わる事の中に「神」とはある意味電波の様な存在であり、念ずる力によって伝わったりもすると教わる。その当時は何を意味しているのか深く考え

る事もなかったのだが、この事を指しているのではないかと記憶として思い出した。

この体験を参考に話をさせて戴く。

「今回、神様の説明をしましたが、案外皆さんが想像している神様とはイメージが違っていたかも知れません。今回は実際、自分の経験から神様について、話をさせて戴きます」ここで外祭での質問と献酒回礼での出来事を報告。

「皆さん、日々生活を送る上で、色んな経験の中から学ぶ事が沢山あると思いますが、時折、神様に見守ってもらっているという感覚を覚える事はないでしょうか。神様というのは常に自然界の中に存在し、特に神威・神徳という強い電波を発しておられる所がお社であり鎮守の杜であると思います。又、言い方を変えれば神様というのは何処にでも存在し、時と場所によっては念ずる事により降りても来られます。ここで例えて言う神様の存在とは、テレビの周波数に依って合えば画像として映し出されるし、合わなければ映し出されません。この行為が神様の存在で、常に神の電波を受ける所に神様はおいでです。もっと言い方を変えれば、テレビはコンセントを入れただけでは映りません、アンテナが有り周波数が合ってこそ画像を映し出します。よって外祭での説明として言えることは、斎場（斎竹）がテレビ本体としての役割を果たし、神籬（榊）がアンテナ

の代わりとなり、降神の儀（声）が周波数の調製ではないかと思います。よって如何なる場所、又は建物の中であってもテレビが映るのと一緒で、お祭中は必ず神様は居られる事となります」

「普段、神様の存在を意識することはあまり無いと思いますが、常に近くにいらっしゃるという感覚を覚えていて欲しいです。こういった意識が人としての礼儀や秩序を守る事となり、犯罪抑止とまでは言いませんが、悪事の抑制に繋がるのだと考えます」

「又、今回神様について説明しましたが、多分神様が沢山いらっしゃる事に整理が付かない方もおられるのではないかと思います。私も一緒で、世の中には色んな方がいてそれぞれ違う様に神様についてもそうだと思います。祭られる背景や時代、地域性によって異なるのだと考えます。一つの枠の中に入れようと思わず、それぞれ特徴や性質を振り分けて整理して見れば少しは理解出来るのではないでしょうか」

最後に「これから先、旅先で色んな神社をお参りされる機会があると思いますが、そこはただ単に建てられたのではなく、地域に住む遠い祖先の人たちが経験や話し合いを元に、その地で一番強い神様としての電波を受ける場所を探し出し建てられたのだと思って下さい。当然、地域の長い歴史や信仰、人々の寄せる思いもありますが、そう言うの

を感じながらお参りして見れば神社の素晴らしさも、もっと良く分かるのではないでしょうか」

以上が講話内容です。

今回「神様」について説明をさせて戴きましたが、今になって考えさせられる事は、神様とはいったいどう言う存在なのか、又精神面においてどう働いているのか、信仰・崇敬する事の意味とは、沢山の疑問がある中、もっと深く追求し、理解できる説明をしていかなくてはいけないのではないか、その必要性を強く感じました。

（鹿児島県　照國神社　権禰宜）

果つることなき大木

畠田明彦

私が初めて神宮を参拝したのは小学校の修学旅行の時で、第六十回の式年遷宮が斎行された年でした。参道の玉砂利を踏む心地の良い音、かつて見たことがない何百年もの樹齢を重ねた太い杉、全てを清めるかの如く凛と流れる五十鈴川。そして何ともシンプルながら荘厳で自然と頭が下がる御正宮の佇まい。御祭神や御由緒についてさほど知識のない子供の私ですら、身が引き締まり、心が洗われたように感じたのを今でもはっきりと記憶しています。

「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」有名な西行の歌です。又「この聖地において、私はあらゆる宗教の根底をなす統一的なものを感ずる」これはイギリスの文明史家アーノルド・トインビーの言葉です。更に「天から降ってきたようなこの建築は、日本固有文化の精髄であり、世界建築の王座である」と世界的な建築家ブルーノ・タウトをして絶賛せしめたお伊勢さん。仏教を奉ずる者も、外国人も、神宮を訪れた人間

は全てそこに「神」を感じ、「有難さ」を感じたのです。

さて、建築家であるブルーノ・タウトが御正宮を参拝し、「日本固有文化の精髄」と感じたのは何故でしょうか。清楚な檜の素木(しらき)造り、柔らかな曲線の萱葺屋根、掘っ立て柱、反りのない軒・棟、棟に並ぶ堅魚木、天に向って伸びる千木。この唯一神明造に対し「最大の単純の中に最大の芸術がある」と著書『日本美の再発見』に記しています。これは飾り気のない「シンプル　イズ　ベスト」の極致を感じ、自分の知識にない最高の建造物に出会った感動を表しています。しかしこれはあくまで表面的なものに過ぎません。唯一神明造を通し、その奥に木々の息吹、日本人の魂を感じ取ったのではないでしょうか。

日本の文化は木の文化とも言われます。ここで少し木についてお話しをさせて頂きたいと思います。

皆さんご存知でしょうか。気品、耐久性、全ての面において最適、最高の建築素材である檜は、約二百年かけてその強度が三十%ほど増し、その後徐々に下がって千年後、やっと伐採時の強度に戻ると言われています。圧縮強度、曲げ強度といった耐久性は他の木と比べものになりません。実際世界最古の木造建築である法隆寺が昭和の大修理をした際、瓦屋根の土を降ろして行くと、屋根の重みで曲がっていた檜の垂木が元の状態に戻ったそ

うです。

次に檜をはじめとする木造建築の優れた点を紹介させて頂きます。

一、耐震性に優れている。木には無機質の人口素材が及ばない、独特の柔軟さと強さがある。木の細胞内が潰れてクッションの役割を果す。

二、火災に強い。大きな断面の木材の場合、表面に着火しても表層にできる炭化層が断熱の役割を果し、有害ガスが発生しにくい。

三、紫外線を吸収し、赤外線を反射する。

四、「フィトンチッド」による抗菌・殺菌作用がある。

五、「ヒノキチオール」による精神安定効果がある。

この様な優れた特性を持つ木の最高峰とも言うべき檜を、目視調査に加え、ガンマ線を使った空洞調査で吟味し、選定された約一万本が式年遷宮で使われます。

唯一神明造は壁が屋根を支える構造になっており、柱が上に伸びて重なっているように見えますが、柱と屋根には隙間が空いていて、柱そのもに重さがかかっていないのです。壁で支えているので加重が均等に分散され、釘を使わない組木なので強度があるのです。事実耐震シミュレーションにより、目を見張る結果が出たと言われています。これは世界

に誇れる建築技術を、遙か古より日本人が有していた証であります。

科学的な分析をする知識のない昔より、我々の祖先は既に木の特性を知っていたのです。木々が我々に与えてくれる数々の恩恵を肌で感じ取っていたのです。木は息をしています。生きています。だから我々を温かく包んでくれるのです。日本人は木に対して常に畏敬と感謝の念を抱き、再生、再利用を心掛け、決して無駄な扱いをする事はありませんでした。

日本を大木で例えるなら、根が神を敬い、皇室を尊び、自然と共生してきた日本人の精神、中心となる幹が皇室と神宮、枝が氏神、即ち皆さんがお仕えする神社、葉や実が国民。そして御遷宮とは、この大木が果つることなく永遠に生き続け、美しく潤い続ける為に必要な「真清水」ではないでしょうか。水が無ければ根が枯れ、幹や枝が朽ち、やがて大木は倒れます。これは日本そのものの喪失に繋がるのです。

では、何をすべきか。青少年への教化です。特に小・中学生への教化です。次世代を担う子供たちに教えて行かなければなりません。家庭での教育はもちろんの事、それぞれの神社で子供たちを集め、お話しをして、体験させる機会を作れば良いと思います。例えば鎮守の杜でサマーキャンプを開催し、カリキュラムに木工教室を取り入れ、そこで木々の恵みと木造建築、特に唯一神明造の良さを教え、そこから日本人の神観念に繋げ、御遷宮

の意義を説いて行けばどうでしょうか。しかし今の子供たちは塾やクラブ活動等で大人以上に多忙です。集めるのに苦労するとは思いますが、神職と氏子総代、或いは敬神婦人会等が連携し、子供たちを惹きつける情操教育の場を企画し、例え少人数でも実行、教化する事に意義があると思います。

（京都府　松尾大社　権禰宜）

家族

石井昌孝

「十円玉と五百円玉、どちらのお金の価値が大きいですか。」

このような質問を受けましたら、皆様はどのように答えますか。おそらく私と同様大多数の方が五百円玉を選択するでしょう。決してそれは間違いではありません。これは、なぞなぞでも、とんちでもありませんので当然の答えだといえるでしょう。

この問いかけは、私が小学校低学年の時に読んだ本からのものです。

知的障害をもった子供がある養護施設の中で生活をしておりました。家庭の理由から家に帰ることは少なく、家族と会える時間は、親が施設に来たときだけでした。親が来る、そして一緒にいられる時間を、その子はそれはそれは楽しみにしていたようです。そんなある日、施設ではお金の価値について勉強が行われました。先生が、

「ここに一円玉と十円玉があります。どちらの価値が大きいですか?」

と質問するとその子は十円玉を選ぶのでした。百円玉と千円札、そして他のお金を比べて

も、ちゃんと大きいお金を選びます。ところが、十円玉と五百円玉を比べたときのことです。その子は価値の小さい十円玉を選んだのです。先生は初め単なる間違いだと思い、その間違いを正そうとしました。しかし何度も、何度も教えてもその子は答えを変えることはなく十円玉を選択するのでした。とうとう先生も根負けし、その子に十円玉を選択する理由を尋ねました。するとその子は、

「十円玉は御母さんの声が聞くことができるお金、だから十円玉の方が大きい。」

と答えました。そうです。この子はちゃんとお金がもつ価値はわかっていたのです。それ以上にお母さんを思う、家族を愛しく大切に思う気持ちが強かったために、公衆電話で使える、お母さんの声が聞くことができる十円玉を選択していたのです。これを読んだとき小学生ながら大きな衝撃を受けたのを覚えております。

私は父を高校二年生の時に亡くしたものの、それまでは、両親、弟と四人家族で暮らしていました。四人いつでも一緒に生活をおくることが言わば当たり前でした。社家の長男として生まれた私の幼い頃の日課は、朝起きて御本殿へ行き地元の小学生と一緒に朝拝をし、朝拝が終わると皆で本殿の清掃。次に家へ帰りご先祖様をお祀りしている神棚に水とお米をお供えするということでした。そしてご飯を頂いて学校へ行っていました。しかし

恥ずかしながらサボってしまう事もありました。ズル休みをした時には流石父親です、そ知らぬ顔で朝食をとっている私の所へきて、

「神様を拝む前にお前が飯を食うな！」

と、きつく怒られました。当時はこれ以上父を怒らせてはいけないその一心で本殿、そして神棚へ向かいました。それもそのはずです。神様に一日のご挨拶もお供えもせず私が私欲をもとめたのですから。我々はなにをするにも神々の恩恵を頂いて生活しております。父はきっと神様、ご先祖様への感謝の気持ちを持つ事の大切さを伝えたかったのでしょう。物心がつくようになり理解できるようになりました。私はまだ結婚をしておらず子供もいません。ですから子供の立場から一例を挙げさせていただきましたが、このように生活をする中で、家族間で多くの事を学んでいくのではないでしょうか。

今日新聞やニュースを見ておりますと日本でも、親が子を、子が親をといった目を背けてしまいたくなるような、理由も理解することの出来ない突発的な事件が連日のように起こっております。家族とは血縁関係を基にした生活共同体の一種で社会を構成する一単位であるといわれておりますが、このような事件が起こるのは家族間が希薄になってきている現状が理由ではないでしょうか。そこで一つ提案です。我々神職はまず次世代を担う子

供達へ日本人独特の文化を知ってもらい日本人であるすばらしさをもっと教えてみてはいかがでしょうか。きっかけとしましては色々あげられますが、年中行事や日本人としての通過儀礼もっとよく理解してもらえるようにし、子供達が神社に来る環境をつくれればそこには自然と親、大人が来ます。一緒に参拝しそういった通過儀礼などを経験することで、子供は感謝の気持ちや家族の暖かさ、命の尊さというものを学んでいくのではないでしょうか。家族、それは本当にかけがえのない、大切なものであります。冒頭でお話させていただいたように例え身は離れて暮らしていても必ず絆で結ばれております。

「十円玉と五百円玉、どちらのお金の価値が大きいですか。」

我々日本人一人一人が、今一度家族のあり方を考えていくべきではないでしょうか。

（京都府　松尾大社　権禰宜）

言ひし言葉ぜ忘れかねつる

鈴木明子

父母が頭かき撫で幸くあれて
　言ひし言葉ぜ忘れかねつる

『万葉集』防人歌の中の一首です。防人の兵として出てゆく自分の頭を抱くようにして撫でて無事でいろよと言った父母の言葉が、忘れられないという意味ですが、親子の情愛に胸が締め付けられる思いです。

ところが昨今の新聞紙上を賑わすニュースを見ますと、古代の日本人のそんな豊かな愛情はどこへやら、ひょっとして宇宙人に操られているのでは?とSFまがいの思いさえ湧いてきます。いや、そんなはずはない。私達日本人は古来より親子の情愛も深く、他人を傷つけることを好まず（一時期、日本人は諸外国よりイエスマンだと言われたくらいですから）正直、勤勉等の素晴らしさを持っている民族だということを万葉の時代より歌集を通じて探っていき、皆さんに訴えたいと思います。

まず万葉人の様子からですが、人情歌人山上憶良の長歌

瓜食めば　子供思ほゆ　栗食めば　まして偲ぬはゆ　いずくより　来たりしものそ
まなかいに　もとなかかりて　安眠しなさぬ

瓜やおいしい栗を食べると子供に食べさせてやりたくて子供が偲ばれる。子供の姿が目の前にちらちらして眠ることができない。と歌います。たぶん主張先での歌なのでしょう。

その返し歌として有名な

銀も金も玉も　何せむに　勝れる宝　子にしかめやも　がでてきます。

又、息子を失ったときの悲しみを万葉人は

立ち躍り　足すり叫び　伏し仰ぎ　胸打ち嘆き　手に持てる　我が子飛ばしつ　世の中の道

と気も狂わんばかりに歌います。

昔はこんなに親子の情愛が深かったのです。防人歌にも切々と歌われています。

忘らむて　野行き山行き　我来れど　我が父母は　忘れせぬかも
我が母の　袖持ち撫でて　我が故に　泣きし心を　忘れえぬかも
唐衣　裾に取り付き　泣く子等を　置きてそ来ぬや　母無しにして

この時代の人々は、千年後の未来に親子で亡き者にしあう時代が来るとは、夢にも思わな

かったに違い有りません。

さて、時代が進み平安時代の親子の情愛はどうなったことでしょう。『古今和歌集』に一首だけあります。

たらちねの　親の守りと　あいそふる　心ばかりは　せきなとどめそ

母親の私は陸奥まで行かれないので、我が子の守りとして添えてやる私の心だけは関所の役人もせきとめないで、任地まで行かせてください。というのです。

老ひぬれば　さらぬ別れも　ありといえば　いよいよ見まく　ほしき君かな

在原業平の母は、息子に会いたい気持ちをこのように切々と歌います。やはり親子の情愛はしっかりと愛情で結ばれております。

さて、鎌倉時代はどうか『新古今和歌集』を見ますと、哀傷歌の中に親子兄弟を失った悲しみが切々と歌われております。

その後の日本の様子は、安土桃山時代に渡来したフランシスコ・ザビエルが友人ゴアに送った手紙の中の（この国の人々は、今までに発見された国民の中で最高であり、非常に優れている。これほど節操のある人々を見たことが無い。）という言葉や江戸末期に下田に総領事として来航したハリスの日記、（私は正直で勤勉、幸福そうなこの国を開国させるこ

とが、この国の幸せとなるか疑わしくなる。）という言葉で窺い知ることができるのではないでしょうか。

という理由で、今こそ私達はかつての日本人の持っていた情愛の深さ、人情、思いやり、正直、勤勉を取り戻し、

我が国は　神の末なり　神まつる　昔の手振り　忘るなよ夢

と御製に詠われた日本人になっていこうでは有りませんか。

（滋賀県　立木神社　権禰宜）

神国日本

村瀬佳子

「大工だったじいちゃんが、僕が生まれる少し前、三重県にある伊勢神宮の建替えに手弁当で奉仕に行ったらしいんだ。あともう少ししたら、じいちゃんが造った建物が六十年の役目を終えるらしいんだ。何かものすごい事のような気がする。」

五十代になる男性がこのような話をして居られました。ご本人も建築関係の仕事をして居られます。自分の年齢より多い六十年という歳月をどのように捉えるか、おじいちゃんの足跡を知っているその男性はとても幸せな方だと思います。

御遷宮というのは二十年に一回、それだけでもすごい事だと思っていたのに、六十年という数字にもつながるのですね。なぜ六十年という言葉が出て来たのでしょう。広い広い伊勢神宮は内宮の一番奥には天照大神様がお祀りされている「御正殿」という建物があります。その建物を支えている太い太い二本の柱を「棟持柱」と言います。この柱は御正殿での勤めを終えた後、さらに二十年、もう二十年と鳥居として役目を果たすのです。六十

年勤めを終えてもなお大事に大事に使われます。

林業を営む人が、木を植え、育てます。けして自分が使う木ではありません。孫やひ孫が使う木を植えているのです。自分が切って商いをしているのは自分の御先祖が植えた木なのです。そこから深い深い感謝の心が生まれます。最近は海で漁をする人達が一生懸命山に植樹に出かけます。良い森がないと、良い漁場が育たないのだそうです。海と山とはつながっているのです。本当は沢山の人がつながって生きている証しがそこにはあります。森がなくては食べ物が育たないのですね。緑が無くては食べ物をいただく事は出来ないのです。伊勢の神宮をはじめとして、神社や日本人が自然を大切にするのはとても素晴らしい事なのです。

さて、二十年に一度の伊勢神宮の遷宮には、子どもが「物忌」という役割を持って登場します。これはとても重要な事です。また、来年平成二十一年、御遷宮の行事の一環として「宇治橋渡始式」が行なわれます。内宮への参拝の道にかかる宇治橋は大きな立派な橋です。そこを始めに渉るのは「渡り女」と呼ばれる老女です。彼女に続きその夫、子ども夫婦、孫夫婦と三代揃って渡り、その役目を果たすのです。三世代の夫婦が一緒に居るというのは本当に素晴らしい姿です。

今に始まった事ではありませんが、成人して親と一緒に生活しなくなった人が増えました。子どもは親元を離れて一生懸命生活をしています。かつては各家に家業があって、跡継ぎを教育して次の世代を担う後継者を育てていました。家業を離れて奉公に出る人。現代風に言えば会社勤めに出た人もそうです。新人からやがてはその会社の機動力となる人材を会社自身が育てていたのです。必要のない人はこの世に居ないのです。

十代の後半から六十代ぐらいまで、多くの人は何もかも自分で出来ると考えています。しかし、年を取ると、どんなに頭ではやりたいと思っていても体が思うようにならないらしいのです。もちろん九十歳を過ぎても元気な方は元気です。同様に赤ちゃんから幼子も自分一人では生きる事が出来ません。だけれども本当に大切な存在なのです。幼子は、どんなに悪事を働いた人にでも分け隔てなく清らかな笑顔を向けるはずです。何よりも忘れてはならないのは十代後半から六十代の人達もけして一人では生きられない事です。

人が生きていく時に大切なのは何かと申しますと、自分より相手の事を考える思い遣りの心です。自分以外はみんな神様だという謙虚な心を持つ事です。その上で自分に出来る役割は何かを一生懸命考えて行動する事が大切です。自分さえ良ければそれでよいという考えは愚かです。みんなで協力しながら次の世代を育てている誇りを持ちましょう。

素直さや明るさというものは子どもが教えてくれます。その子どもも、親だけの力では育ちません。沢山の人が日となり蔭となり支えているのです。それに気付けたなら素直に御先祖様への感謝の気持ちが生まれ、自分自身を大切にする事にもつながるのです。

日本には神様が沢山お出でになります。中でも一番尊くて最高のお手本を示して下さるのが伊勢の神宮様なのです。これは世界中に誇れる日本人の生き方なのです。それが分かれば、笑顔がいっぱいの幸せが生まれます。もちろん私も幸せです。

（明治天皇御製）

わがくには神のすゑなり神まつる昔のてぶりわするなよゆめ

（昭和天皇御製）

天地の神にぞ祈る朝凪の海のごとくに波立たぬ世を

（広島県　長束神社　権禰宜）

命日祭を終えて

小野日隆

本日はようこそお参りくださいました。ご神前に皆様方お参りのもと、本日の祥月命日祭を御奉仕申し上げました。只今護国神社には先程お名前をお読み申し上げました、皆様方の血に繋がります御祭神をはじめて、大分県ご縁故の御霊四万四千四百五十二柱をお祀り申し上げております。こうして年々歳々のご通知を申し上げながら、それこそお正月から大晦日まで毎日このお祭りを御奉仕申し上げている訳ですが、皆様方も今日は夫々縁の御霊たちの大前に明け暮れの事どものご報告を頂かれた事と存じます。御霊たちも皆様方のお元気なお姿を、あの御殿の中から御覧になられてさぞかしお喜びのことであろうと拝察を申し上げる次第であります。皆様方には毎年の事ながら、本日もわざわざ遥々お参りをいただきました。皆様方がこうして忙しい中を時間を差し繰り、遠い所を、電車に乗り、バスに乗り、またハンドルを取ってお参りを頂くということは、それぞれ縁の御霊たちにお会いになられるために来られているのでありましょう。護国神社には、お父さんが居る、

おじさんが居る、兄貴が居るんだ、そんな思いでお参りされていることと思います。言い方は適当ではないかも知れませんが、皆様方がこうして護国神社にお参りされるという事は、ある意味お墓参りと同じようなお気持ちの方も居られるのではないかと思います。このお社の中には間違いなく皆様方縁の御霊たちが、国護り（くにもり）の尊い神として神鎮まっておられます。その生命と引き換えに国を護って下さった誠に尊い神たちであらせられます。その御霊たちの大前にこうして毎日毎日、慰霊とそして感謝のお祭りを続けている訳であります。

さて、護国神社やまして靖国神社はなにかと政治的な事ばかりが取りざたされます。総理大臣が参るとか参らないとか、閣僚の参拝が公的であるとか私的であるとか、A級戦犯がどうだとかこうだとか、県知事がお供えした玉串料が憲法違反だとかどうだとか、慰霊の祭祀はそっちのけで毎年テレビや新聞を賑わしております。それも批判的な報道が多いように思われます。まさに、親の心子知らず、ご英霊の心国民知らずであります。実に情けなくも腹立たしい限りです。色々な事を、色々な人が、色々な所で言います。しかし、だれが何と言おうとはっきりしている事があります。それは大分県で言えば四万四千余柱の御霊たちが、靖国神社で言えば実に二百四十六万余柱の御霊たちが亡くなっておられる

という厳粛な事実であります。この御霊たちは間違いなく死んでいかれた訳であります。自分の意思とは違う、大きな時代の流れの中で二つ無い生命を国に捧げられました。この、正に人柱とも言うべき尊い犠牲の上に今のこの国の平和が、この国の繁栄があることはまぎれの無い事実であろうかと思います。この御霊たちに対して我々はいくら感謝しても感謝し尽くせる訳ではないのでありますが、御霊たちが少しでも安らかにお鎮まり頂くためには、皆様方ご遺族の皆様方がこうしてお元気なお参りをなされる事であります。御霊たちが最後の最後まで気にかけておられた事、案じておられた事はこの国の行く末と皆様方の身の上のことばかりかと思います。そういう意味でも皆様方の明け暮れが穏やかであればあるほどに、お幸せであればあるほど御霊たちはご安心なさるに違いないと思います。

ご英霊が残された手紙があります。昭和二十年六月二日にフィリピンルソン島で戦死をされた愛知県出身の陸軍伍長、鈴木三郎命がお嬢ちゃんに宛てられた手紙が残っています。ご両親や、奥様に宛てて書かれた手紙に続いて「千鶴子」というお嬢さん宛ての手紙をご紹介しましょう。奥様への手紙の最後に「千鶴子はまだ小さくてなにもわからぬが、学校へ行く様になってから見せてくれ。」と書いてありますから、まだ小さなお子様だと思います。その手紙にはこう書かれています。

チヅ子、オマヘノ父ハ、イマ、ヤスクニジンジヤデ、チヅ子ノゲンキナスガタヲミテヨロコンデヰル。
シツカリベンキヨウシテ、ヨイコドモニナツテ、オカアサンヤ、ヤスクニジンジヤニヰル、オトウサンヲ、ヨロコバセテクダサイ。
オトウサンニアヒタクバ、ヤスクニジンジャニキナサイ。
昭和十八年七月二十九日

千鶴子ちゃんは、千鶴子さんはお父さんに会うためにきっと靖国神社にお参りされたことでしょう、そして、お父さんはお父さんで首を長くしてお嬢さんのお参りを待っておられたに違いありません。戦死なされて何年後でしょうか、お父さんとそのお嬢さんはしっかり靖国神社のご社頭で再会を果たされたことでしょう。皆様方も然りであります、皆様方の御霊も然りでありましょう。本日、今、皆様方はここで夫々御霊たちと御対面をなされました。しっかりと魂の交流がなされたのであります。双方のお喜び定めしと存じます。どうかこれからもこのお参りを続けてもらいたいと思います。家族の事、近所の事、田舎

の様子そうしたご報告のお参りを頂きたいと存じます。御霊たちはきっと皆様方のお参りを待っておられます。この命日祭は御扉をお開けして御奉仕申し上げます。僅かな時間ではありましょうが、祭典の間は、亡くなられた御霊とわざわざ遥々お参りをされた御遺族の皆様方が一つになられる大事な時間と考えています。この御扉を開け閉めする音のことで、随分昔に息子さんの命日祭でお参りをされたお婆ちゃんの言葉を思い出します。最初に開けるギーっという音は「よう来たのう」と聞こえる、最後に閉めるときの音は「また来いよ」っと聞こえると、そんな話をしみじみとされていたことを思い出します。いつも申し上げているのですが、いくら立派なお宮を建てて、いくら立派なお祭りをしてもそこにご参列いただく皆様方のお姿が無ければ、御霊たちは寂しい思いをされるのではないでしょうか。ご神前にお座りいただいている皆様方のお姿が何よりの「みたまなごめ」であります。

毎日暑い日が続きますが、どうか皆様方にはくれぐれも御身お厭い頂きまして、こうしてご神前に何よりもお元気なお参りをいただきたいと思います。本日はようこそお参り下さいました。

（大分県　大分縣護國神社　宮司）

昭和の日によせて

中嶋俊史

ただ今は昭和祭、滞りなく斎行いたしました。昭和の日が制定されまして誠に喜ばしい限りですが、これを機に私たちは益々昭和天皇のご偉業、ご威徳をより一層心に留めていかなくてはならないと思います。

さて、本日は終戦後のご巡幸について、我が郷土におけるご様子をお話したいと思います。昭和二十一年、神奈川を皮切りに、昭和二十九年の北海道のご巡幸まで、総日数百六十五日にわたって、陛下は沖縄を除く全国四十六都道府県をくまなくおまわりになられたのでした。

鳥取県には、昭和二十二年十一月二十七日から二十九日までの三日間、ご滞在になられました。

十一月二十七日、京都御所をご出立になられた陛下は、お召し列車にて山陰本線を一路西へと向かわれました。迎える六十万県民は、この日をどれだけ待ちわびたことでしょう

か。迎えるもの皆が、晴れんことを願ったのですが、五輛編成のお召し列車が、鳥取駅に滑り込んだとき、みぞれ交じりの初雪が降っていたのでした。まあこれも山陰らしくて風情があってよかったのかもしれません。

最初に鳥取県庁へ。県会議員、県庁職員とお会いになったあと、奉迎場へ向かわれました。会場は鳥取城下の公設グラウンドでした。集まった県民の数は約一万五千人。引揚者、傷痍者、戦災遺族など、人々は陛下のお越しを今か今かと、時々降りかかる雪の中で、整然と待っていたのでした。やがて君が代の演奏が始まると、お召し車が会場に到着しました。陛下より、慰め、励ましのお言葉を賜った県民は、どれだけ勇気づけられたことでしょう。全国どこの奉迎場でもそうであったように君が代の大合唱と万歳の声は空にこだまし、轟いたのでありました。

その後、県立図書館、国立鳥取病院、鳥取育児院をご視察になったあと、鳥取駅から倉吉の駅に向かわれたのでした。この日の宿には三朝温泉の岩崎館が選ばれました。倉吉から三朝温泉までの沿道には、提灯を掲げて歓迎する人々が列を成したということです。

さて二日目の朝です。三朝温泉は世界一のラジウム温泉と言われていますが、陛下は前日に放射能の含有量についての実験をご覧になりたい旨をおっしゃっていました。それを

受けて大島博士は早朝にラジウム含有量についての簡単な実験を披露されたのでした。ここでは学者としての陛下のお姿を垣間見ることができます。

この日も国立三朝温泉療養所、倉吉中学校に設定された倉吉奉迎場、成徳小学校、郡是製糸株式会社などなどを忙しくおまわりになったあと、また列車で移動されて、大山開拓村の開拓事業もご視察になったのでした。

さて、さらにお召し列車は西へと向かい、午後三時三十分、米子駅にご到着になりました。米子市の奉迎場は啓成小学校で、ここでも多くの国民が陛下を歓迎しました。雪を頂いた大山を背景にして、万歳の声が響き渡りました。

米子での宿泊は坂口邸でした。個人の邸宅が宿泊所に選ばれたことはほとんど例がないということです。

三日目の朝、陛下は坂口夫人に手料理のお礼を述べられて、ご出発。米子市立第二中学校と、明道小学校をご訪問になられました。教員、児童、生徒皆が感激のうちに陛下をお迎えし、感涙にむせぶ者、この地でも多数だったということです。

さらに陛下はお車で、境港市を訪問されました。かつて皇太子時代にお召し艦「香取」にて、美保湾に入港されたことがあり、思い出の地でもありました。ここでもまた、多く

の人々の心を癒され、大きな感動を残して行かれました。

最後に再び米子にお戻りになり、市役所に立ち寄られて、次の訪問地の島根県へと向かわれたのでした。

簡単に鳥取県における行幸のご様子を述べました。熱狂的な歓迎ぶりは日本全国どこへ行かれても同じでした。新生日本、平和国家日本を建設するために国民とともに歩まれる陛下のお姿が、国民を勇気づけ、戦後復興の原動力となったことは歴史を見ればあきらかです。

最近は「昭和」という時代を題材とした書物が多く出版され、昭和ブームというようなことも言われています。また時々は昭和という時代を振り返りながら、この平成の御代を見つめ直すことも大切なのではないかと考えます。この日本国が進むべき方向を誤らないためにも、昭和史を今一度、検証してみるということも必要なのではないかと思います。

（鳥取県　壹宮神社　禰宜）

神主を志したとき

多田利子

私が神職の資格を頂いたのは、今から十八年前の平成二年の階位検定講習会でした。その時は四十二歳、それまでは娘時代から浪速神楽や巫女をしながら、今は亡き神職の父の補助をしていました。

私は四人兄弟の末っ子で、父が四十五歳、母が三十九歳の時の子供です。物心が付く頃には二人とも『おじいちゃん、おばあちゃん』のイメージしか無く、友達の若いご両親が羨ましかったのを今でも覚えています。一番上の姉が嫁ぎ、上の兄、その次の兄も結婚をすると、当然私と年老いた両親だけが残りました。その頃は「それじゃあ、わたしが神主になって神社と両親を守っていこう」などという考えは全く無く、老いた両親の手助けをして毎日を過していました。

やがて私も結婚をし、幸いにも主人が私の両親や神社の事などに理解があり、結婚後も神社の近くで住まいをしながら毎日神社へ通いました。私にも娘が二人でき、その娘たち

に神楽舞を教え、主人は祭りの準備や後片付けを手伝ってくれました。家族という力強い協力者が増え、時代と共に神社も活気づいていきました。

しばらくはこの状態で両親の事や神社の事をして来ましたが、父が八十歳を過ぎた頃から、耳が遠くなり足元もふらつく様になり、出張祭の日時をまちがえた事もありました。父も母もしっかりとした気丈な人でしたから、そんな事は今まで一度も無く「年のわりにしっかりしてるねん。これも、神さんのお陰や」と言っていたのが全く言わなくなり、それからというものは、年々歳と共に母が今までしてきた事も私がする様になり、父の仕事まで私の肩にかかってくる様になりました。しかし、それでもまだ私は、神主になる気はありませんでした。女性が出来る仕事ではないと思いこんでいたのかもしれません。

ある日父が、拝殿でいつものようにご祈願の人にお祓いをして、私は巫女で（巫女といっても四十歳ですが）父の足元に気を配りながら、父がふらついたら支えなければと思って見ていました。父はお祓いを済ませ、ふらつきながらも神楽殿をなんとか昇り、次は祝詞殿へと向かいました。祝詞殿の段差の所で、その足を上げては下ろしふらつきながら繰り返しても、どうしても一歩目の足が上がらないのです。見るに見かねて父に手を添えて

一緒に祝詞殿へと昇りました。その時、年老いて小さくなった父の身体が少し震えていました。さぞかし悔しかった事と思います。手助けをしてもらわないと昇れない祝詞殿の段差を遠く感じ、やり切れない気持ちであったにちがいありません。この日父と一緒に祝詞殿に昇って実感しました。「上の方から神様に頭をコツンと叩かれたような気がしたのです。この祝詞殿に上がらなければ。今まで巫女として父と一緒に神様にご奉仕して来たのに、私はなにをして来たのだろう。神様に申し訳ない。神社を守っていけない。年老いた両親を安心させる事は出来ない。」と考え、神職への道を進む決心をしました。

しかし、神職の資格を頂いたというだけで神社のご奉仕が十分に出来るものではありません。氏子さんや参拝の方々から尋ねられる事はさまざまで、申し込まれる祀り事も色々です。他に、ベテランの職員がいるわけでもありません。父は高齢ということもあって十分な指導もしてもらえません。講習で学んだ基礎を頭に置きながら、『諸祭式要綱』の二冊の本を広げ勉強する毎日でした。

あれから十八年、私が神職になって安心したかの様に、母が八十歳、その五年後に父が九十一歳で亡くなりました。今は、主人も会社勤めをしながら通信教育で神職になり、現在は宮司として務めさせて頂いてます。娘二人も嫁ぎ、長女が神社の近くで住まいをし、

権禰宜として、又その娘婿が祭りの準備や後片付けと手助けをしてくれます。そして孫娘が神楽舞の巫女として一緒に年中行事を進めてくれております。「ん・・・・・昔どこかで見た様な光景ではないか。」

江坂の小さな神社ですが、神社をお守りしていく体制は家族のお陰で整いました。このまま、娘から孫娘へと伝えていけたらと願っております。

今年私は還暦を迎えました。亡くなった父の歳まで元気に神様にご奉仕出来たら幸せです。

（大阪府　素盞嗚尊神社　禰宜）

奉務を通じて学んだこと

畠山　智

私は、神職となり現在務めている御社に奉職してまだ一年ちょっとの駆け出しの神主ですが、日々の奉仕を通じて様々な事を学ばせていただきました。

私の実家は特に社家と言うわけではなく、私自身も大学では経済学を学び、その後に國學院大學の神道学専攻科に於いて何も分からない所からスタートして一年間神道について学んだだけという状態で現在の御社に奉職させて頂き、やる事全てが初めての経験で、始めの内はなかなか大変な事も多かったのですが、そんな中でご祈祷や例祭の奉仕、毎日の境内の清掃、また参拝者や崇敬者の方々とのふれあいを通じて少しづつですが、漸く神職として自分自身が成長していけていると言う事を感じる事ができるようになってきました。

このように奉職してから色々なことを学ばせていただいているわけですが、その中でも神職にとって最も重要な事、信仰心を強く持ち常日頃からどんな時も神様に感謝する心を持つと言うことの大切さを学びました。神主なら信仰心を強く持つということは当たり前

だろうと怒られそうですが、これは私自身の経験談というより失敗談なのですが、少し前に朝から色々と予定がつまっていてとても忙しい日があり、そのときに普段毎日行なっている本殿、境内の掃除をいつもより軽く済ませてしまったことがあります。自分の中では忙しいから今日はこんなものでいいだろうという軽い気持ちでいたのですが、後で同じ御社に奉職している先輩に「神様の周りを綺麗にさせていただくのに、こんなものでいいやとかそういう軽いいい加減な気持ちではだめだ、神主はどんな時も神様に奉仕させていただいているという気持ちを忘れてはならない。」というお説教を受けました。そのときに日頃の自分の奉仕する態度を振り返ってみていつの間にか、ご祈祷をやらせていただいたりしていくうちに「自分もなかなか神主らしくなってきたなぁ。」と勘違いして満足してしまい一番大切な事、信仰心、神様への感謝の心を疎かにしてしまっていた事、そして神様に奉仕させていただいているはずが、いつの間にかやらされていると感じてしまっていた事に気付きました。また自分自身の神主としての中身の薄さというものを痛感しました。それからは考えを改め、どんな事に対しても自分なりに全力で取り組み神様に奉仕させていただくという事の素晴らしさを感じ、常に感謝の気持ちを持って奉仕するということを心がけ、そうすると不思議と掃除一つにしても今までになくとても清々しい気持ちでできる

ようになりました。

このようにまだまだ神主として未熟で足りない部分も多々あると思いますが、奉職して最初の一年目で神主としてとても大切な信仰心、神様への感謝の心を学ぶことができ、ようやく神主としての第一歩目が踏み出せたように思いました。

神宮では平成二十五年に第六十二回式年遷宮が行なわれようとしていますが、日本人の宗教意識の低下が叫ばれ神社への参拝者の数も減少の傾向にあるこの時代において、昔からの美しい伝統を守り、絶えることなく続けられているこの式年遷宮は日本が誇れる素晴らしい神事であり、この遷宮を目の前に控える今もう一度信仰心の高揚をはかり、また神様への感謝の心を強く感じることが必要だとおもいます。

私は、これからももちろん神主として生きてゆきたいと思っていて、当然これから先まだまだ学んでいかなくてはならないことは山ほどあると思いますが、信仰心を強く持ち、常に神様への感謝の心を忘れずに、また神様のもとへ集まってきて下さる人達のお手本となれるような中身のしっかりとした神主になっていけるように日々精進していきたいと思います。

（京都府　籠神社　出仕）

至誠通神
―あすは晴天―

大野康孝

桜花繚乱と咲き香る中に、只今滞りなく月例の安全祈願祭の儀、奉仕修めました。

さて、先月は大変恵まれまして、二度も伊勢に参り、御遷宮の諸祭儀とその準備進行の凛たる息吹を感じながら、内宮近くの神宮会館に宿泊、研修に励んでまいりました。

特に、後期の三月二十三日・二十四日両日開催の『神宮参拝禊研修の集い』は、まことに尊き極みでした。百十七名もの全参加者が厳しい神の試練によく耐えて、一人の落伍者もなく、言語に尽きせぬ程の感動裡に、神国日本の道理を確と魂に刻むことが出来た次第でした。

皆さんの中には、これまでにこの禊行を体験された方もおられますので、今日はその貴重な体験と感動をお伝えさせていただきます。

＊　＊　＊

恩師中村武彦先生は、『神宮参拝禊会の禊は、自己一身の罪穢れを祓え清めるだけではなく、国の禊―維新を実現する為の青年のみそぎ』とその意義を端的にお示し頂きました。「真に我々の禊はそうありたい」と固く決意し、昭和五十年代初めから三十有余年に亘って、北は北海道より南は沖縄県に至る、全国各地の道友同志の参加を得て発展的に継続、毎年開催して参りました。その趣旨は、ひたすら敬神尊皇の赤誠を錬磨する事にあります。

＊　＊　＊

それでは、本年の禊会のお話を致しましょう。

神都伊勢に結集した私達は、先ず外宮に正式参拝を致しました。神宮の杜深く颯々たる清涼の気に包まれて緊張に引き締まった益良雄達の面構えは、凛として実に爽やかです。

続いて、第六十二回式年遷宮御敷地を拝観。御遷宮の大なる意義を説明する私の話を皆、目を輝かせ潤ませながら聴いてくれます。…域内全ての別宮巡拝を終え、序で倉田山を訪ね、倭姫宮に参拝。深い常緑樹に覆われた宮域は、殊更に神気に満ち溢れています。

自ずから畏敬の念も深まり、姿勢を正して粛々と参進する程に、御祭神より草薙の剣と火打ちとを賜って出征された、日本武尊の神話が髣髴と浮かんで参りました。

会館に戻り一同揃いの純白の作務衣に着替え、午後七時半よりあらためて開講式です。

続いて神典講読、禊行の修礼へと進みます。道彦は私、助彦数人が付いてくれます。「祓戸大神、祓戸大神」と振魂をしつつ大御名を瞑目合唱。禊祓いの神歌を奉唱しながらの鳥船行事には一同眼を輝かせ、静動の祈りの業を真剣に懸命に、稽古修めゆきます。講義と修礼全てが終了したのは午後十時半でした。…これからが楽しい懇親の直会ですが、本命の禊行と内宮参拝は明朝です。皆われを忘れぬように…。外は雨が降ってきたようです。

＊　＊　＊

午前四時半起床。緊張の気配が館内に満ち満ちています。案の定、ドシャブリの雨です。白装束に身を固めて一階ロビーに集合すれば、すでに地元伊勢の参加者諸君が到着しています。国旗を掲げその旗手の下に点呼を取れば、紅二点を交え総勢百十七名です。

「一人の落伍者も出ぬように。よぉし！皆気を張って。出発！」ドシャブリの激しき風雨の中に四列縦隊の一行は、エッサァエッサァと掛声高く勇ましく、五十鈴川辺の禊場目指して一斉に駈け出しました。たちまちに雨に濡れた作務衣が肌に纏わりつきます。

エッサァエッサァ、エッサァエッサァ…、禊場に到着しました。…事務局準備班のヘッドライトに映し照らされた五十鈴川の流れは速くとも、未だ清らかに澄み切っています。

明治天皇御製

國民もつねにこころをあらはなむ　みもすそ川の清きながれに

各々直ちに脱衣、冠袴の凛々しき姿に直り整列。「祓戸大神、祓戸大神」と大御名を唱えつつ振魂に精神を集中します。…打ちつける激しき雨は、目も開けられぬ程です。

イエェーイ！道彦の掛声のもと二拝。続いて全員による朗々たる祓詞の大奏上です。再拝拍手一拝。…よぉし！大丈夫、気は凛々！「祓戸大神・祓戸大神」と念唱しつつ円陣を組みながら大きく展開、禊行の所作を一糸乱れず懸命に行います。

＊　＊　＊

天津神国津神たちみそなはせ　思ひたけびて我が為す業を　　川面凡児

山をもゆるがすが如き青年若人達の生命がけの大禊です。…激しき雨に加え風もまた出てきました。決して事故が起きてはならない、一人の落伍者も出さぬように…。緩めば命を損なう！（百人以上をも導き、生命預かっての禊なのです。）

「生魂！足魂！玉留魂！」「国常立命！」イーエッ、エーイッ！雄叫び雄ころび気吹の弥業…。粛々と神の試練によく堪えて禊の神行は進みゆきます。

イエェーイ！瀧の如き雨にうたれながら、清流五十鈴川の千古尽きせぬ流れの中にめで

たく全員が進み得ました。…みな肩まで浸かり、祓戸大神の大御名を雄々しく奉唱して精神を集中します。…むしろ水中の方が身魂ともに安らぎます…。

続いて凛たる大祓詞の奏上です。…急流に我が身を流されぬようにと水面下は左右の足を大きく踏ん張っています…。そうして国歌君が代の大合唱を繰り返すこと二回。…朝まだき神路山の神域深く天照皇大御神も聞召し給えと、純粋無雑一心不乱の清らなる澄み切った祈りの極みの斉唱です。

ああ、涙が尽きず流れて止みません。…参加者みながその様です…。

禊祓いの熱い祈りの神業は、愈々昂まり進みゆくのです。

＊　＊　＊

禊して祓へば清しかむながら神代ながらの神の身となる　　川面凡児

エッサァエッサァ、エッサァエッサァ…、終に天地自然の神々の息吹に皆の心が一体と同化し、大きくむすばれました。…八開手一拍手、おめでとう。…弥栄！

厳しき神の試練を乗り超えて一人の落伍者もなく、ああ、遂に今年も無事に禊の神業を修め得たのでした。…未だ闇の戸張りは閉ざされ、雨なお勢い弥増して冷たく打ち叩き、風は依然として吹きつけています…。

しかし、皆は気合十分。打ち震えながらも明るい笑みが浮かんで見えます。エッサァエッサァ、エッサァエッサァ…、力強い掛声を発しながらの雄々しい帰還となりました。

午前七時朝食、窓の外は大雨です。しかし、食前食後の作法の和歌の朗詠も皆力が漲っています。…事務局から日程説明等、連絡事項が発せられました…。

各部屋整頓、各自荷物移動の後に午前八時二十分ロビー集合。皇大神宮の正式参拝・域内別宮巡拝をへて御神楽奉奏の儀を修し帰館。午前十一時より会館三階講堂にて記念講演。その後、閉講式・直会と進み修めて午後一時閉会との事です。

…雨天参拝のため、神宮会館にて人数分の傘を準備済みだそうです…。

しかし玄関前に整列中、サッと雨が止んだと思うや雲が切れ、燦々たる陽光が何と一同を指し照らし始めたのでした。…夜来の雨に洗われた大気が澄み渡って目にするもの皆キラキラと光り輝いています…。ああ、出発直前にまさに奇跡が！

ああ、私達のあかき心が神の御心に適い、至誠が天に通じたのでしょうか…。

明治天皇御製

目にみえぬ神の心にかよふこそ　人の心のまことなりけれ

ああ、至誠は神に通じるのです！神様は必ずや導き給うのです。
「明日は晴天！」固く信じて神国日本・皇民吾れの祈行に邁進しましょう。

（熊本県　本渡諏訪神社　宮司）

常識について

神武徳彦

日頃、「常識」・「非常識」という言葉をよく使うと思います。「常識」を辞書で引いてみますと「健全な一般人が共通に持っている、または持つべき、普通の知識や思慮分別」とあります。

「なんだ、そんなこと知ってるよ。」という人が大半だと思います。

先日、神社でのご奉仕の時に、この常識について考えさせられる出来事がありました。

授与所でのことですが、若い二人連れの参詣の方が御札を見て、「この家内安全ってどういう意味かな。」もう一人が少し悩んで「奥さんが安全でいられるっていうことだよ。」「嫁さんだけじゃなく家族全員守ってもらえるお守が欲しいんだけどなあ。」と会話していました。この後、私にお尋ねいただきましたので説明させていただいたところ、無事に家内安全の御札をお受けいただきました。

また、神楽祈祷を奉仕したときのことですが、「お神楽を奉奏いたします。」と典儀をし

ているのですが、ある方が御祈祷の後、「神主さん、いま放送するって仰っていたのに、生演奏でしたよね、どうしてですか。」と尋ねてこられました。この後、私の説明を聞いて、恐縮されながら帰っていかれました。

今の二つの話ですが、お解かりいただけなかった方にご説明いたしますと、最初の話は「家内安全」の意味を知らずに「家内」を「奥さん」と解釈されたという話で、次が神楽を奏で奉るという意味の「奉奏」を「放送」だと思って、録音したものを機械で流すものだと思ったという話です。

今の二つの話を聞いて、常識の無い人だなあ、と思われた方もいらっしゃるでしょうし、その誤解は仕方が無いなと思われた方もいらっしゃると思います。

神職は特別扱いされやすく、一般的とはいえない職業です。神職が日常的に使う言葉のなかには一般の方には耳馴染みの無い言葉も多く使われます。ところが、日常的に使っているものですので、つい一般の方にも使ってしまい、説明をしなおしたり、人前で話をさせてもらっている時に、何人もうなずいているので、皆さんに自分の意図が通じているのだな、と思っていても、実は、違う意味にとられていたり、解ったふりをされていたという経験が何度もあります。

これは、なにも神社だけの話ではなく、どの職業でも共通することだと思います。講演会に出席された際、講師の方のお話で専門用語を頻繁に使われ、よく理解出来なかった経験や、一方で、専門的なことをわかりやすく説明されて勉強になった経験は、皆様もおありかと存じます。

普段、非常識という言葉は悪い意味で使われますが、一般人が共通認識していないという意味では、専門用語とは非常識な言葉なのです。自分が非常識だ、と思う人はほとんどいないと思いますが、ひょっとして普段何気なく専門用語をたくさん使っていらっしゃいませんか。

さて、平成二十五年の式年遷宮では、前回はまだ生まれていなかった中学生以下の子供達、当時小さくてあまり覚えていないであろう大学生など、若者の多くにとって式年遷宮の話題は新鮮なものだと思います。

今回の遷宮は勿論ですが、次回の遷宮に向けて今の若者にとって神宮遷宮というものが常識となるよう、今回の遷宮での神社界における様々な活動を通じ働きかけていくことが我々神職にとっての使命であります。

若者の常識の視点に立った言葉で、式年遷宮の重要性をいかに伝えられるか。そういう

面で、自分の思っている常識・非常識と相手の思っている常識・非常識が違っていないだろうかと、よく相手の立場に立って考えてみることを心がけていきたいと思います。

かく言う、今のお話でもついつい無意識のうちに専門用語がたくさん飛び出したかもしれませんが、何卒ご容赦下さい。

ご清聴ありがとうございました。

（京都府　八坂神社　権禰宜）

我が故郷は日本一

長谷川　宏幸

「我が故郷は日本一」、冒頭から大きな事を申し上げましたが、今回は私が奉仕させていただいております八坂神社の祇園祭と、その祭りに関係の深い全国の小京都にふれながら、神職としての私の思いをお話しさせていただきます。

京都市東山区祇園町に鎮座する八坂神社は、氏子をはじめ地元の方々から「祇園さん」の名で親しまれております。この「祇園」という名前から、多くの方はコンチキチンのお囃子が都大路に鳴り響く祇園祭や、舞妓さん芸妓さんが行きかう祇園の風景が思い浮かぶと思います。本題に入る前に少し、祇園祭と小京都について説明いたします。

まず、祇園祭についてですが、祇園祭の起源は「祇園社本縁録」という書物によりますと、貞観十一年（八六九年）に疫病が流行。これを牛頭天皇（神仏習合時代、素盞嗚尊は牛頭天皇と呼ばれていた）の祟りとして、勅命によって六十六本の鉾を立て、神泉苑に神輿を送って神様を祭り、除疫を祈ったのがはじまりです。その祇園祭も現在では、七月一

日から三十一日までの一ヶ月間、様々な神事、行事が行われます。特に七月十七日に行われる山鉾巡行は全国的にも有名で、日本三大祭や京都三大祭とも言われる由縁です。

次に小京都についてですが、小京都とは古い町並みや風情が京都に似ている街に名づけられた愛称で、室町時代以降、各地の大名が京都を真似た町づくりをしたことが起源です。北は青森県の弘前から南は鹿児島県の知覧まで全国五十市町に広がり、この五十全ての小京都が「全国京都会議」という団体に加盟しています。この団体は昭和六十年（一九八五年）に結成され、京都に似た自然と景観、京都との歴史的なつながり、伝統的な産業と芸能があること、以上三つの加盟基準があるようです。

さて、ここから本題に入ります。近年の京都ブームや、今年は源氏物語千年紀という事もあり、京都には連日、多くの観光客が訪れます。皆さんがご承知の通り、京の都は明治二年まではいわゆる日本の首都であり、日本文化の発祥の地でもありました。その日本文化は、祇園祭の神輿や山鉾巡行の山鉾に使われる飾金具や懸装品をはじめ、祭に使用される着物、道具などの多くが祇園祭とともに発達し、全国に普及しました。

信仰の面でも、祇園信仰（神仏習合時代は御霊会と言われていた事から御霊信仰とも呼ぶ）は、無病息災を願う庶民信仰となり、素盞嗚尊という強力な神様を勧請して、全国に

祇園社（八坂神社とは明治時代以降の名称で、神仏分離政策以前は祇園社と呼ばれていた）が誕生しました。

先程説明いたしました通り、室町時代以降、各地の大名が城下町として小京都をつくり祇園社を建立し、その象徴として絢爛豪華な祇園祭を導入しました。江戸時代には北陸や東北、北海道などに運ばれる物資とともに祇園信仰や祇園祭が伝わり、陸路、海路を通じて急速に祇園祭や小京都が広がりました。

現在は素盞嗚尊を御祭神とする八坂神社や、同祭神に関係するお社は全国に約三千社あります。氏子や参拝者の方々に三千という数を説明すると、その多さに驚かれる事がよくありますが、数字からみても、全国に「祇園さん」が広く祀られている事が良くわかります。

これまで一連の話の中で祇園祭、全国の小京都についてご理解いただけたと思います。それだけ全国には歴史ある文化財や風情ある町並みが残り、それぞれに独自の文化と、そこで生まれ育った人々の誇りがあります。

私は日々のご奉仕の中で常々、特に若い世代の方々に、「自分たちの生まれ育った町や村が日本一なんだ」、という誇りと郷土を愛する心、さらには日本を愛する心を育てていただ

きたい。そして、その手助けをする為、自分に何ができるのか、何を学ばなければならないのか、日々考えております。

少子高齢化の時代を迎え、人口の都市部への一極集中、地方の深刻な過疎化が叫ばれる中、私たち神社界の人間にとって今何ができるのか、重要な時期を迎えております。これだけ若い世代の方々が都会への憧れをもち、地方を離れる原因の一つとして、郷土の良さを理解していない、郷土を愛する心が不足しているからではないでしょうか。

そんな中、八坂神社の氏子の中で、雅楽の練習会や歴史の勉強会を自分達で開いている氏子組織があります。名前は「宮本組」という氏子組織で、八坂神社の地元、弥栄学区の氏子が中心に構成されています。平成十七年から宮本組組長さんの発案によりそれらの会が始まり、月に二回、同じく八坂神社の組織であります弥栄雅楽会の指導のもと、雅楽の練習や、定期的に勉強会を開いています。

私も雅楽が好きなので練習に参加させていただいておりますが、宮本組の皆さんは雅楽の練習はもちろんの事ながら、その集まりを通して日々の情報交換や、練習後には直会をするなど、町内の絆を深めております。最近では小学生や中学生をはじめ、多くの若者も練習に参加し、組の先輩方と一緒に頑張っていただいております。昨年の十一月には、八

坂神社の西楼門が約百年ぶりに全面修理、無事に竣功し、その奉祝行事として四条通りで提灯行列を行いました。西の楼門は祇園の交差点や四条通りなどの繁華街に面している事もあり、多くの参拝者や観光客が見守る中、宮本組の皆さんに行列の伶人としてご奉仕をいただき、日頃の練習の成果を存分に発揮していただきました。

このように八坂神社の氏子の中にも、たいへん熱心に、神社の事についてご尽力いただいている方が大勢おられます。その皆さんに共通して言える事は、本当に自分の住んでいる町を愛し、誇りをもっているという事です。逆に言えば、自分の住んでいる町を愛し、誇りをもっているからこそ、氏神様の事についても熱心なわけであります。やはり郷土を愛する心を育てるには、その氏神様にきちんとお参りをし、神社の神事行事に積極的に参加する事が最善の方法ではないでしょうか。

私事ではありますが、私は来年の三月末日をもって祇園さんを離れ、地元富山県のお宮に帰りご奉仕をいたします。祇園さんは心から愛しているお宮でありますし、そこを離れるのは大変寂しいのですが、地元富山に帰ってからも、氏神様や神事行事を通して郷土を愛する人々を育てられるよう、日々努力してまいりたいと思います。

（京都府　八坂神社　権禰宜）

「遷宮」宗教を超えて

佐伯正則

これをもちまして、「伊勢神宮式年遷宮奉賛終了奉告祭」滞りなく終了しました。

この佳き日にあたり、一言申し述べさせていただきます。

遷宮とは皆様、御承知の通り伊勢の神宮におかれまして二十年毎に御正殿を造り替え、木の香も芳しい新宮に神様を御遷し申し上げるお祭りであります。我々日本民族は、この遷宮を千三百年間営々と続けてまいりました。お宮だけではなく、二千五百点に及ぶ御装束、御太刀・御鏡等の御神宝も当代一流の技術者の手により古式に則り調進、新しくつくり納められ日本の伝統文化を現代に伝えております。

一例を引きますと九州は玄界灘沖合い六十キロの小島が今「海の正倉院」と呼ばれております。この島は大陸と日本の海上交通の要衝にあたり、宗像大社の沖津宮であります。人々は航海の無事を祈り、貴重な品々を奉献しました。「海の正倉院」と呼ばれる所以であります。大々的な学術調査が行われた時に、用途、何に使用されたか判らない品々も発

見されました。思いあぐねた調査団のお一人が、たまたま神宮徴古館を訪れ、展示されていた御神宝の中に同じ物を見つけ、用途が判明したそうです。それは延喜式と言う法律書の中にありました。延喜式の「竜田風神祭」の祝詞には「比売神爾金能麻笥、金能柈乎奉手」とあり、即ち紡績具であったのでした。話しは少し横道にそれますが、延喜式の延喜とは「昭和・平成」の如く年号であり、式とは法律の施行細則であります。御存知の様に古代は「祭政一致」と申しまして政と祭は同じであり、ですから法律の施行細則には祭の細部に至るまで詳しく、規定されているのです。

私と同じ苗字の「佐伯」氏は、越中立山の雄山神社の神主として有名でありますが又、現在広島県廿日市市となっておりますが、古くは安芸の国佐伯郡でありまして佐伯氏は佐伯郡を治め、今は世界遺産の厳島神社に永く奉職したと歴史は伝えております。

そして平成二十五年には第六十二回の遷宮を迎える事と、あいなりますが千三百年間の道のりは決して平坦ではありませんでした。特に戦国時代の百二十年間は遷宮も途絶えて御正殿は朽ち果てそうになり、昇殿もままならぬ状態でした。

この危機的状況を救ったのがお坊さん、しかも尼さん、尼僧であります。慶光院守悦・清順・周養と代々、か弱い女性の身でもって「御宮を新しく造り替えましょうよ」と全国

へ募金の旅をしました。この明き清き誠の心が多くの人々の共感をよび、織田・豊臣氏をも動かし天正年間に秀吉が内宮を造り替えてくれました。

そして、現代においては、著名な女流作家はカトリックですが神宮を参拝して、その夜同じくカトリックの夫に「御遷宮の時には神道であろうが無かろうが寄付をすべきね。日本人として当然よね。」とサラリと言われたそうです。この言葉に全てが集約されているような気がします。又、例えば浄土真宗の方は日蓮宗のお寺にお布施をなさるでしょうか。逆も然り。多分否でありましょう。しかし、浄土真宗の方も日蓮宗の方も伊勢の神宮には奉賛をされます。何故ならば、年末に頒布される「神宮大麻」を受け取られるからであります。日本人だからこそ、宗教を超越して、伊勢の神宮へ奉賛の誠を捧げるのであります。

このような事から神宮は日本民族の「精神の根幹」を成すものであると私は現在考えております。日本の歴史書「日本書紀」によりますと悠久なる古、神宮の御祭神の天照坐皇大御神様はお孫さんを通じてお米を青人草、即ち人間に与えて下さいました。事実、昭和に入って農林省が稲の品種改良を実施しましたが、改良されたどの品種も神宮の御神田、神の田んぼに源を発しているわけであります。しかし、ただ単に生きる糧としてだけ、与えて下さったのでありましょうか。この痩せた土地、狭い国土の中でのお米作りは一人で

は出来ません。我々の御先祖様は自分の我を抑えて、自分の欲を抑えて運命共同体である村、全体の利益の為に身を粉にして働かれました。この「皆で心と力を合せて」の精神が今の日本を創り上げたと云われております。大御神様は日本民族の「精神の根幹」をも、お米を通して授け下されたのではないでしょうか。しかし、つらつら考えますと現在この精神が希薄、薄くなってきていると感じるのは私だけでありましょうか。

最後に今日、「伊勢神宮式年遷宮奉賛終了奉告祭」を斎行できました事は私の大きな喜びとするところであります。奉仕神社十三社、氏子さんの総戸数八百戸。残念ながら二十戸程度洩れ落ちましたがこれも偏に私の不徳のいたすところ。さりながら先の慶光院上人の御遺志を継承されたか如く二山二寺、即ち二つのお寺さんが遷宮に奉賛された事は有難い極みであります。皆様方の遷宮御芳名簿は、一枚は伊勢の神宮へ、もう一枚は本日のお祭において幣殿へ永久に納めさせてもらいました。平成二十五年には、二十年に一度御正殿へ立ち入りが許され、周囲に白い石を敷き詰める「お白石持行事」に皆様方と共に参加出来ます事を大神様に御願いし、祭の言葉とします。

（富山県　素盞嗚神社　宮司）

年男の独り言

寺本正徳

昭和を只管に駆け抜け、六度目の〝年男〟になりました。母は「〝あんた三日の命〟だっだんよ」と話してくれていたのが、ついこの前のようです。定命だと言い乍ら七十の坂を越えるまで命をいただくとは、ありがたいことです。母は、口癖のように「神様　仏様　ご先祖様に感謝しんさい　〝ありがとう〟の言葉のある人は幸福になれるんよ」と諭してくれていたことを思い出しています。

私の生まれた昭和十一年（一九三六）は、二・二六事件が勃発、市民生活にも軍事色が濃くなり、少年倶楽部にも〝熱河進撃〟が賞賛される時代でした。

やがて、五年後の昭和十六年（一九四一）には、『太平洋戦争』（米国の呼び名、日本では大東亜戦争と呼ぶ）に突入。日本は世界を相手に戦争をはじめ、〝昭和〟に大変調が起きます。

戦禍は日増しに拡大し、昭和二十年（一九四五）八月、広島、長崎の空に原子爆弾が炸

裂、街が瞬時にして消え、多くの市民が犠牲になりました。

毎日新聞社発刊『日本が一番苦しかったとき』の写真集を捲っていると、〝キノコ雲〟が舞いあがり、この世のものとは思えない悲惨な光景が記録されています。

広島の原爆投下から九日後の昭和二十年（一九四五）八月十五日正午に、雑音の激しいラジオから途切れ途切れに玉音放送がありました。『堪え難きを堪え　忍び難きを忍び』のお声を耳にしたのは、國民小学校三年の夏でした。私にとっての〝昭和〟は、そのときから終焉を迎えたと思っています。

それまでの日本は、〝一億総火の玉　欲しがりません勝つまでは　神風が吹く〟、を合言葉に、早朝から大人に混じって子どもたちまでもが、竹槍訓練に励んでいたものです。

改めて敗戦を知ったのは、高等科の人が、「日本は戦争に負けた　もうＢ２９も来ん　爆弾も落ちん　兵隊に行かんでもええけえ　みんなの家に　父さん　兄さんが帰って来る」と教えてくれたとき。

嬉しさ半分、悔しさ半分で、涙が止まらなかったのを鮮明に覚えています。

当時のことを若者たちに話しますと、決まって「戦争・・・知らん　大昔のことでしょいま　平和だもん　どこで戦争があったん」といった答えが返ってきます。

感想を求めても、「別に・・・自分たちに関係ないッス」と、糠に釘、豆腐に鍬の例えのように、無反応なのを寂しく思います。

これが『団塊の世代』となると、否定が先行、話し合う余地さえありません。

その好例が、靖国神社や竹島です。

「なに　靖国神社　なんでA級戦犯を祀るんや　竹島よう知らんけど　ただの無人島やろ　なんで騒ぐん」、「戦争終わって六十余年やろ　俺今年で六十二やで　過去は過去　前に　いかにゃ」、「それにしても神主さん　あのポスターなんや二十年毎に全部造り替えるて　もったいないと思わん。資源の無駄使いや　もったいないやんか　神主さんはどう思う」。

これが日本の声、団塊の声とは思いませんが、〝日本人はいつからこんな国民になったんだ　おまえそれでも日本人か！〟と、腸が煮えくり返り、怒りの声が喉まで出かけることが、再三あります。

やれ教育改革だ、道徳教育だと文言を並べ立てている間に、日本人が「この国のかたち」を完全に失っていることを虚しく思います。

昭和史を語り継がれる作家の半藤一利先生は「激動の昭和は　四文字熟語をいくつ並べ

ても語り尽くせない　人は　今日の状態を第二の維新だとか　第二の敗戦と評するが　日本古来の伝統文化をガチャポンにして　いくら国を語っても意味がない　波乱万丈の昭和史を真摯に受け止め　検証し　歴史に学ばなければ、歴史は何一つ教えてはくれないし歴史から得るものは何一つない　総てを否定する言動こそ　次代に大きな〝勘定書〟を残すだけだ」と語っておられます。

私を含め、『団塊の世代』は、「被害妄想　個人徹底　営利絶対」の特訓を受けました。その〝勘定書〟が、今日の日本だと断言すれば、言い過ぎでしょうか。

こんな年男の独り言を繰り返していたある日、「神主さん　神主さん　あのポスター何と読むんですか」と少年たちの声がします。

「あれ　平成二十五年に伊勢神宮で第六十二回の式年遷宮が行われますよとの呼びかけだよ」と教えてあげると、「神主さん　もっと詳しく説明してくれますか」

一語一語を丁寧に話を進めていくにしたがって、少年たちの態度が変わっていきます。

「神主さん　その資料を全部貸してくれます　ぼくたちの夏休みの自主課題にします」。

「いいよ　全部あげる　上手にまとめてね」と持っていた資料を全部渡しました。

少年たちは、資料を手に足早に帰って行きます。

それにしても、否定から始まる世代、無関心を装う世代、いろいろあるかと思うと、一枚のポスターから夏休みのヒントを得る少年たちのいたことに「ホッコリ」するひと時を戴きました。

それから半月ぐらい経ったでしょうか「神主さん　神主さん」と少年たちの声がします。「神主さんこれ見て」とレポート用紙を差し出します。「できたか」渡されたレポート用紙に目を通すと、上手にまとめてあります。「君たちでまとめたん　よくできたね　君たちは今日から遷宮博士だ　免許皆伝」「えぇ博士　遷宮博士　やったぁ　神主さん　ありがとう博士か　よし　俺たち　この宿題を全校中に発表したる　神主さんありがとう」との声を残して帰る姿に思わず手を合わせていました。

少年たちが発表する機会を持てたかどうかは分かりませんが、「真摯に向き合えば　世の中はまだ捨てたものではない」と改めて教わりました。

今、伊勢神宮では、第六十二回式年遷宮準備が粛々と進められています。式年遷宮こそ、人類が歴史に学ぶ叡智であり、日本人の知恵ではないでしょうか。

ドイツの鉄血宰相ビスマルクの言葉に「愚者は体験に学び　賢者は歴史に学ぶ」人類が積み上げてきた英知を歴史に学んだ人は、未来に向けて正しい選択をする筈だと説いてい

ます。人類はこの言葉を真摯に受け止め、未来に向かって発進すべきではないでしょうか。

これが「年男の独り言」でした。

（大阪府　稲荷神社　禰宜）

神人和合について

番定善寛

演題に入る前に、今朝の出来事についてお話ししたいと思います。私、今朝は五時に目が覚めました。窓の外は既に明るかったのですが、空を眺めたくなり、窓辺に立ちました。すると、雲と雲の間から太陽が揚がってきました。とてつもないエネルギーと共に揚がってくるお日様を見て、私は「嗚呼、天岩戸開きだ！」と大変感動致しました。その経験が今回の伊勢大会で得られたことにも深く感動しております。

皆さんは「まつり」という言葉をどういった機会に耳にするでしょうか。昨今の世相において、まつりの語に触れる機会は、私見ではありますが商業分野の広告ではないかと思います。ある日車で走っておりましたらガソリンスタンドに「オイル祭り」の幟が立っておりました。一体オイル祭りとは何なのだろうと思って帰宅いたしますと、スーパーの広告には「魚の切り身まつり」と出ておりました。実に複雑な気分になったのでありますが、これらはいわば「神無き祭り」であり、神社に奉仕し、ほぼ毎日「祭」を行っている私た

ちにとっては違和感を禁じ得ません。しかしながら、逆説的に祭とは何かと考えた際、「祭りは祭りだ」「祭りは神様をお祭りすることだ」と、祭りの言葉に依拠してしまう可能性も少なくはないように思います。一緒に「まつり」について考えてみましょう。

言葉の意味が行き詰まってしまった時、語源を調べるのが近道だと思います。祭りの語源は概ね二つと考えられまして、一つは神様がいらっしゃるのを「待つ」ことです。我が国では、神社を建築する文化が起きる以前より、臨時に依代を設けて祭るべき神を招いたとされます。今でも依代に神様をお招きすることは地鎮祭を始め数多く行われますし、神社を「やしろ」と呼ぶ所にもその片鱗が伺えます。もう一つは「仕え奉る」という、人間の態度から派生したと考えるものがあります。神様を崇め、敬う心を「仕える」という態度で表すことを「まつり」とするものです。オイル祭りや切り身祭りに神様はいらっしゃるのでしょうか。断じてそのようなことは無いのであります。人の間でしか行われない催しになんでも祭りの語を付与してしまう世相は、日本人が祭りとは何かを見失っている証ではないでしょうか。

「神遊び」という言葉があります。なんだか楽しげな言葉です。神祭りに芸能や神振行事が欠かせませんが、ごちそうを用意し、場を飾り立て、楽しげな歌や踊りでもてなす、広

い意味で神と人とが遊ぶ、そのような楽しみの時間が神祭りであり、神遊びであるように私は考えます。

楽しい時間に欠かせないのがご馳走でありますが、神祭りでは直会が執り行われます。「神祭りでは」と敢えて強調したのは、直会は祭りが終わった後のものではなく、祭りの一環で行われるものであるべきだという考えの現れであります。本来神饌は「同じ釜で煮炊きしたもの」であり、それを神人共に味わうのが先程申し上げた神祭りであり、神遊びであるように思います。古い記録には供えた神饌そのものを直会と呼んだものもあり、今でも特殊神饌として調理された神饌、熟饌を供える神社が多数あります。神祭りそのものを直会と称する地域もあるそうです。ここで特に注目したいのは、神饌を供えるに当たってお箸が添えられることであります。我が国における最も古い箸は奈良で出土した七世紀の檜製のお箸だそうで、祭祀に使われたものと考えられています。また、神宮の神饌には、檜製の八角箸が添えられます。神饌にお箸が添えられる例はその他にも多く見られますが、現在の私たちの生活においても、お正月や祝いの席には新しい、特別なお箸が用意されます。お箸を使う国は中国・朝鮮・ベトナムと我が国日本でありますが、いずれも匙を併用するのに対し、箸だけで食事を全うするのは日本独自の文化だそうです。神饌を供えるに

当たってお箸が添えられることは、神様が私たちが同じ道具を使ってお食事をされる事の証であります。また神祭りにおいて食事儀礼である直会が行われる事は、神人が食事を共にする古き神遊びの精神が片鱗といえども残っている現れであるように思います。しかし、その精神に立ち返ることが無ければ、直会は単なる宴会です。様々な事情があると思いますが、直会の本義を是非とも取り戻していきたく思います。

祭りを通じて、神と人とが相和し、人と人とが相和す。この神と人の和、神人和合によって包まれるのが我が国日本の真姿ではないでしょうか。日本は和の国という言葉が空虚になり、意味を失いつつあります。大いなる和と書きまして大和で御座います。和を私たちの間に取り戻し、神様と人との和を取り戻し、真の「おほやまとぐに」を取り戻すべく、神祭りを更に更に盛大にしていきたく思います。

（静岡県　久能山東照宮　権禰宜）

男神社の森とホタル

菅野洋子

雄信小学校一年生の皆さん・二年生の皆さん、今日はようこそ男神社にお越しくださいました。

皆さんは二十二日のホタル鑑賞会の前に男神社とホタルの事をお勉強するために来て下さったのですね。

それではこれから、説明させていただきます。

男神社は元は浜の宮にありました。浜の宮って、皆さんご存知ですか？

秋のお祭りに、おみこし・やぐらがお渡りして、祭典の後でお弁当を広げて休憩する所ですね。

昔は、そこが男神社でしたが、今から約千二百年ほど前に、この場所に移されたのです。いわば、神様のお引越しですね。

そのころ、このあたりはどんな様子だったかは想像もつきませんが、今、神社の森には、

ムクノキやケヤキ・クス・ホルトノキ・ヤブツバキなど、たくさんの種類の木があります。

そしてこの森には、ヒメボタルが住んでいます。いつごろからホタルがいるのか、それは全くわかっていません。もしかすると、千二百年前に神様と一緒に移り住んだのかもしれませんね。

さて、ホタルというと、ゲンジボタルやヘイケボタルのように、水辺に住むホタルもありますが、ヒメボタルは、森の木の落ち葉が積もってできた土の中に住んでいます。土の中にいるオカチョウジガイという小さな巻貝を食べているのです。

およそ一年から二年、土の中で幼虫で生活していて、五月ごろ成虫になり、飛び始めます。飛ぶのはオスで、メスは羽が退化して飛べないで、落ち葉の上や、草の上を光りながら歩いています。

そこで、皆さんにお願いがあります。ホタルは一センチくらいの大変小さな虫ですから、触ったら死んでしまいます。また、メスのホタルは足元を歩いています。ホタルを触ったり、むやみに森の中に入って行ったりしないで下さい。

たくさんのホタルが結婚して子供を産んで、来年またもっとたくさんのホタルが飛んでくれますように、森も、ホタルも大切に大切に楽しんで下さい。

さて、五月にホタルが飛びはじめると、ほたる祭りを斎行しています。森にホタルがいることを感謝し、いつまでも生き続けてくれますようにと神様にお願いするお祭りです。

皆さんも、ホタル鑑賞会には「ホタルを楽しませていただいてありがとうございます。」と、神様にお礼を申し上げてから、ホタルを鑑賞してください。

それでは、二十二日を楽しみに。

お待ちしています。

（大阪府　男神社　宮司）

お山に仕えて

宗像崇史

私は青森県弘前市百沢に御鎮座する岩木山神社で御奉仕させていただいております。まだまだ神職として今年で二年目の新米ですが、昨年一年間の奉仕を通じて私なりに感じ学んだことを話させていただきます。

私は福岡県北九州市南国九州の出身で、現在御奉仕させていただいております本州最北端の青森県は正に別世界のように感じます。方言もそうなんですが先ず気温が一番大きな違いで、私が今まで過ごし体感してきた気温とはどの季節も十度ほどの気温差があり、北国にいるんだという感覚がはっきりとします。また、南国生まれの私は暑さには強いものの寒さには弱く冬は大変驚かされました。生まれて初めての昼夜氷点下の世界・大量の雪は辛い事もありましたが、その世界の美しさにはとても感動しました。

私が御奉仕させていただいております岩木山神社は、その名のとおり津軽富士の名でも有名な岩木山が神体山であります。標高は1，625メーターで津軽平野に大きく聳え、

自画自賛のようではありますが、春は残雪と花・夏は新緑・秋は紅葉・冬は真っ白の雪化粧と、四季を通して大変綺麗な山であります。また、山から流れる水が津軽平野を潤し、残雪の形で農作業の時期を教えてくれ、海からはその大きな姿が目印となり灯台の役割も果たしてくれているそうです。青森といえばリンゴが有名だと思いますが、青森ではリンゴの全国生産量の半分ぐらいが生産出荷されているそうです。リンゴの生産にとって塩分というのが非常に悪いらしく、潮風が来ればすぐに駄目になってしまうそうです。岩木山は大きな屏風となり日本海からの潮風を防いでくれているのです。このように美しさだけでなく、沢山の恩恵がある大変素晴しい山の頂には奥宮が鎮まっております。初夏の頃から神職が交代で奥宮奉仕に行きます。美しさとは裏腹にとても険しい登拝道で、初めて登ったときはこれが本当に登拝道なのかと疑ってしまったほどであります。その道は真直ぐにつけてあり、とにかく曲がったことが嫌いで、何が何でもやり遂げるんだとでも言うような津軽の方言で言う「じょっぱり」が登拝道に現れており、津軽の人々の気質そのものだと感じました。そんな険しい登拝道を守札と白衣を背負って登り山頂で奉仕します。山頂にいると色々な方々と触れ合うことができます。やはり皆がきつさを共有しているせいか誰ともなくお互いが話しかけ参拝されていきます。私が山頂で出会った方々の中でも、

とても心を打たれ神職として考えさせられる言葉をいただいた方がいます。どんな方でも声をかけていただくと嬉しくて有難いのですが、その中でも特別な言葉でした。

その日はとても天気が良く山頂に雲一つかかることのない快晴で、私も気持ち良く奉仕していたお昼頃でした。十人ぐらいの女性の団体で山頂に登ってこられました。大体五十代の方々の中に八十歳ぐらいの方が一人いました。その方は私の方によってきて、

「おめぇはじめてだべ。」

と話しかけてこられました。私はその通りで今年から御奉仕させていただいていると伝えると、その女性はもう十年以上も奥宮に登拝されているそうで、神職の顔は皆覚えているということでした。私は失礼ながら年齢を伺うと八十四歳になると教えてくれました。私は、

「そのお年でこの登拝道は辛くないですか?若い私でも辛いと思うのに元気でいらっしゃいますね。」

と私が言うとその女性は、

「神さんのおかげでいられるし登って来れる。ありがたい神さんにお礼を言わないと申し訳がない、辛いとかじゃない。だから、おかげさんでおめぇにも会えたべ。」

と答えてくれました。その瞬間私自身とても恥ずかしく思いました。参拝者であるその女性はとても真っ白で素直な気持ちで神様に向かっているにもかかわらず、神職である私は登拝道が険しいとか荷物が重くて辛いと思いながら奉仕している事がとても申し訳なくて恥ずかしく思いました。その後もいろいろと話して最後に、

「来年の夏にまた山頂でお会いしましょう。私は山頂でお待ちしております。」

と約束してお別れしました。

当然のことですが、私は神職ならば参拝者の気持ちにこたえる義務があると思います。私はあの時こたえてあげる事が出来なかったと思います。この様にならない為にも、常にこたえてあげられる準備をしなくてはいけません。知識だけではなく心を磨くということです。その女性のおかげで私は神様に向かう心を磨くことの大切さを改めて気づかされました。

以上で短いですが、私なりに感じ学んだことお話しさせていただきました。

（青森県　岩木山神社　権禰宜）

後の世のすぐれたること

中木屋　豊

伊勢松阪に生まれた本居宣長翁は、その著書『玉勝間』の中で、このように書き記しています。最近みかんというものが出来た。昔は橘を並び無き物と、もてはやしていたが、今となっては物の数にも入らぬ。この一つでも分かるように、昔は無くて今あるものが多い。昔は悪くて今良いものが多い。この話を発展すると、みかんからポンカンやタンカンが生まれ、さらにはデコポンという優れた柑橘類の食べ物が今はあります。このように、後の世には優れてよいものが数多く生み出されるだろう。昔の人はだからといって、不便だとか不満に思うことは無かった。これからもきっとそうであろうと述べています。足るを知っていたからだと思います。

しかし今の世の中は、違ってきているのではないでしょうか。文明文化の発展は、飛躍的に生産能力を上げました。足るを知らない人たちが、貪欲に闊歩しています。「ヒルズ族」といわれる人たちなど、不労所得をたくさん儲ける人が増え続け、人々の生活を根底

から変えてしまっている気がします。

昔の人の数の数え方は、十一ではなく十あまり一つでした。十で充分足りたので、残りはおすそ分けしたのです。今は際限なく十二、十三と進んでいきます。あまりだという思想がありません。お金に物を言わせて、集めるだけ集め、儲けるだけ儲ける。やがて金のなる木が出来ます。その木が大きくなると、やがて花が咲き、実が出来ます。どんな実が出来るのでしょう。それは「恨み」とか「ねたみ」とか「やっかみ」という厄介な実です。

さて昭和二十四年、第五十九回式年遷宮が予定されていました。敗戦の痛手をお考えになり、昭和天皇様は、昭和二十年十二月延期の決断をされました。折りしも神道指令が出される前日のことでした。しかし、永年の軍靴の蹂による痛みや、米軍の機銃掃射による宇治橋の損傷は、一刻の猶予も無い状態でした。神社新報第二九三〇号に、東京日枝神社宮西惟道宮司がこの時の事情を寄稿されています。それによりますと、敗戦で樺太から無一文で引き上げ、札幌で再起を図っておられた、佐々木土木㈱佐々木勝造氏が、宇治橋造橋の半額に当たる大金を奉納された。これによってすぐに工事に着工され、続く御遷宮にもはずみが付いたと、書いておられます。

昭和四十四年五月初版の桜井勝之進先生著の『伊勢神宮』では、これによって三十年ま

でかかると思われた募金が早く集まり、二十八年十月に竣工、斎行されたと書いておられます。

そのとき募金に応じた数六百五十六万人、金額にして七億二千万円余であったとも書いておられます。そんなにも多くの国民の奉賛を受けることが出来た背景に、特筆されなければならない出来事がありました。古来神宮に奉納された美術工芸品は数多くあります。中でもこの五十九回式年遷宮では、百六十七点が奉納されました。当代一流の芸術家たちの作品は、遷宮の機運を盛り上げるために、東京を皮切りに、大阪、神戸、京都、名古屋と総合美術展覧会が順次開かれました。奉賛会は、展覧会の終了と共に、これらの作品を売却して資金に当てる計画でした。

しかし前述のごとく、こうして集められた日本画、洋画、彫塑、工芸、書の一点も売却することなく、遷宮が行なわれたのです。貧困・飢餓に苦しんでいた時代にです。国民の赤誠が、如何に高かったか驚きでした。

いよいよ第六十二回式年遷宮が、近づいてきました。平成二十五年の予定です。式年遷宮は、『常若』という命の瑞々しい蘇りの伝統です。今日お集まりの総代の皆さん、良い家庭が良い地域を作り、良い自治体を形成し良い社会にします。日本書紀にこのような件が

あります。

昔大己貴命、少彦名命に語りてのたまわく、「我等が造る国、あに善くなせりといわむや」とのたまう。少彦名命對へて曰く。「或は成せる所も有り。或は成らざる所も有り」と曰ふ。是の談、蓋し幽深き致有るらし。

最初から完璧ということは無い。成るも成らざるも途中経過だ。たとえば米がなったといっても、白米になっていない。白米になってもご飯になっていない。木がなったといっても、柱になってない。板になっていない。家具になっていない。常に変化を遂げるものだといっているのでしょう。此処に修理固成の原点があります。

後の世のまされる事は、物だけでなく、人の心もそうであってほしいと思います。大変厳しく、難しい時代になっていますが、努力があってこそ伝統を守ることができます。各地域で遷宮に対する一層のご協力をお願いして、本日の総代会での宮司の挨拶といたします。

（鹿児島県　稲荷神社　宮司）

心の持ち方「ありがとう」感謝の気持ち

吉野　太加秀

「ありがとう」の言葉の大切さを皆様は考えたことはありますか?この言葉は生きて行く上で切っても切り離せないものであります。日本人古来の文化・伝統の象徴ではないでしょうか!この事について私が経験し感じたことをご参拝いただきました皆様にお話させていただきます。

皆様は神様の大前にいる時、どのような気持ちでどのような考えでお願い事をしますか?それぞれ人には色々な立場や今その方が置かれている状況によって違いがあると思います。

私は以前、体を壊したことがありました。今は医療の技術が進み簡単な手術になりましたが当時は少し厄介な手術でした。今から十四年前になりますが学校を卒業して直ぐに今お世話になっている「お多賀さん」の呼び名で知られている多賀大社に奉職して一年が過ぎた春、古例大祭という大きな春祭りの日、行列神幸の列次に付いて歩いておりましたら

激痛とともに歩く事が出来なくなりました。痛さと苦しさで涙を流したのを思い出します。なぜ自分だけがこんなに酷い事になるのか、何か悪い事をしたのかと自分自身を攻めたり怒りや悲しみを感じました。直ぐに病院で診察をしてもらうことになりました。病院で言われた病名は腰椎椎間板ヘルニアでした。この病気は神経を圧迫し足がしびれたり歩けなくなってしまうもので座骨神経痛の酷い症状です。今すぐ手術をしなければその内に歩けなくなると言われかなりのショックを受けました。それに伴い手術も失敗したら下半身不随にもなると言う事、でも将来の事を考えたなら手術しかないと思い決断しました。このときに思ったのが神様にお願いをするしかない！苦しい時の神頼みだと！わらにもすがる思いで神様に手を合わせていたのが、今でも昨日のことのように脳裏に焼きついています。人は健康な時には何も考えず何も思いません。それがごく当たり前でごく普通のことなのです。自分が辛い時の事や悲しい時、苦しい時の事なんて全くという程に忘れてしまってます。自分自身がそうであったかのように皆様も少なからず一度はこのように神様に助けて頂きたいと思う経験があるのではないでしょうか？

　又神様の大前に出向く時は何らかの心の願いを持ってお願いをしに行くと思います。心の悩みであったり・体の悩みであったり・家庭関係・人間関係・仕事等色々な思いがあり

人はみな神様の前に跪きその願いを聞き入れて下さいと願う。これは当たり前のことであり決して間違ってるものではありません。ここで一つだけ守ってほしい事があります。今を生かしてもらっているということです。

健康で日々を過ごす事の有難さ。

「健康な体でありがとう」

母が辛い思いをして生んでくれた事。親に大きくなるまで育ててくれた事の有難さ。

「お父さん、お母さん、ありがとう」

先祖の方々が苦労をして築き上げてくれた今に

「おじいちゃん、おばあちゃん、ありがとう」

色々な物が食べられる事の有難さ、ご飯を食べる前、食べた後に必ず口に出して言いましょう。

「いただきます、ごちそうさま」の感謝の気持ち。

物が手に入る有難さ、友達ができ、恋人ができる出会いの大切さ、新しい家庭ができ新しい命が誕生する事の有難さ、この生活をしている地球に太陽に、月に星に、水や空気に「ありがとう」と言う気持ち、全ての事に対しての感謝の気持ちを心の中に思っていてほし

いのです。そして神様に伝えましょう。感謝の気持ちを。

それから自分自身が願うお願いをして頂きたいと思います。この事を常に心がけて頂ければ更なる幸せ、神様の御神徳が戴けると思います。この感謝の気持ちの大切さを考えるようになったのは昔からではありませんでした。色々な経験をして中取持ちの奉仕を始めて多くの先輩方や仲間・家族があり自分を支えてくれる方々があるからこそ今の自分があり感謝の大切さを考えるようになったと思います。

皆様もどうかこの感謝の気持ち「ありがとう」と言う言葉の大切さをもう一度考えて頂きたいと思います。簡単な事でなかなか出来そうでないこの感謝の気持ちを今一度考えて下さい。

「ありがとう、感謝のきもちを」

（滋賀県　多賀大社　権禰宜）

地震と伊勢の神宮

小林友博

昭和四十八年に発刊された小松左京のフィクション小説『日本沈没』を読んだ頃は、「地震国日本」という認識は持ってはいたものの、地震で日本が沈没するなど全く考えられないことでした。その後発生いたしました「伊豆半島」・「宮城県沖」・「日本海中部」などの地震を始め、津波被害も大きかった平成五年の奥尻島を中心とした「北海道南西沖地震」も対岸の火事の出来事と考えていたところ、平成七年一月十七日、思いもよらぬ死者行方不明六、四三七人の戦後最悪の震災と位置づけられた「阪神淡路大震災」に遭遇・体験し、地震列島日本を再認識させられました。更にその後も各地で地震は発生し、平成十九年の「能登半島・新潟県中越地震」、更に平成二十年六月には「岩手宮城内陸地震」へと続いていることは周知のところであります。

ところで、自社の御祭神である神功皇后の事跡を『六国史』で調べている際に、各文献に「地震」の文字が数度に亘り記載されているのを知り、驚いたのであります。

地震の記事の初出は、『日本書紀』允恭天皇五年（四一六）の條に、「地震る。（中略）則ち地震る夕に当りて、（中略）殯宮の消息を察しむ。時に諸人、悉に聚りて闕けたること無し。唯玉田宿禰のみ無。」とあり。又、推古天皇七年（五九九）に、「地動りて舎屋悉に破たれぬ。則ち四方に令して、地震の神を祭らしむ。」と見え、更に天武天皇十三年（六八四）にはいまだかってないという大地震が発生しています。「大きに地震る。国挙りて男女叫び唱ひて、不知東西ひぬ。則ち山崩れ河涌く。諸国の郡の官舎、及び百姓の倉屋、寺塔神社、破壊れし類、勝て数ふべからず。是に由りて、人民及び六蓄、多に死傷はる。時に伊予湯泉、没れて出でず。土佐国の田苑五十余万頃、没れて海と為る。古老の曰はく、『是の如く地動ること、未だ曾より有らず』といふ。」とその有様はリアルで簡潔であります。『續日本紀』には、天平六年（七三四）に、「地大きに震ひて、天下の百姓の盧舎を壊ちぬ。圧死せる者多し。山崩れ川堰かれて、地往々折裂くること勝げて数ふ可からず。使を畿内七道の諸国に遣して地震に破るゝ神社を撿へ看しむ。」と記されています。七、八世紀に於いても大地震が各地で起きていたことがわかりますが、死者数は「死傷多数」などの大まかな記載で実数は把握できていません。

ここでは、文徳天皇御一代の実録で、嘉祥三年（八五〇）三月から天安二年（八五八）

八月に至るまでの九ヵ年間の事を編集した『日本文徳天皇実録』を中心として、当時の地震と朝廷の関わりを検証したいと思います。実録九ヵ年で、地震に関し「地震（なゐ）」・「地数震（ちたびふるえる）」・「地亦震（ちまたふるえる）」・「地大震（ちおおいにふるえる）」等の記事が数にしますと九十回にも及んでいて、いかに多くの地震が起こっているかがわかります。その中から主なる記事を拾い上げてみますと、

①嘉祥三年八月、地震、西北より来る、鶏雉皆驚く。同年十月、出羽の国からの報告によると、大地震が起こり山谷は形を変えた。地滑り等で多数の者が圧死した。

②仁寿二年十月、地震、聲有り、雷の如く。
東宮にて、五十人の僧に大般若経を三日間転読させると共に、中臣・忌部の両氏人を遣わして、五畿七道の諸神社に向かわせ、奉幣と祈祷をさせる。

③仁寿三年三月、地震があった四日後の事。この月に京師及び畿外に疱瘡死者が多く発生したのに合わせ、大極殿で三日間、名僧百人による大般若経を転読させ、災いを祓わせた。同年十月、地震、この日太政官庁前に虹を見た。

④斉衡二年二月と五月に地震、東大寺の報告によると、大仏の頭が自然に落下した。

⑤斉衡三年三月、この月地震数回あって、京師及び城南の屋舎倒壊、又仏塔も傾く。同年九月、僧を賀茂・松尾の大社に遣わし、金剛般若経を三日間読ませる。更に十一月、地

震、この夜大津で火災あって延焼家屋七十余家、池の水が黒くなったが数日後に回復した。

⑥天安元年五月、地震、雷雨、近来にない長雨で晴れない、今日京中水溢れる。同年七月、地大震、北西・東南からの地響きは雷の如し、河内越中等の国司の報告によると、田畑の損壊多く、秋の稲の収穫は期待できないので、罪としないでほしいとの願が出された。以上九十回の地震記事のうち数回の記録を取り上げましたが、小地震の時は、朝廷も通常の勤めを行なっていたらしく、地震、所司の務めは常の如し、又帝より公卿に飲食を賜うことは常の如し、とも記されています。

さて、本題である伊勢の神宮との係わりは、

①仁寿三年四月、地震八日後の十日、従五位上嶋江王と神祇大副兼内蔵頭の中臣朝臣　逸志等を伊勢大神宮に遣わせて、災疫除請を祈願させている。

②同年七月の地震の際にも、散位従五位上全世王を始め、神祇大副の中臣朝臣逸志、斎部宿禰伴主等を伊勢大神宮に遣わし、幣を奉りて災いを祓わせている。

時代はさがりますが、天慶元年（九三八）には、諸社に使をたてて、地震鎮めを祈らせ、五畿七道の五十四社に奉幣すると共に、天皇は宇佐八幡宮に奉幣して地震の災いについて

祈願している（『日本紀略』）。又、同五年にも、大中臣頼基を斎主として地震鎮めの祈祷を行なわせている（『外記日記』）。このように、朝廷は古より地震被害を始め、国家の大事に関し神宮に国家・国民の平安を祈念してきた訳であります。

このように、古より国家・国民と神宮との繋がりは大変深い訳でありますから、先日中国で起きました「四川大地震」のような、「阪神淡路大地震」の六倍というけたはずれの大きな地震の災いが我国で起こらぬよう、小説の『日本沈没』のようなことが起こらぬよう、国民がこぞって神宮に参詣し祈願しなければならない時ではないかとも考えます。おりしも神宮では平成二十五年に式年遷宮をひかえていることもあり、国民一人一人が御遷宮の御成功を祈り御奉賛の誠を表すべきだと思いますし、全ての神職は神道教化という点もふまえて式年遷宮に東奔西走するべきではないかと考えます。

（兵庫県　三石神社　宮司）

多度祭上げ馬神事について

平野直裕

私の奉務神社である多度大社では、毎年五月四日、五日の御例祭の折に、上げ馬神事という特殊神事が執り行われます。近年マスコミによる取材が盛んになり、テレビ等で放映される事が多くご存知の方も多いと思います。この神事の始まりは、南北朝の頃で約七百年の歴史を数えます。人馬一体となった青年騎手が一五〇メートル位の助走距離を走り、三十度の登り坂の最後に約二メートルの土壁を乗り越え、その上がり具合で古くは農作の時期や豊凶を占ってきましたが、平成四年のバブルがはじけた折、記録に残っているところでは初めて一頭も上がらなかったので、其の頃より景気も占うようになってきました。祭事を奉仕する地区は、御厨と呼ばれる限られた七地区の住民により奉仕されます。四月一日に神占式という神占いにより神児一名・騎手六名が選定されます。神児は小学校低学年の子供が、騎手は青年会と呼ばれる、十六歳から二十三歳までの青年男子の中から選ばれます。この祭事は、大変危険が伴うことから、祭の関係者は、ケガ無く奉仕できる事を

願い、現在も厳粛に精進潔斎が行われています。特に危険である騎手と定められた者は、家族共々別火の生活に入り、心身を清めます。又祭り当日までに馬を乗りこなせるよう朝夕乗馬の練習を積み重ねます。そして、祭一週間前ともなれば、乗馬の練習を止め精進潔斎に専念し、衣服を改め尚一層の清浄なる生活に入り祭事に備えます。

私が多度大社に奉職したのは、昭和六十三年ですが、この二十年位の間で、その様は変化し、大きく分けて三点程の問題点がでてまいりました。

一つ目は、この神事の進行を中心的に活躍する、青年会の会員の減少です。近年、少子化問題として全国的に子供の減少が叫ばれていますが、やはりこの多度の辺りも同様で該当する青年が少ない上に、青年の親が、勿論その中には自身は青年会に入って活躍した人もいますが、そのような人でさえ、青年会に子弟を入会させる事に反対をし、神事の進行に支障をきたすまでに減少してきました。これらの親が反対する一番の理由は、ケガをしたらどうするという事のようです。私が奉職した当時は、祭りでケガをしたら精進がたり無かったといわれ、自分の恥の様になるので、怪我をしても我慢をしている人が多かったような記憶があります、その様な人等が親の世代となり考えが変化してきたようです。

二つ目は、先にお話したように精進潔斎の厳しい祭事で、女性が携わることをほとんど

許さない祭事です。高齢化と核家族化で、地域によって高齢女性の一人暮らしの家が多くなってきました。この事から、奉仕出来る人が減少し、ここでも祭事の進行に支障をきたすようになってきました。一番の解決策は祭りの折だけでも、外へ出て行ってしまった若い世代の人たちが地元に戻り、祭事の奉仕をお願いできたらいいと考えるのですが、なかなかそれがうまくいかないようです。

三つ目は、十四・五年前より馬の保護を求めてこの祭事に動物愛護団体が介入してきました。この団体の言葉だけを鵜呑みにした人が、電話、手紙、メールで嫌がらせや、罵声をあげ祭事の取り止め等を唱えてきました。この様な問い合わせの折に、私が一番印象に残っている電話で色々と苦情を言われ私が〝先人が続けてきた祭りを今さら止めたりは出来ない〟とこちらが反論すると、〝そんな理由で続けるのか〟という意見が出て大変ショックをうけた覚えがあります。

丁度私が奉職した折は、まだバブル全盛時代で景気もよく何事も順調に物事が進んだ時代です。だが、それがはじけてしまい、景気の低迷が続いたせいでしょうか。昨年では、一年間を象徴する漢字一字が〝偽〟となった折も、だれしもが納得したように、万事不信感を持って付き合わなくてはいけないような時代であると共に、個人主義で人と連携を取

ることが苦手で、慣習やしきたりに抵抗し、そしてクレームをつけることがカッコイイとまで思うような考えを持つ人間が増えてきました。神社は、信仰の場だけでなく、地域のコミュニティをつくる場であると教えられた覚えがあります。熱狂的に祭事の奉仕を取り組む人も多数みえますが、現在一部それが取れない状態になっているような気がします。

祭事が始まってから約七百年の間に、幾つかの変遷を経て今の神事があると思います。神宮でも遷宮の折、御神宝類の矢羽根に用いていた鷲の羽根が入手しにくい為、白鳥の羽根を代用したそうです。この様に、祭儀の本質は極力崩す事無く、時代に合わせて祭事を存続していかなければならないと思います。神事は、地域の人々の奉仕によって神社に奉納されます。奉仕する地区の人等が臨機応変に本義を忘れる事無く時代に合わせ対応する寛容さこそ伝統神事として、永く地域の人等に守られ伝承してきた神事としての風格であるとおもいます。この様な観点から今一度見直す所は見直しこの勇壮な神事を継承していきたいと思います。

（三重県　多度大社　禰宜）

日本人の命のつながり

西尾酒子

はじめまして、皆様とお会いできることを楽しみにしておりました。私は還暦を過ぎ四人の子供を社会に送り出し、また四人の孫に恵まれ、この頃つくづく日本人に生まれ、育ってきたことに感謝しています。私たち日本人の命のつながりはどこから始まっているのだろうか?そんな素朴な疑問をいだき、日本の国の誕生・命の誕生について、「古事記」を読んでみました。わかりやすく表現すると次のように記されています。

天と地が始まったときに、高天の原に成れる神の名は天の御中主の神。次に高御産巣日の神。次に神産巣日の神。

次に人間の住む土地、まだ若々しくて浮いた油のようであって、くらげのように漂っているその時に、葦の芽のごとく萌え上がるものに因りて成れる神様の名は宇摩志阿斯可備比古遅(うましあしかびひこじ)の神。次に天の常立(とこたち)の神。この五神はみな一人神として姿を隠していらっしゃった。この五柱の神様は天の神様です。

次に国の常立の神、豊雲野の神（一人神）。次に宇比地邇・妹須比智邇の夫婦の神様、角杭・妹活杭の夫婦の神様、意富斗尾能地・妹大斗乃弁の夫婦の神様、於母陀流・妹阿夜可志古泥の夫婦の神様、伊邪那岐の命・伊邪那美の命の夫婦の神様がお生まれになりました。神代七世と言われています。

さて天つ神のすべての神様たちは協議の末、伊邪那岐命様と伊邪那美命様に「この漂える国（土地）を整え固めて完成させなさい」と仰り、天の沼矛を授けてお任せになりました。そこで二柱の神は、天の浮橋にお立ちになってその玉飾りの矛を指し降ろしてかき回され、海水をころころとかき鳴らして引き上げたとき、その矛の先より垂れ落ちた海水の重なり積もったのが島となりました。これがおのころ島（日本の国の原形）です。この島に伊邪那岐命・伊邪那美命の二神は天くだりまして、天の御柱を立て八尋殿をお建てになられました。

ここで二神は次のような言葉を交わされます。

伊邪那岐命「おまえの体はどのように出来ているか」

伊邪那美命「私の体は出来上がって行って、出来きらない所、ひと所あります」

伊邪那岐命「私の体は出来上がって行って、出来すぎた所、ひと所ある。だから、私

の体の出来すぎた所をもちて、おまえの出来きらない所に刺し塞ぎて国土を産みだそうと思う。産むことはどうだろうか」

伊邪那美命「それは良いことでしょう」

伊邪那岐命「それならば、私とおまえと天の御柱を行き廻り、逢いてみとのまぐはいをしよう。おまえは右より廻り私に逢え。私は左より廻りおまえに逢おう」

こうして二神は契りを終えました。そして、伊邪那美命が「ほんとにまあ、愛(いと)おしいお方ですこと」と仰ると、伊邪那岐命は「なんとまあ、かわいい娘だろう」と仰いました。そしてお生まれになった子は蛭子で、とても弱々しい子でありました。二柱の神は「なぜだろう」と思い、天つ神に申し上げたところ、天つ神は占いの後「女人(おみな)の言葉、先立ちは良くあらず。また還り改めて言い直しなさい」と仰いました。そこではじめからやり直してお産みになられたのがこの麗しき日本の国、大八嶋です。

昨今私たちは、セクハラ問題、性犯罪、いじめ問題、虐待問題等に悩まされています。世の中の人間は男女しかいません。地球を護る役目を担っている私たち人間は、伊邪那岐命様・伊邪那美命様のように助け合い、常に相手の気持ちを確かめ合って、尊敬し合って

命を授けてもらうという生き方をせねば、平和な世の中にならないと思います。

その後、二柱の神はたくさんの神様をお産みになられて、日本の国を守る貴き子、天照大御神様に高天の原を治める事をお任せになりました。次に月読の命様に夜の食す国を治める事、弟の建速須佐之男の命に海原を治める事をお任せになられました。これが私たち日本の国の誕生、日本人の命のはじまりと考えられます。つまり、私たちは天つ神、天照大御神様の子孫とも言えるのです。伊勢の「伊」は正に伊邪那岐・伊邪那美の神の「伊」で、伊勢神宮はその貴き子、天照大御神様がお鎮まりになられ、国の隆昌、子孫繁栄、そして日本人の命のつながりの「みなもと」となっているのです。

天照大御神様は、国民の命を守り、栄えさせるために稲の穂を授けてくれました。そして、その教えを守り受け継いでおられるお方は天皇様です。天皇様は国始まりし頃から天照大御神様を始祖として尊び敬い、ひたすらに国民の幸と繁栄をお祈り下さっています。今上陛下は百二十五代目になられます。

国滅びず、これほどの命のつながりが続いているのは、日本だけですね。私たち国民は、天照大御神様に守られてきたこの「命のつながり」によって生かされているのです。

『神社神拝詞』に「天皇を仰ぎ奉り　直き正しき眞心もちて　誠の道に違ふことなく　負

ひ持つ業に勵ましめ給ひ　家門高く身健に　世のため人のために盡さしめ給へ」と記されています。また、大祓詞には「八百萬神等を神集へに集へ賜ひ　神議りに議り賜ひて」と言う一文があります。天皇様は、直く正しく、明き清き誠をもちて、国を造り固め為す事をお誓いになられ、心の和、事を起こすとき議論に議論を重ね平和の内に決めるという人倫の和、継承の環を尊ばれ、日本人の幸・繁栄のみならず、人類の平和、地球上の自然との共存共栄を祈っておられます。私たちもまた、その御心に導かれて命がつながっていると思うのです。

しかし今の日本人はそのことを忘れているのではないでしょうか。世界では命を奪い合う戦争が絶えず、日本においては尊い命を己の欲望のみで奪うという恐ろしい事件が頻発し、科学や他国の文化に惑わされてのめり込み、自国を軽んずる風潮が広がり、日本人の魂、命のつながりが脅かされつつあります。そのような中で、二十年に一度全てを新しく蘇らせる式年遷宮は、まさに「命のつながり」を象徴しているのではないでしょうか。

めにみえぬ神のこころにかよふこそ
　人の心のまことなりけれ　　明治天皇御製

私たちもまた、この伊勢神宮にお参りして天照大御神さまの御前に佇めば、目に見えな

いけれど、自然と身も心も清らかになりますね。

私たちは、この麗しい日本国の日本人として、大いなる自然と共存共栄し、尊い地球上の命を護り、平和を愛する心を受け継いで行きたいものです。そして、神ながらの尊い「命のつながり」を子供たちに語り伝えていく使命を果たさなければならないと思います。

今年は幸いにして自然を護ろうと世界中から首脳が集まり、北海道でサミットが開催されます。自然と共存共栄する日本人の生き方、考え方を世界へ発進する機会が与えられました。これも大御神様のお導きと言えるのではないでしょうか。

式年遷宮にあたり、日本人の魂・命のつながり、生き方、考え方を皆さんと共に、子供たちや若人、更に世界の人々に語り伝えて行きましょう。

長時間ご静聴ありがとうございました。

（和歌山県　宇治神社　宮司）

御神木と真清田神社

楠田晴明

今日は御神木と真清田神社について、お話したいと思います。

平成十七年六月七日午後八時、暗闇のご神域に響き渡る長野県上松町の木遣歌、これに呼応する奉曳団のうねりのような声。神社に関わる老若男女がこの日この時に一堂に会して御神木の引き綱を手に、神宮様の歴史の一瞬間に立ち会ったのであります。立錐の余地もない境内に響く歓声と拍手の渦。御神木を載せたトラックは大テントのなかへ、お木曳きの参加者の熱意に押されるかのよう吸い込まれていきました。それはまさに人々の純粋な力が伊勢への思いとして一つになったその瞬間でもありました。

話は今から五十年前に遡ります。市内の中心に御鎮座され一宮市の象徴でありました真清田神社は昭和二十年七月二十八日の一宮大空襲によって、その勇壮な御社殿が一夜のうちに灰燼と化してしまいます。当時我が家を焼かれ、焦土と化した一宮の町に生活していた氏子の方々は、苦しい戦後生活の中繊維産業の好景気に支えられ、ようやく活気がもど

りはじめてきます。

さて街の復興は次第に整っていったわけでありますが、戦災焼失した真清田神社の復興はどうであったのでしょうか。昭和二十一年焦土となった郷里を市役所屋上から昭和天皇様がご覧になり、市内の中央、焼け跡の大きな一区画を目聡くご照覧され当時の市長にご下問されたのであります。神社から或は兵士として戦場に、或は大陸の開拓団として長久の成功を、或は青雲の志の成就を祈って故郷一宮を後にされたことを市長はご説明申し上げたのであります。そして最後に当時の市長に対し「復興のこと、よろしくたのむ」とのお言葉を賜り、戦後の御造営は始まったのであります。昭和天皇様のこのお言葉は、まさに「神社の復興こそが真の一宮市の復興である」ことを我々に教え諭されたのであります。そして昭和三十二年、真清田神社復興造営に際し、ご復興の機運を高めるために行った御用材の御木曳行事は燃えに燃えたのです。

御神木の奉曳と真清田神社復興造営。ここに共通するものは、心を無垢にして尊いものを次世代に伝えようという思い、神社と地域は過去現在未来とも一体である、ということではないでしょうか。我々日本人の心の中には、「中今」という考えがあります。遠い過去、未来に至る現在を賛美し尊ぶ美しい日本の言葉であります。そして次世代に何かを伝えよ

うというＤＮＡにスイッチが入り、ここに神社護持の本質が始まると思っています。私は、大学を卒業し奈良県の神社に奉仕を十年間致しました。山間部での神社は、二十年あるいは十二年に一度いまも御遷宮をしています。そこでは柱一本、御扉一枚を替えることで御遷宮、当地では「造工（ぞうく）」として続けておられます。伝えるべきことは伝えていくんだ、という考えが色濃く残っている良い例であると思います。

ご用材で使われる木々は、山々で大切に育てられた大木を使います。しかし、いかなる大木も種から育ち始めます。しかも自分が植えたその木は自分の世代には切り出すことが出来ない。祖父または曽祖父の時代に植え、しかも間伐して残った木々がはじめて役に立つのであります。厳しい自然のなかで確実に芽吹き、緑の葉を付け、実を齎しつつ木々は徐々に太く大きくなっていきます。日本が誇るべき美しい自然のなかでひとつひとつ小さな積み重ねの中で大切に育てられていくのです。そうした木々が御神木あるいは社殿にとして使われていくとき、数百年の生命に感謝しつつ、その永い命の千の恵の一つでも我々は蒙りたいと思うのは当然でありましょう。

そもそも神社はなぜその場所に御鎮座されているのでしょうか。ただ単純に歴史上の事実、または伝承があることも大変貴重なことです。しかしそこに「神社をお守りしていこ

う」という受け継ぐ意志が確実に伝承されてきたからだと思います。

長い神社の歴史のなかで、さきの大東亜戦争で社殿を失ってしまった時期もありました。しかし澎湃として神社が復興されてくるその源泉は、氏子の皆さんの「守っていこう」とする力、「守られたい」という素直な気持ちの混成であろうかとおもいます。

御木曳参加者の中には、九十歳を越えるご高齢の方もいらっしゃいました。自ら「曳き綱にとまれなくても参加させていただくだけで幸せです」といわれます。参加された殆どの方々が、「この機会に恵まれ幸せでした」とこちらが尋ねる前から口々に言っていられます。当日急病で具合が悪くなって参加ができなくなっても、「半纏と手拭」だけは、自分の一生の宝物としてたんすの中にしまって置きたいと大勢の方が言われたのであります。

御木曳の道中、ある老女は御神木を拝んでおられました。若い二人は、結婚を前にしてフィアンセとともに御神木を曳いています。おじいさん、おばあさんに手を引かれながら引き綱を手にヨチヨチ歩む幼児もいます。時代を担う壮年のたくましい腕、家庭を守る母の腕、それぞれが祈りを込め、幸せを期待して御神木を曳いたのであります。

当初計画された参加人数は三、二〇〇人でありました。しかし二十年に一度という機会をとらえ、各地で奉祝をうけた御神木をともに曳こうという共通意識、神宮の歴史に参加し

ようという意識は、徐々にその参加者を膨らませていったのであります。最終の参加人員は八、八〇〇人。まさに神と人が出会った瞬間でもあります。

昭和三十二年の真清田神社御造営当時の御木曳よりすでにおよそ五十年経ちます。平成十七年におこなった御神木の御木曳を通じ強く感じたこと、それはわれわれが持ち合わせている「感動力」「感受力」「守り伝える力」は世代を超えて不変であるという事です。

御神木を一宮にお迎えして、八千人を越える大奉曳の姿は、年配の方々の言を借りればまさに真清田神社が戦後復興造営に向かった往時を髣髴するものでありました。この二つの事柄を重ね合わせて語り伝え、世代を通じ時代を超えて伊勢の神宮、御遷宮の深く高い崇高な意義を伝えていくことが中今に生きるわれわれの使命であるとも考えております。

（愛知県　真清田神社　権禰宜）

沖縄県における伊勢信仰と大麻頒布について

松井英二

先日平成十九年度の神宮大麻暦の頒布数が神社本庁より発表されました。私はふと一番下にある沖縄県の数字に目をやりました。前年比六五〇体増の一四、一一〇体でした。皆さんは、たったそれだけという印象を受けたかもしれません。

私は、現在湊川神社に奉仕しておりますが、三年程前は沖縄県は那覇にございます波上宮に十一年半程おりました。その当時は、まだ一二、六五〇体程でしたので、この三年間に千五百体増えたことになります。千世帯当たりの頒布率でみれば、確かに断トツの全国最下位かもしれません。しかしながら、神職数わずか三十名に満たない県で、神職一人あたりの頒布率ならば、どうでしょうか。また、神社といっても神社本庁包括下にあるのは、たった十一社。沖縄県は昭和四十七年五月に本土へ復帰しました。戦前の宗教団体法が戦後も生きていた沖縄では、神社が法人としての権利が主張できなかったため戦災復興もままならず、未だに境内地もない神社が三社もあります。単立の神社も一社ありますが、神

職が常駐しているのが半分にも満たない状況での一万四千体は、全国的にみても結構健闘している方ではないでしょうか。

沖縄というと伊勢信仰と全く無関係な場所という印象があるかもしれません。しかしながら、その歴史は古く、一六〇五年に袋中上人が著した『琉球神道記』には、一四五一年に天照大神をお祀りした神社・長寿宮が創建されたとあります。

昔の那覇は、浮島と呼ばれた孤島でした。国王のいる首里への往来には、舟が不可欠で、中国からの使者がきたときには、大変不便でした。そこで、国相の懐機という人が国王から満潮でも自由に通行できる道を造るように命じらました。懐機は、人の力では無理だと思い、三日二晩天照大神にひたすら祈り続けたところ、満願の次の日から潮がひいて海底の地面が出てきました。そこで、七日間で約一キロに及ぶ道に七つの橋を架けて海中道路を造ったそうです。懐機はこれは全く天照大神の御神霊の賜と感謝して神恩報謝のために神社をつくったというのです。この神社は、戦前浮島神社と改称され、昭和十九年十月十日の空襲で焼失しましたが、御神体は現在波上宮境内地にある仮宮に遷されております。

沖縄本島北部にある美ら海水族館をご存じの方も多いと思いますが、そこから西に見える伊江島にも長寿宮創建百年後の一五五四年に創建の、天照大神をお祀りした権現堂が照

太寺の中にあります。照太寺の寺号は、天照皇太神宮から二文字をとったものです。

また、台風のシーズンになると何かと出て来る沖縄の島をご存じでしょうか。沖縄本島から東へ四百キロのところにある、南大東島です。真北に十キロのところに北大東島がありますが、周囲四百キロに陸地のないまさに絶海の孤島です。その島は、一九〇〇年に入植された島なんですが、そこにも天照大神をお祀りした大東神社があります。そこの例祭は、日本と沖縄がチャンプルー（まぜこぜになった）したお祭りで変わってます。御神輿も本格的ですが、奉納相撲は、沖縄相撲もありますが相撲甚句があり化粧まわしありの江戸相撲なのです。

化外の地とも呼ばれた沖縄県における神宮大麻の頒布状況と神社創建を通じた伊勢信仰についてお話してきました。私が沖縄にいた頃、参宮旅行は、皇居清掃奉仕と交互に行っておりました。沖縄の人々は信心深い人が多く、再拝二拍手一礼のお参りでは時間が短い、ゆっくりお参りさせてとよく小言を言われたものです。自前のお祈りグッズをもって、神様と語り合っている姿を今も思い出します。

神宮大麻は、お伊勢様からの預かりもの。大麻の初穂料は、全て神宮様へ。沖縄県では、神宮神徳宣揚費は、各神社とも受け取りません。以前は頒布者のことを大麻頒布従事者な

んて言われてました。名称がおかしいということで大麻頒布奉仕者と変えられましたが、神宮様から金銭的な見返りを一切受け取らないところに沖縄の頒布者は、頒布奉仕者の名に値すると言えるでしょう。

現在平成二十五年の第六十二回神宮式年遷宮のため全国で奉賛寄付活動が行われています。遷宮の意義を多くの人に知ってもらい一円でも多くご奉賛を願っているところです。二十年に一度の奉賛寄付活動という、ある意味で一過性のものも非常に大事ではございます。神宮大麻の初穂料には、伊勢神宮の維持運営に使われるもの以外に遷宮費用に使われるものが含まれています。一人でも多くの方々に、一体でも多く神宮大麻を頒布することが永続的に神宮の存立と式年遷宮の心を伝える大きな力になります。式年遷宮への奉賛寄付をお願いするとともに今後とも神宮大麻頒布に何卒ご理解ご協力を宜しくお願いします。

（兵庫県　湊川神社　権禰宜）

幼年期に感じたお伊勢さん

伊藤克孝

これからお話しさせて戴きますこちらの演題を「幼年期に感じた」と「お伊勢さん」とにわけてお話ししようと思います。また、これは個人的なことですが、私自身、生まれがこの伊勢の地でありまして、中学一年生まで住んでおりました。幼少の頃の思い出を振り返ることで、当時、「お伊勢さん」をどう感じていたのか、皆様にご紹介できればと思います。

まず、人にはそれぞれ好き嫌いというものがあります。社会人になってからの社交の場や人付き合いの中から生まれた好き嫌いはまた別でしょうが、人が人として人格形成されるのは、幼年期に過ごす環境に大きく左右されるものです。子どもながらに物事に対してどう感じ、どのように接するべきか、どんな疑問をもって臨むのか。長い人生の中で非常に大切な時期なのです。この時期に抱いた印象、イメージは、大人になってもそう変わらないものですよね。なかには、この時期に純粋に好きだと感じたものが、そのままその人

の人生そのもの、職業となる場合もあるでしょう。

では次にここからお話ししますのが、私自身の思い出話となります。もしかしたら、皆様が感じる「お伊勢さん」と、私が感じる「お伊勢さん」は少しずれるところがあるかもしれません。私は伊勢で生まれ、神宮のおひざもと、この神宮会館の向かい側にあります五十鈴川幼稚園に通い、地元の小学校で幼少を過ごしました。そこには伊勢を地元とする、ならではの生活環境が整っていました。クラスで一年に一度は必ず神宮参拝をし、家に帰ってからも友達と、おはらい町で遊び、五十鈴川で遊び、まさに「お伊勢さん」が生活の一部でありました。前回の第六十一回式年遷宮時には、内宮へ御用材を運ぶ川曳に友達同士で仲良く参加させて戴き、良き思い出となっております。

祭りの時だけでなく、日常に、ごく自然に神様を意識し（意識と言う言葉は不自然かもしれませんが）、神様とともに暮らしている実感がありました。大きく言えば、子どもながらにぼんやりと日本を、日本の文化を、国を感じていたのでしょう。

中学一年生に伊勢の地を離れ、父親の実家があります広島県にもどりました。父は片田舎の神社の宮司をしておりますが、一年に一度必ず、その支部の教化活動の一環として、地域の氏子さん方を率いてお伊勢参りをしております。氏子さんの中には毎年参加されて

いる方々がいらっしゃいまして、直接お話しを伺った訳ではないのですが、私はこう思うのです。氏子の皆さんにとっての故郷、ふるさとはもちろん地元であるその地域なのですが、「お伊勢さん」に「ふるさと」というものを感じているのではないでしょうか。言い換えますと、お伊勢参りに現代の生活よりも日本を感じることができるから、毎年気持ちよく参加されているのではないのかと。

自分の生まれ育った町、田舎がもちろん故郷、ふるさとではありますが、長い人生を生きていく上で必要なのは、「心のふるさと」と申しますか、心の拠り所、心の安らぐ場所ではないかと思います。有難いことに私にとっての「お伊勢さん」は、生活に神様を感じることのできた環境でありました。生まれ育った地元であって、尚且つ、心の安らぐ「ふるさと」であったのです。それに気付いたのは神職となってからであったのですが、本当に幸せなことでございます。

最近考えていることなのですが、現代、特に十代の若者達は家庭環境、社会情勢などの様々な要因から、心の拠り所、心の安らぐ場所を取り上げられている環境にあります。近年、若者による非常に悲しい事件が多発しておりますが、これは残念ながら、「心のふるさと」を持ち得ることのできなかった若者、幼年期に悩み、コンプレックスを抱えながら不

安定な幼年期を過ごしてきた若者に多く見ることができます。大げさですが幼少をお伊勢さんで過ごした私として、また一人の神職としての立場から申し上げることができることは、毎日の暮らしに神様を意識して下さい、は急でしょうから、通学途中でも、待ち合わせ場所でも良いので、神社に足を運ばれた際にはお参りをすすめるよう声を掛けていきたいと思います。また、あそこの神社の神職さんに相談にのってもらおう、なんて言って戴ければこれ以上のものはないですね。神社に心のふるさと、安らぎを感じて戴ければ嬉しいです。

（兵庫県　湊川神社　権禰宜）

熊さん、八つぁんのご遷宮

河本文夫

平成十八年初頭、日本中津々浦々の大きなお社から小さな村の鎮守のお社の社頭に、一枚のポスターが貼られました。そのポスターは、神明造のお社の千木が天に伸び、太陽の光が雲間から千木に降り注いでいる実に荘厳な本殿、そして「伊勢の神宮　平成二十五年第六十二回式年遷宮」とあります。

即ち、これは、私どもの日本中津々浦々にございます氏神様の本宗と仰ぎます伊勢の神宮の二十年に一度の大事、社殿を二十年に一度、同じ形に新しく造り替え　旧殿から新殿に神様にお移りいただく「式年遷宮」への準備がスタートした事の広報のポスターでございます。

まさに日本の究極の文化、命の伝承が平成二十五年に迫っていることを伝えるポスターでございます。

すでに六十一回、単純に計算しましても、一、二〇〇年以上前。中断期がありますので

一、三〇〇年前六九〇年の持統天皇の時代に始まりました。当時の私たちの先祖も、今私たちが頂いているあの社殿と同じ社殿を眼にしたはずでございます。一、三〇〇年前の文化が今新しくよみがえってくる、まさに日本の文化、命の伝承そのものではないでしょうか。ところでなぜ二十年なんでしょう。二十五年でも良いのではないか。三十年でも。

諸説紛々ですが、そこで、当家に伝わる遷宮の二十年の秘密。皆様方にだけお教えしましょう。これ本当。

昔むかし、このように立派なポスターのないころ、私のお預かりしているお社の社頭に同じように、先々せーん代の宮司の手書きのポスターが張られたのでございます。そこに丁度、大工棟梁の熊さんと、弟子の八つぁんが通りかかり、そのポスターが目に入りました。

丁度宮司の耳に熊さんと八つぁんの話し声が入りました。

「ほー、お伊勢さんの遷宮か、前回の遷宮からもうそんな時が経ったかなー。」

「熊さん。そのお伊勢さんの遷宮ちゅうのはなにかい。」

「ありゃ、八つぁん　遷宮知らないのかい。いやだねー教養のないもんは。おれたちのお伊勢さんの遷宮じゃないか。遷宮というのはね。二十年に一度、お社を、新しくし、神様

がその新しいお社に引越しされることをいんうじゃないか。お前こんなこと知らないのか。学校でも習ったろうが。」

「おかしいな、俺の行った、学校じゃ、教えてくれなかったな。」

「お前が行ったのは、山の分校だろうが、俺は、本校だ、本校と分校はそれくらの差はあらあ。」

「熊さんったら、いやだねー。いつも山の分校、山の分校と言って、馬鹿にするんだから。それじゃなにかい、神様は二十年に一度は新しい家に住めるのかい。いいなー　俺なんかずーとぼろ長屋だぜ。あーあ　俺も神様になりたいな」

「なにいってんだ。おまえだったら、貧乏神だな。そんなことというから、いい大工になれないんだよ。信心が足らんな。」

「そりゃそうと、何で二十年なんだい。自分で言うのは何だが、この俺でも、おれの手にかかった家は一〇〇年近くは持つぜ。」

「また、教養のないものは。訳のわからんこと言うな！二十年、この二十年は常の識よ。常識だい。神代の昔から、決まってんのよ」

「決まってるって言ったて、何が決まってるのよ。」

「二十っていうのは人間が最初に知る基本の数字よ。人間には指が何本ある。」
「指、えーと。十本、十本だろう。」
「また、また、八つぁん、頭は何のためについてる。よーく考えてみな。」
「あそうだ足がある。なるほど二十本だ。」
「そうだろ、二十本だろ。」
「人間だけじゃないよ。この八幡様の祭でも、ガマの油売りがくるだろ。手前とりだしたるは四六のガマ、四六五六はどこで判る。前足の指が四本、後ろ足の指が六本。即ちこれ、ヒキ面相は〝四六のガマ〟だ。サアーサお立会い、このガマからこの油を取るには、山中深く分け入って。……っとこうあるだろう。このガマでも二十本だ。わかるか。神代の昔から、森羅万象、神社仏閣、すべての基本の数字は二十よ。人間おぎゃーと誕生から二十に一番初めに気づくんだな。山の分校卒業はこれだからこまるなー。」
「さすが熊さんだ！　やっぱ棟梁だけあるな！」
これを聞いておりました宮司。当らずも、妙に納得させられる理屈に感心しているところでありました。
と、これが我が家に伝わる遷宮二十年の説でございます。なにはともあれ、皆さんの頭

には、遷宮が完全にインプットされた事とおもいます。よもやご遷宮お忘れになることはないでしょう。神宮の大事。皆様のお協力賜って、平成二十五年には、恙無く遷宮大祭が斎行されることをお祈りするところでございます。

（注）生物学的にガマは前足も後足も五本指です。骨の退化等により見た目に四本六本に見えるのです。

（山口県　宮尾八幡宮　宮司）

ご遷宮「生命（いのち）の鼓動」

宮崎國忠

こんばんは。だんだん暑くなってきましたが、小学校低学年の保護者の皆さんにはお仕事でお疲れのところをお集まりいただきありがとうございました。

この夏「神宮展」が熊本市鶴屋ホールで開かれることになり、子供さん方に獅子舞で出演していただきたいと思い、お願いするためにお集まりいただきました。

伊勢神宮が二十年に一度、すべての建物をお建て替えになり新しい御殿に神様をお移り願い、新しい生命力をいただくために国民総がかりで行う大事業が「御遷宮」です。千三百年も続いている伝統行事で、しかも未来志向ですから更に次の世代へ願いをつなぐという気持ちをこめて子供たちに参加してもらおうという「子供たちのお祭り伝統芸能の集い」が企てられました。私たちも出演できたら素晴らしいなと思った訳です

ご承知のように志岐保育園のこども獅子舞は十五年以上の歴史があります。こどもたちが自分たちでゴミ箱のふたやティッシュの箱でお祭りの獅子舞のまねをしていたのがきっ

かけです。お祭り、太鼓踊り、獅子舞は大好きです。それでは、と保存会の皆さんにお願いしてきちんと指導してもらうことにしました。

天草には四十三通りの獅子舞があります。私たちの獅子舞はこの中でも長崎系統で珍しいものです。紺屋町の人達が大事に習い、伝えてきました。みくちゃんのおじいちゃんたちがそうです。その後保存会が結成され、引き継がれています。保存会の人たちがお祭りのとき獅子舞を踊るのを良く見ていますから、教えてもらうことになると、真剣そのものです。六月はじめて九月の運動会に全員が覚えて披露できるよう日程を作っています。大人の獅子と同じ動作で踊りますので十七分かかります。獅子頭は重いし、うしろは体を曲げ、かがみながら力強く足を踏み出します。つらいと思いますが皆真剣です。練習にも弱音を吐きません。指導を受けるときの眼差しはまるで別人、大人の雰囲気さえ感じさせます。年少児もみんなで見学に集まり応援したり真似したり、大きくなったら自分たちができる。と伝承に期待感をたかめます。これが伝統の創造というものでしょう。運動会で披露したあとは秋祭春祭です。行列の途中では、小型ですが本物と同じつくりの獅子頭をもち地域の人達の暖かい応援を浴びながら熱演します。

「大人の獅子舞より上手ばい」「かわいい子供たちの獅子だけ舞えばよかばい」という声

もあがる程ですが、それはちがいます。お祭りのときの本物の獅子があって自分たちの獅子、指導を受ける喜びも子供たちに宝物なのです。その他慰問や大会、発表の都度認められる喜びを味わっています。年々次々に引き継いでゆくそんな伝統を備えている獅子舞をこの機会に見ていただくことはとても意味のあることと思うのですが、神宮展が八月二日ということなので披露するためにはちょっと練習期間がたりず早すぎるのです。そこで経験ある小学校低学年の皆さんにこうしてお願いすることにしたのです。

この集いに出ることの意義ですが、日本にとってかけがえのない伊勢神宮式年遷宮を私たちの時代で絶やしてはならないということです。

「伊勢神宮は心のふるさと」といわれます。このイメージ（感覚）は神宮の神域に足を一歩踏み入れると、身体で、五感で感じることができます。私は大学生活を伊勢で送りました。入学式の前日初めて父とともに伊勢神宮にお参りし、雨に煙る杉木立の中に静けさと清潔さそして透明な空気に打たれました。その素晴らしさは神域に身をおくだけでわかります。誰もが何ともいえぬ清々しさを感じることができます。

「なにがあり、誰がいらっしゃるのかは、よくわからないけれだも、このたたずまいには心に強く訴えてくる何かがあり自然と涙がこぼれてくる」と和歌にしてたたえた人もいま

す。外国からもたくさんの人が訪れ、キリスト教、イスラム教、宗教をしっかりともった人たちもすべてのエネルギーの源を感じるといった感想を漏らしています。「緑の豊かな清らかな流れみずみずしい生気にみちたこの場所は、天国だ」とたたえたイラク人もいました。

日本にとっては皇室もそうですが長い歳月をかけて大事に守ってきたもの、しかし一度壊してしまえばとりかえしのつかないかけがえのない宝物です。決してなくしてはならない。これが今を生きる私たちの務めであり、遷宮もまた、その大事な大事なものといえます。

一年のはじまりにはまず伊勢神宮のお札を祭ってスタートするように、日本には生活のリズムがあってそのリズムを大事にしてきました。日本人は宇宙のリズムと人間の体のリズムをうまく重ねることができる、言い換えれば宇宙と人との命の鼓動を融合調和する重なりを鋭く深く感じる能力をもっているといわれます。

宇宙のリズムとは何でしょう。身近なところでいえば地球の自転がありますね。一日です。「おはよう」「こんにちは」「おやすみ」地球の公転があります。太陽のまわりを一回りすると一年です。四つの季節があり生産物の植え付けと収穫そのスタートは「あけまし

ておめでとう」神迎えをします。神棚に新しいお札をお祭りします。生まれたあとこれを二十回繰り返すと人は成人となり次に厄年、次に還暦となります。

「月の公転」卵巣は月の動きを見ることもなく月に一度左右交代に一つずつ排卵します。そうして命が芽生えるのです。こどもはこの共鳴をくり返す母からしか命を得ることができません。誰にもお母さんがいて、そのまたお母さんがいてそのまたお母さんがいる。どのお母さんも月の公転とリズムは同じでした。くり返しくり返し命をつないできたのですね。

二十年に一度の式年遷宮はなぜ二十年なのか色々な答えが用意されました。式年遷宮はそのような宇宙リズムとの深いかかわりをいう人もいます。宇宙との命の鼓動を感じることができた天武天皇はじめ古代人たちが、インスピレーションの働きによって直感されたのは色々な答えのすべてを含んでいるようです。

最も新しい分子生物学は、これを裏付けるかのよう新生物を構成する最小単位の分子は、壊れ、生まれる、入れ替わるをくり返し、一定期間にすべて入れかわって生命を保つといわれます。「これが遷宮だ」と思わず膝を打ったことでした。

大事なものを大事に守っていくこと、これが私たちの務めです。未来が、こどもたちに

引き継がれる不思議を、謎を解いてくれるでしょう。

どうかこの大切な事業が広く知られ成功するようご理解ご協力をお願いします。

（熊本県　志岐八幡宮　宮司）

神宮と興玉神

小倉孝之

私は地元伊勢の出身で、二見興玉神社の小倉孝之と申します。よろしくお願いします。私が奉仕している二見興玉神社は、この宇治の地より六キロ程離れた伊勢市二見町に鎮座しております。

『日本書記』に、「神風の伊勢の国は常世の浪の帰する国なり。傍国のうまし国なり。この国におらんとおもふ。」と有名な一節がございます。当社は伊勢の国の最も東端に位置し、往古より神宮参詣を前に人々が禊を行い穢れを落とす〈垢離かき場〉として知られております。海中の大小の岩に注連縄を張り架け結ばれている夫婦岩は、その東の沖合の海中に鎮まる御祭神猿田彦大神の縁の霊石とされる興玉神石、又、その遥か先より出ずる日の出を拝する鳥居であると見做されております。この興玉の興と沖は同義語であり、興玉とは魂を招く、魂を振起す事を意味しており、人間にとって最も大切な霊魂を浄化し、若々しく甦らせ、新たな生命の活躍を賦与する根源的な役割がございます。神道五部書の

ひとつ『伊勢二所皇大神宮御鎮座伝記』は、猿田彦大神の神記と別称される事がございますが、その中に、「吾れ、よく魂魄を返すが故に、興玉神と号く」と記されております。丁度、今月二十一日の夏至の日に一年を通して一番夫婦岩の中央より朝日を拝せる事が出来るのですが、従って興玉神の働きが最も大きくなる時期でもあります。そして冬至には皇大神宮の宇治橋の丁度中央より朝日が拝せます。夫婦岩の中央に朝日が昇る景観は、その神厳しさは筆舌に尽くし難い感動を覚えます。人々は朝日を拝み、新たなる太陽の甦りにまさにわが魂の生まれかわりを重ねられる。私共職員も毎月禊を行いますが、早朝の浜辺にて禊を行う際、汐をかぶり波間に体を委ねながら、東の彼方の差し昇る太陽の光を体に浴びて、太陽と海と人間が一体となり、新たに蘇りを体感する訳です。

興玉神のあゆみを海から陸に辿れば、二見ヶ浦から五十鈴川を遡り、中流域中村の地には皇大神宮の摂社宇治山田神社を囲むように小高い森があります。この森は「興玉の森」と称されており、『伊勢参宮名所図会』には、「興玉の森」が次のように、記されております。「月読の宮の南にあり。猿田彦大神の旧地なり。五十鈴の宮地を皇太神宮に奉りて、退き給ふ故、神殿はなくして鳥居一基を立てたり。猿田彦大神は道祖神なり。鼻の長さ七咫、背の長さ七尺あまり、正に七尋と云ふべし。又口尻明く輝り、眼は八咫鏡の如くにして、赫

然り。天孫尊天降ります時、道路に立つ。これによって天鈿女命、其胸乳をあらはに出し、裳帯を臍の下に抑したれ、笑ひて誰ぞやと問ふ。衢神答へて曰く、天孫命當に降行すと聞きて、こゝに迎へ奉りて相待つ、則先立ちて啓行かんといふ、鈿女又問うて云く、汝は何処に到りまさん、皇孫何処に到りまさん、答へて曰く、皇孫は筑紫日向高千穂串触の峰に到りまさん、吾は伊勢国の狭長田五十鈴の川上に到るべしと云々。按ずるに大田命は此神裔なり。受け伝えて皇孫日神の宮所を守り、終に人皇十一代垂仁天皇の御宇倭姫命に逢ひ奉りて、宮所を五十鈴川上に導き給ふ。是皆猿田彦の神徳なり。今諸社の祭禮の神幸に、王の鼻とて渡御あるは此神にして、道祖神導きの故なり。」この興玉の森には、古来より祭儀が行われていた祭壇があり、先に記される様に、遥か神代の昔、猿田彦大神は瓊々杵尊の天孫降臨に際して天の八衢にて出迎え、日向の高千穂へと道開きをした神であり、この五十鈴川流域には縁の深い神でもあります。

興玉神は、五十鈴川を遡り、中村の興玉の森に祀られ、さらにその川上の皇大神宮の地主神として祀り来到っております。現在、皇大神宮の興玉神は所管社として祀られており、『神宮要綱』によると、「興玉神は本宮板垣内、西北隅に鎮座ましまし、古来神殿を造らず石畳を構えて祭祀せり。御鎮座伝記、神名秘書などに、興玉神とは衢神、猿田彦大神、又

はその子孫の大田命の御別称として、五十鈴川上すなわち皇大神宮の地主神なりとす」と記されている。私も、大学時代に神務実習にて御垣内の清掃奉仕をさせていただいた際に、一度だけ拝ませていただきましたが、神宮では最も重んずる三節祭（六月・十二月の月次祭、十月の神嘗祭）が斎行されるにあたり、先ず夕刻に興玉神祭として祭儀が行われます。建久三年（一九一二）に、荒木田忠仲が撰録した『年中行事』には、禰宜以下一殿（五丈殿）に列立、忌火屋殿地北を経て興玉御前に参進、地祭物忌父等御神酒並御贄等を供し、御巫内人が祝詞を奏し、八度拝、直会、手水の後、御占神事以下へ続く興玉神祭次第が記されております。三節祭に先立ちこの祭儀にて無事修められるよう祈念されることは、現在も同様であり、神宮祭祀中の重儀たる三節祭に先行して特に興玉神祭がある事という事は、神宮との関わりの上で二見興玉神社の位置付け、意義を考える際、最も元と成るわけであります。大祭の祭儀の前に先づ興玉神を祀る、これは神宮の御遷宮にあたり、御木曳行事、お白石持行事に奉仕する地元神領民が先ずそれぞれの奉曳団にて「浜参宮」と称し当社に御参拝をいただく由縁であると考える訳でございます。

今大会のテーマは「神宮・御遷宮」という事です。神宮の御遷宮を評して「生命のよみがえり」と言われますが、日々奉仕する中で参拝者にこの神宮参拝にあたっての当社の役

割、そして神宮を奉賛し、「御遷宮」の意義を伝えるように研鑽したい次第でございます。御静聴ありがとうございました。

（三重県　二見興玉神社　権禰宜）

神宮への祷り

波多野　學

神主となって三度目の神宮御遷宮を迎へます。神様に健康でご奉仕できることを有難く思ってゐます。

日本人は朝起きれば、お陽様・ご先祖様に手を合はせ、夕には一日の感謝の祷りを捧げた「祷り」の民族でした。神宮の『神道五部書』を解説した『五部書説弁』には「神垂ハ祈祷ヲ以テ先ト為ス」、先づ祈りに祷ることがなければ、神様の御威稜、御神徳は戴かれないと説いてゐます。

昭和二十年の敗戦で、占領下民族の歴史や伝統が軽視され、苛酷な思想統制がなされ、信教の自由と云ふ名のもとに、神道指令下、神社への参拝が制限されました。日本人から神様への祷りを奪ったのであります。

母なる御祖神天照大御神を内宮に祀る神宮は、日本人の心のふるさとです。御鎮座より二千年の歴史を通して私たちの先祖は、伊勢に行きたい、伊勢路が見たい、せめて一生に

一度でも、と伊勢音頭のやうに、国の宗祀と崇め憧れてきました。平安時代の『大神宮諸雑事記』、鎌倉時代の『神宮雑例集』にも、多くの国民が参拝したことが記録に残されてゐます。皇室の御先祖、国民の御祖神（みおやがみ）として二十年に一度御遷宮が齋行され、日本民族の蘇（よみが）へりを果してきました。

あの中世の戦国時代、信長や秀吉も御遷宮に賛助を惜しみませんでした。家康なきあと東照宮を祀ったのも、神宮にあやかっての東の天照る社であったのです。

江戸時代はお陰参りが盛んになります。全国津々浦々より御師（おんし）に導かれ、地域を代表して参宮しました。幕府も認めたお陰参りは、地方の人達にとって又とない見聞をひろめる機会でもあり、路銀の為の替為制度ができました。

神宮の式年遷宮は国家の大事業、天下無双の大営、皇家第一の重儀であります。

明治天皇様は日本民族の総氏神として、神宮大麻の全国頒布に力を注がれ、御遷宮には殊に古制遵守を重んじ、造神宮使庁で準備を調（ととの）へさせたのであります。

内務省神社局が発足したのは明治三十三年のことでありますが、内務省の神社建築技師は少なく、特に神宮の御遷宮に力を注ぎ、技術者の多くが造神宮使庁の技手や嘱託でありました。

敗戦を機に政教分離と云ふ訳の解らぬ御為転(おためごか)しにより、国の重事である式年遷宮に、国家が直接携はることができなくなりました。

『禁秘抄』の云ふ「禁中ノ作法、神事ヲ先ニシ、他事を後(あと)ニス」の皇室の御訓へと日本人の美はしい祷りの心が切り捨てられたのであります。

しかし、四年遅れて昭和二十八年、祷りを忘れぬ全国の氏子の皆さんを始め、経済団体も身を挺して、国民挙げて奉賛のまごころを尽して第五十九回神宮式年遷宮が成し遂げられました。

皇家第一の重儀としての御遷宮に、昭和天皇様は心痛であったことでせう。畏き大御心に添ひまつる国民のまごころに、どんなに心強く嬉しく思はれたことでせう。

昭和四十八年十月、第六十回式年遷宮が滞りなく斎行されました。昭和天皇様は

秋さりて　そのふの夜の　しづけさに　伊勢の大神を　はるかにおろがむ

と詠まれてをります。天皇様が祷られてをります。恙なく斎行された御遷宮に安らかな叡慮が伝はってまゐります。

平成二十五年、第六十二回式年遷宮を迎へます。祈りに祷ることが日本人の生くべき訓へであります。永い歴史と伝統を守り抜き、見事に御遷宮を完遂しませう。

吉川英治さんは

ここは心のふるさとか。そぞろ詣れば旅ごころ。うたた童べにかへるかな。

と詠ってゐます。神宮参道の玉砂利を踏んでゐると純真な童心にかへる、母なる日本人の心のふるさとにもどってゐます。

天照らす　神のみ光　ありてこそ　わが日の本は　くもらざりけれ　（明治天皇御製）

（福岡県　高見神社　宮司）

神領民に生れて

坂口文彦

平成二十五年の第六十二回神宮式年遷宮を控え、この伊勢の地に於いて開催されます第四十二回神道講演全国研修大会参加出来ましたこと大変有難く、大神様より御縁をいただいたと感じておる次第でございます。

さて、私は出身が伊勢でありまして、朝熊山の麓、伊勢市一宇田町という山里であります。我が町は内宮様の神領で、神宮の式年遷宮に於いて、お木曳やお白石持ちを川曳奉仕する神領民であります。

第六十回の神宮式年遷宮の時は小学校三年生、前回の御遷宮に於いては結婚した年で二十八歳でした。大学生時代に御樋代木奉曳にはじまり、神職拝命後、神社庁の一日神領民で参加したのを加え、四回もの奉曳を奉仕させて頂きました。第六十一回御遷宮で父は一宇田町区長を勤めておりましたことから、神宮様から「奉曳団長」を仰せつかり、まことに名誉なことであり、一宇田町の奉曳団には親族、遠い親戚も参加したことを覚えてい

ます。

今回は一昨年、第六十二回の式年遷宮のお木曳行事に参加した時のお話をさせて頂きます。私は現在、熱田神宮に奉職しております。地元のことはもう二十年程分からないでいます。前回奉曳団長を仰せつかった父も八十歳になり、とても川の中へも入れない体です。同級生二人四十歳過ぎ、私等より若い者が十人、一番多い年代で五十歳組でも十五～十六名、前回の様に奉曳できるのか？更に他の町内は三本の御用材が載っているのに、うちの町内は一本。大丈夫かなと思いました。川に入って同級生が、

「何も心配いらん、町の人口の六倍以上一日神領民の人等が居るで」

「一宇田だけで曳けよかさ」

「ようけてったい（手伝い）に来てくれとる」

有難いな。同級生と話ました。父が川原で立っていることすら出来ない為、四歳の私の息子と一緒に綱を執らせてもらい、御用材に一番近い梃子方もやらせてもらって申し訳ないが、町内の皆に断って見送るに留まりました。

一宇田町の御木は一日神領民の絶大なる応援を得、夕刻無事に内宮まで奉曳出来ました。川の中で同級生と話したんです。

「この人達おらんかったら、多分曳けんな。俺等より若いもの皆、都市部へ出とる。あんたも含めて。でも二十年に一回皆、燃えにくる。いずれ、若いのに俺等の子供に木遣や梃子伝えないかん。お木曳や、お白石持は大事やで。子供らが働けるところがないのが不安やけど…」

言う通りです。二十年先、四十年先を考えとかないとダメです。一宇田町は内宮さんの神領民だという自覚を思い知らされました。別れ際というか、曳いている途中でしたが、同級生が

「町内、地元民は少ないけど、俺ら誇りみたいなもんあるし、手伝いきてもらえたら十分曳けるで」

この一言で心強くなりました。本当有難いです。

伊勢市の皆さんでも、四郷の一宇田町ってどこにあるの?と聞く位、知られていないと思います。四郷の中でも一番人口少ない。川曳を奉仕する町は他にもたくさん有り、それぞれ賑やかで、本当一宇田町の法被も地味です。私は五十鈴川の清流を表す青系のこの法被好きですけど。御木は一本で少々さみしいが、曳く手口は四郷地区、いや川曳奉曳区全部の中で一番上手いのではと思っています。お木曳の時だけちょっと帰ってきて、少しし

か御木曳いてないんですが、一日神領民の皆さんのお蔭で、私等神領民が今一度、町のこと、家族のこと、これからの時代に向かって今居る私達がやらなければならないこと、本当に考えることができたと思います。御遷宮なければ、この様に町内まとまらないです。

〝神様のお蔭と一日神領民の方々のお蔭やな〟

と実感したと同時に、

〝一宇田町生まれの神領民やで〟

という誇りを感じることができたのです。

今回、初めて神道講演全国研修大会に参加させて頂き、とらえどころの無い「体験話」になってしまいました。これから御遷宮行事の中で「お白石持」が有ります。お木曳と同じくこちらも川曳なんです。伊勢弁で、パッとしないことを「ねっから、ほっこりせんのでな」と言います。地味で田舎でほっこりしませんが、山林で鍛えた技術が梃子方に伝承されています。川で「一宇田町」の幡を見かけましたら、是非応援願います。ご参加もお待ち申し上げます。

（愛知県　熱田神宮　宮掌）

心・技・体

田村　美津男

伊勢の神宮様で、第六十二回式年遷宮が、平成二十五年十月に行われます。

この神宮式年遷宮は、二十年に一度古式のままに社殿を新築し、御装束・御神宝等も新しく整え、大御神に、新しい神殿へとお遷りを仰ぐ行事・作法でありますが、千三百年の永い歴史と伝統を有し、日本建築の原形を今に伝え、日本古来の伝統・文化・技術の伝承をなし得る、極めて文化的意義が高いものであります。

私は、この「式年遷宮」の、伝統・文化・技術の言葉をつぎのように表したいと思っています。

その一として「心の伝統」である、その二として「技の文化」である、そして、その三として「体の技術」であるということです。この三つの言葉には千三百年の歴史を経て「受け」「伝え」「行く」という日本人の、すばらしい精神が込められています。

「心の伝統」とは、二十年ごとに、新しいお宮を造って、大御神様にお遷りを願うこと

が、脈々と受け継がれてきたことです。

又、この「心の伝統」は、千三百年の歴史を受け伝えて町衆にも広まり、おかげまいりとつながり、お伊勢参りは、全国の国民が、二十年に一度の「式年遷宮」を表す心ではないかと思います。

次に、「技の文化」とは、二十年ごとに、同じ形の社殿を新しく造り替える、また、御装束・御神宝等も新しくすることによって、師匠が今まで教わってきた技巧の学問を教化し、教えを導くことが出来ると云うことです。

又、この「技の文化」は、大工・鋳物師・織物師等・匠達の技ではないかと思います。

そして、「体の技術」とは、二十年ごとに、日本の最大最高のお祭りを、繰り返し行われる行事・作法であり、「式年遷宮」に、ご奉仕・参加することです。

又、この「体の技術」は、奉仕員・神明講・神領民等が、このお祭りに参加させていただいたことで、自らが、身をもって経験するすがたが、体ではないかと思います。

「心の伝統が、国民に」、「技の文化が、匠達に」、「体の技術が、奉仕員に」、二十年に一度だからこそ「心・技・体」の精神が確実に、受け・伝え・行くものであります。

次に、私が好きな言葉として、

内外清浄になりぬれば、
　神の心と我が心と隔てなし

この言葉は、南北朝時代の文化人であり、医師でもあった、坂十仏の言葉でありますが、元々は、古より伊勢神宮の神主等が、広めた言葉であります。

この言葉についてお話をさせていただきます。

神道では、清浄を尊ぶが、その清浄には内清浄（心の清浄）と外清浄（身の清浄）があるとされています。禊や祓を行い心にも身にも一切の穢れの無い状態になれば、道理に背く邪心を抱くこともなく、また誠心誠意祈ることができるようになります。

そうすれば神明と自身の間には隔てるものがなくなってきます。

逆に「神は非礼を享けず」と古い言葉にもあるとおり、不浄を心身に隔てた状態では神明は遠ざかられます。

そこで「式年遷宮」を迎えるにあたり、私たちは、日常生活においても心身の清浄を心掛け、神明のみちびきにより、人間本来の元の気（元氣）をとりもどし、一歩前進、希望をもって清く正しく生き抜こうという、積極的な新しい生活を力強く築いていく覚悟を新たにすることが大切であります。

我々の祖先は、太陽を、大地を、火を、水を、全ての自然を神として、自然を畏れ、自然を敬い、感謝しつつ自然と共に、生きてきた日本人、私たちが生活していく中、安らかで、おだやかで、無事である毎日を送ることは国民一人一人の願いでありますが、今正に飽食の時代、ものが溢れ豊かになった昨今、日本は混沌とした渦の中で、将来を模索しているように感じられてなりません、日々の情報を垣間見ますと、今の世の中には信じられるものがあまりにも少ないように思われますが。

連綿と守り伝え続けてきた「式年遷宮」が、人々の思いや、素朴な信仰心、これこそが正に日本人の神祀りの原点であると思うのです。

この、神祀りの原点「式年遷宮」が、「心の伝統・技の文化・体の技術」の言葉を通して、人々の心に一筋の光を受け・伝え・行く精神を、広げていきたいと思います。

（京都府　石清水八幡宮　権禰宜）

幼児剣道

久田貴之

鎌倉の鶴岡八幡宮で奉務しております、権禰宜の久田貴之と申します。さて私は、奉職して二十年になりますが、当宮の幼稚園主事を八年間兼務し、最近特に感じたことから、剣道保育を取り入れるに至った経緯を幼稚園の保護者向けにお話ししたいと思います。

本日はお集まりいただき、ありがとうございます。本日お集まりいただきましたのは、次年度の年長さんより新しい保育を取り入れることと致しましたので、その事についてお話しさせていただきます。

近年、特に園児の特徴としまして「我慢が出来ない」と言う点が顕著であり、三十分も集中力が持たなくなってきている傾向にあります。具体的には、「人の話をじっと聞いていられない」「楽しいことでもすぐ飽きてしまう」「集団の中でのルールが守れず、自分勝手である」「暑い・寒いの我慢ができない」等が見受けられ、実際に当園でもこのようなお子

様たちが増えてきております。このことは、小学生になり、授業中に座っていられない、ふらふら立ち歩く等の、いわゆる学級崩壊の原型となり、これは、今申し上げた、「我慢が出来ない」というところからきていると思われます。

当園では、何か、子ども達に健康的で楽しく、そして集中力をつけさせてあげられるような保育はないかと考えて参りました。そして、これなら子ども達がみんなで楽しく成長できると思い、本年度より剣道を取り入れて保育することといたしました。

当園を含む神社の幼稚園・保育園の多くが、「全国神社保育団体連合会」と言う組織に加盟しており、神道を通しての幼児教育の実践と研修を行っております。その中で、保育者が常に心がけている神社保育の基となるものに「日々の誓い」と言うものがございまして、ここで読み上げさせていただきます。

「日々の誓い」

私たちは次の三ヵ条を誓い、日々その実践に努めます。

一、私たちは　授かった子どもを神さまといつくしみ、
　　ともに和(なご)みつつ保育にいそしみます。

一、私たちは　鎮守の森のすばらしさにふれ、

一、私たちは　日本の歴史や伝統を大切にし、
　　生命（いのち）の尊さとつながりに気づかせるようつとめます。
　　誇りと思いやりをもって子どもたちに接します。

この三ヵ条を柱に日々保育しております。

先ず、一条目は、子どもは神さまからの授かりものとして大切に育てること。二条目は、鎮守の森、すなわち、神社の恵まれた自然環境の中で、自然と生命（いのち）の尊さを実感し、自然に親しむ心や畏敬の念を育てることを誓っております。このことは、今流行りのエコ（ここでいうエコは、エコロジーの略で「環境に配慮してる」「地球に優しい」こと）、次に、アロマセラピー（これは、「花や木など植物の芳香成分を用いて、心身の健康や美容を増進する」こと。「お香やフレグランス・キャンドルも含め、生活に自然の香りを取り入れてストレスを解消したり心身をリラックスさせる」こと）又は、癒し（ここでは、「心と身体を癒す」こと）等、これらは、お母様方を始め現在の人々に関心が高く必要だと感じている事柄と同じであり、これらは神社が昔から大切に守り続けてきたものでございます。ぜひ幼児期にたくさん、鎮守の森で自然とのふれあいを体験させてあげたいと思っております。そして三条目は、自国の歴史や伝統文化を大切に思うことで、社会に出たとき、また、世

界の人々と接したときに、誇れるような大人に成長することを願って保育をすることを誓っております。

そして今回は、三条目の「日本の歴史や伝統文化を大切にする」という部分を更に具体化して、今、子ども達が必要としている保育とは何かを考えました。そして今回取り入れたのが幼児剣道でございます。そこで、この幼児剣道の特色について少し説明させていただきます。

当、鶴岡八幡宮武道場は、日本古来の武道の普及振興を図る総合道場として、また、武道を通じて心身の鍛練と誠実な人間形成に寄与する精神修養の道場として昭和五十八年に開設いたしました。以来、柔道・剣道・弓道・合気道に大人、小人合わせて約五五〇名の門人が毎日、稽古に励んでおります。道場は、弓道以外の三科は、夕方より小人の部、夜に大人の部で各科週二回ずつ使用しておりますが、午前中は使用しておりませんでした。そこで、幼稚園のお母様の健康づくり、ふれあいの場として、園児の保育時間中を利用し、午前中来館いただける年輩の先生にご指導をお願いして、七年前より剣道教室を五年前より合気道教室をそれぞれ始めました。毎年、参加したお母様方にはとても喜ばれており、子どもが卒園した後には、親子で門人になる方も多くいらっしゃいます。

そこで、保護者だけでなく、年長児（五歳児）全員に武道を取り入れたいと考えていたところ、幼児剣道を二十五年に亘り指導されている先生と出会い、今回の実施となりました。先生は、「剣道は、日本古来の伝統文化であり、礼儀礼節を尊ぶ武道です。この礼儀・礼節は、子どもの頃にしっかりと身につけさせていく必要があります。そして、神様やまわりの人に対して感謝の気持ちを忘れない心の豊かな子どもを、剣道の教えを通して育てていきたいのです。また、剣道の心は世界に誇れる日本の精神文化です。これからの日本を背負う子ども達に剣道の精神『打って反省、打たれて感謝』の心を広めて、心と体のしっかりした子どもを育てましょう」とおっしゃいました。まさに、私が冒頭でお話しいたしました、「我慢できない」子ども達には、「この剣道を取り入れることこそがふさわしい保育だ」と感じたのです。

実際、始まる前は、お母様方の中には、怪我は大丈夫か、女の子でも大丈夫か、大きな声でびっくりしないか等の心配をされる方もおられましたが、そういった心配をよそに、子ども達はびっくりするほど吸収力が速く、そして楽しんで稽古に励んでおります。どうぞ、お子様を安心してお預けください。武道を通して自立心・積極性・集中力・規律性・忍耐力を養い、神様やまわりの人を思いやる気持ちを育てて参りますので、お子達の日々

の成長を温かく見守っていてください。そして、園児が大人になったときに、日本の精神文化をしっかりと身につけることができている「世界に誇れる、かっこいい日本人」に武家の古都、ここ鎌倉から子ども達を育てて参りましょう。

以上で、新しい保育、「幼児剣道」のお話を終わります。ありがとうございました。

（神奈川県　鶴岡八幡宮　権禰宜）

神　感じるこころ

櫻井田鶴子

『なにごとのおはしますかはしらねどもかたじけなさになみだこぼるる』

歌人西行が伊勢に詣でた時の和歌です。

ここ伊勢の地は、天照皇大御神様のご鎮座なさいます、日本人の心の故郷であり、祈りの聖地です。

西行法師のかたじけない涙の理由は測り知れないのですが、厳かな深い杉木立や自然豊かな命あふれる恵に預かり、今までになく尊いお働きが魂を癒し、この詩を詠んだ人の心にしみて、忘れられない詩となりました。

私は、ある秋の研修の折、五十鈴川の研ぎ澄まされた水面に映る錦織り成す木々のあまりの美しさに、我を忘れ、天にも昇る心地になり、無上の喜びに満たされました。

（自分を超えた世界とは、この様な境地なのだろうか。西行法師と同じ心であろうか。）

と、生かされている命の恵みに預り、涙がこみ上げてきました。もし、今ここに仲間がい

なければ、冷たい石の上に坐し、只々、忝さに額づいて平伏していたことでしょう。西行法師の涙と、私の涙とは同じ涙でありたいと思いました。

忙しいこの時代にこそ、静かな空間や時を持つことは、豊かな人生を築く上にとても大切な事です。耳に聞こえず目に見えず、神々の絶対の揺るぎないご神威を賜り乍ら、揺らいでしまう私達の心の置処とは、一体何なのでしょうか。私は生きていると誇る人と、私は生かされていると感謝する人との暮し方には、大きな人生の隔たりがあります。生きるという事は、生かされているからこその賜物です。

さて、わが国では、父祖達が各家々に神棚を飾り、殊の外慎みをもって、畏んでお札を納め神祭りを大切に護ってきました。そして神を中心に、祈りで始まり祈りで終わる大人達の後姿が、子供の心に、神への畏敬の念を育てはぐくみました。神様のお蔭は、家族の精神を豊かに潤し、安定した心を培い、強い絆が保たれ、物の大切さを学び乍ら大人も子供も共に成長した様に思います。

特に日本の神々は、大らかで、優しく、人々と共に暮す神であり、平和で、鎮めの神、むすひの神です。

人は、何時、如何なる時も、神仏に対し敬虔で慎ましくなければなりません。神の御心

に沿った生き方こそ、揺るぎない人のみちみちのみちを諭し、幸せになる尊いお蔭に出合せて戴くのです。

さて、祭典におきまして、宮司がご神前にて平伏す姿は、神への最高の禮であり、最も気高い姿でございます。それに反し、個人の自由や権利の名の下に、おごる人の何と多いことか。

進み行く世の中と逆行しているかに見える神社ですが、神は万物の命を全て背負って凛としたお姿で、鎮守の森にお鎮まりになり、祭られることにより人々にご加護を授けるのです。

もし、人々が、苦難の人生に直面したならば、神を遠くに感じていた人も、最後の究極の時には神におすがりし拝する事でしょう。又、様々な祝い事がご神前に報告され、寿ぎ、人は神のご存在を人生の節目節目に重く感じ、人生を振り返る事でしょう。

殊に、伊勢神宮の二十年に一度の式年遷宮には、天照皇大神様のご神威の蘇りはもとより、ありとあらゆるもの全てが、新しく清らかに祓い清められる国中あげてのお祭りです。

神々の中で最も気高く貴く光輝くばかりに美しいお姿に、自分の命を重ねて祈る国柄です。伊勢神宮にお参りされた方は、恐らく古の人々の神観、世界観の偉大さにさぞ驚きを

覚えられる事でしょう。

祭が昔のてぶりのままに受け継がれることは、国中の人々の真心が生きづいている証であり、神々は、人々の祈りによって輝かれ、祈る人も土地も、何かしらご加護を賜って豊かに潤いを戴ける様に感じられます。

神を感じる心とは、知識や言葉を超え、千古より脈々と受け継がれてきた畏れ敬い祈りにより、そのご存在を戴くのです。人が神を超えて生きる暮しなどありえないのです。

祭ることを捨てた瞬間から、神様はお隠れになられ、一つひとつ神霊・ヒが消え、暗い世の中になることを日本の神話は諭しています。光を失うことは、万物の生成育成が止まることです。なぜなら命は常に循環しているのです。光輝くお姿を拝したく、遷宮は必ず成就しなければなりません。千古の時を経て、豊葦原瑞穂国が豊かに潤いますことを願い祈りが心と形となった聖地、伊勢神宮に、一生に一度はお参りしましょう。それは私の命、父祖の命を拝する原点だからです。

鎮守の森の神々を拝する意味も、お一人おひとりの命が預けられ、そのお蔭の下に生かされている事を、どうぞお忘れにならないで下さい。

住む土地の守り神の神霊・ヒは、氏子崇敬者によって輝かされてこその命です。神様は

皆様と共に歩み生きて下さり、父祖と共に生きていけることは、何と幸せなことでしょう。

伊勢神宮の式年遷宮の成就はもちろんのこと、私達の土地の守り神様にも更なる美しいお姿で共に暮らして戴きます様、皆様方の敬いで運を添いましょう。

私達が幸せになる道は、神を祭り神恩感謝の心を捧げることだと教えています。

（島根県　山辺八代姫命神社　禰宜）

からだの中から日本をよびさます

中道豪一

先日、広島の世界遺産、厳島神社の御烏喰神事に参加した際のお話です。これは神社が出来た時の物語に倣ったもので、島の周りにある七つの神社を舟で巡るわけです。中でも有名なのが、養父崎（やぶさき）神社の沖合に浮かべた団子を、烏が啄ばむ場面です。参列者に穢れがあると啄ばまないと言われていますが、当日は団子が全て無くなるという慶事に恵まれました。そうした感動の浦巡りが終わり、その興奮が冷めやらぬ帰りの喫茶店でのお話です。参列した女性達との会話で、こんな場面がありました。

女性①「私は信仰心なんて殆どないけれども、あれは神道っぽい気分になってしまうわ。おかげで気持ちが大きくなって、悩みがどこかに行っちゃった」

女性②「そうね、こう感じないといけないっていう決まりが無いから、お互い色々感じるものがあったわね」

彼女達は「自分をみつめ直せる」点に素晴らしさを見出しているようでした。皆さんは

この二人の感想をどう思われますか？私は「成程！」とうならされました。これだけ生活が多様化していますから「神道はこうだ！」と言う以上に「自分を考え直すきっかけにして下さいね」という切り口は、相当重要だと思うのです。もし彼女達の立場に立つと、津々浦々で繰り広げられる祭りは、自分を見つめ直す素材と言えます。今日はこの視点から、平成二十五年に行なわれる伊勢の式年遷宮についてお話しさせて頂きます。

その前に一つ問題です。これから藤波氏経（うじつね）という神主が、ある神社について書いた文章を読み上げるので、どこの神社か当ててみてください。

「扉を開けて中に入ると草ボウボウ。神様へささげた宝物は見るも無残にボロボロ、萱葺の屋根はバッサリ落ちて黒土のようになっている」

答えは伊勢の内宮で、読み上げたのは『寛正三年造内宮記（かんしょうぞうないくうき）』という本です。題名の寛正三年は西暦に直すと一四六二年ですから、第四十回の遷宮が行なわれた年です。白木の社殿、すがすがしい参道、二十年に一度の古より続く祭祀……と称される神宮ですが、そのイメージとは全く違いますね。少しこの波乱の時代を振り返ってみましょう。

まず四十回目の遷宮の年は、前回から既に三十二年が経過していました。二十年ごとなのに三十二年!?一体どういうことでしょうか？これは三十九回の遷宮が永享三

（一四三一）非常の遷宮と言われた惨状を知らなければなりません。材料不足から、建ったのは正宮・荒祭宮のみで金物は寸法違い。その後、宝殿と幣殿はなんとか建ちましたが、玉垣や他の建物は、悉く荒れ果てるまま…。こんな状況ですから二十年という決まり通りにいかないのは当然です。こうした苦難を経て行われた四十回遷宮ですが、時代の荒波には逆らえません。これを境に一二四年間、遷宮は行われなくなってしまいました。信じられない事態です……。ではこのまま伊勢は滅びてしまったのでしょうか…。その答えはみなさまがご存知のはずです。本年行なわれた鎮地祭は、平成二十五年の第六十二回遷宮を迎えるべく行われたものです。遷宮は色々な人たちの努力で、奇跡の大復活を遂げて今に受け継がれているのです。

残念ながら私達は神様と直接会話することはできません。しかしこうした遷宮の姿を知り、宇治橋を渡り、鳥居をくぐり、御正殿で頭をさげる時、そこに鎮まる大神様は、今のわれわれに語りかけてくださるのではないでしょうか。今の自分を見つめ直すきっかけとして、何よりも苦難にめげず範を示した親の後姿として。西行法師ならずとも、かたじけなさに涙がこぼれます。

みなさん、これを知った上で一度神宮を歩いて見ませんか。苦しさを乗り越えた大神様

の懐を歩き、そして拝み、自分のからだのなかにある日本をよびさましてみませんか。

（広島県　長束神社　出仕）

伊勢神宮六月月次祭参加して

松吉宣和

日本人悠久の心の故郷お伊勢参り。五十鈴川の宇治橋を渡り大鳥居をくぐり、松の木の香り漂う神宮神苑を通り、第一鳥居をすぎると五十鈴川の御手洗場に出ます。岸辺の清き流れに手を浸すと、冷たさに心身が引き締まります。参道を進むと杉木立の巨木に覆われ、新緑の香りと玉砂利を踏む足音に心を打たれます。

わがくには 神のすゑなり 神まつる
　昔のてぶり わするなよゆめ

古は全国民が伊勢に参拝する事を夢みていました。祖先の御心を受け継いで神宮に参拝し、神宮大麻が各家庭の神棚にお祀りされるよう努める事が私達子孫の使命であります。皇室、国家の繁栄と国民の幸せが全国各社の祭典で祈念されていますが、その中で最も重要なお祭りが式年遷宮であります。全国民が協力して二十年に一度、社殿、御装束御神宝すべてを新しくし、大御神様に新宮へお遷りいただく我が国最大のお祭です。全国の神職

と氏子崇敬者が協力し、この日本固有の伝統文化を世代を超えて守り続けていかなければなりません。私はこの良き伝統を護持しつつ、神様とともに日常の生活を営めることに感謝をしています。

神職であれば誰もが一度は、神宮の月次祭奉仕を希望していると思います。私は二十四年前の昭和六十年に六月月次祭奉仕の機会を得ました。

十四日に神宮司廳に出向き、月次祭奉仕の説明、神宮担当者の紹介の後、参籠をする斎館に案内されました。続いて十六日までの奉仕の説明を受け、潔斎の後白衣白袴に改服し、月次祭奉仕奉告の正式参拝が内宮神楽殿で執り行われ、伊勢神宮の説明がありました。

神宮とは、内宮と外宮を中心に十四社の別宮、四十三社の摂社、二十四社の末社、三十四社の所管社、八社の別宮所管社、計百二十五の社の総称です。地域的には伊勢市、鳥羽市、松阪市、志摩市の四市と、多気、度会の二郡に亘ります。別宮は正宮の「わけみや」とされ、特に重んじられています。

別宮のなかでも大紀町に鎮まる瀧原宮と志摩市の伊雑宮は「遙宮」と呼ばれ、地元から厚く崇敬されています。

内宮の御鎮座から五百年後、高倉山のふもとの山田原に建てられたのが外宮、豊受大神

宮です。御祭神は天照大御神の食事を司る御饌都神として丹波の国から迎えられ、産業全般の守り神として広く国民から信仰されています。

神宮での日々のお祭は、受け継がれた伝統のもと古式のまま執り行われ、その数は年間千五百以上に及びます。年始めの歳旦祭から大晦日の大祓に至る恒例祭と臨時に行われる祭典、二十年に一度の式年遷宮にかかわる祭典に大別されます。恒例祭の中でも毎日欠かすことなく厳かに奉仕されているのが、神様に一日二回御食事をさし上げる日別朝夕大御饌祭であります。これは外宮御鎮座以来千五百年もの間、雨の日も風の日も、そして戦乱の世においても続けられて参りました。お祭を奉仕する神職は五人、前夜から斎館で参籠し、早朝潔斎をして神饌調理にとりかかります。

神様の食事、神饌は、基本的にはご飯と塩と水。それに鰹節、鯛（夏は干物）、昆布、荒布などの海草、季節の野菜と果物、そしてお酒。食材は神宮御料の田畑から供えられます。神様の衣食住は豊かな自然から調えられるのです。

さて、翌十五日午前六時、五十鈴川の御手洗場で心身を清め正殿参拝。続いて滝祭神（社殿はなく石畳の上に鎮座する五十鈴川の守り神。所管社ながら別宮に準じて祭典が奉仕される特別な神様）、風日祈宮（風の神様をおまつりする別宮。風雨の災害がないように風

日祈祭が行われる）を参拝。次に御饌殿（御稲御倉―神宮神田から収穫される抜穂が納められ、唯一神明造の特徴を拝することができる穀倉）を拝観し、荒祭宮（天照大御神の荒御霊をおまつりする皇大神宮第一の別宮。御正宮に続く重要なお社）を参拝致しました。

十六日午前六時、五十鈴川御手洗場で心身を清め、正殿参拝後正面階段、祓所、神楽殿までの参道を清掃。斎館で月次祭についての説明があり、奉仕者全員に斎服、冠、浅沓が渡され、午後九時に着装、十一時に神宮神職をはじめ奉仕者整列。斎館玄関に祭主がお出ましになり、同時に松明に火が灯され祭典開始。神宮神職が先導をして、祭主以下神職祓所でお祓いを受け、厳かな松明の灯りのもと整列して正殿へ向かいます。祭主所定の座に着座され、祭員玉砂利石の上に整列、一拝の後着座。次に祭主祭文奏上、祭員平伏。続いて祭主、神宮大宮司、神宮少宮司の順で玉串を奉りて拝礼。（神職・奉仕者宮司に合わせて拝礼）祭主以下松明の灯りとともに退出し、斎館前で神職奉仕者整列。神宮大宮司のご挨拶があり、奉仕者は斎館控え室で私服に着替え、お互いに挨拶して全て終了。

乃木将軍家訓

我行ば人もゆからむ皇國の　ただ一筋の平らけき道

（山口県　乃木神社　宮司）

神宮式年遷宮御装束神宝の謎と甦り

山元義清

当社の本殿が修理されて四〇年が経過し、今年屋根の葺替えをします。神社は、社殿の破損や老朽化により神様を祀る社殿の尊厳を維持するために、仮殿や新宮にお遷しする重要な大祭を遷座祭と言って斎行します。全国にある八万の神社の中でも式年でご造営される神社があり、その代表的な神社が伊勢の神宮であります。今日は、神宮の式年遷宮が実施される度に新調される御装束神宝の謎についてお話しましょう。

私と式年遷宮については、大学卒業年の昭和四十八年で、伊勢市中がお祭り一色で私も一員として輪に入って騒いでいた記憶があります。それから二〇年が経過し、三十九歳で突然指名された支部長二年目の平成五年。第六十一回のご遷宮に内宮で奉拝の記憶は今も清々しく思い出されます。十月二日夜、ピタッと静まり木立から太鼓に続いて警蹕が耳に入るや玉砂利を踏む浅沓の音、足元を照らされる松明の明かりでほんのり絹垣の様子が見え隠れすると、自然に両手をあわせていたことを思い出します。

天照らすはたと消ゆるる庭燎の警蹕澄みて大杉に沁る
千代八千代神代のままに神遷し夕闇のなか松明揺るる

その後、神宮の御ことを知れば知るほど不明な事もあり、今日謎の一端をお話します。

先ず最初の謎ですが、ご承知のとおり神宮はご正宮と別宮及び摂社、末社所管社合せて一二五社から成り立っています。そして、御社殿の造営は全てのお社に及びます。その御装束神宝は約八百種、千六百点と言われますが正確に何種何点作られるかという謎です。御装束においては内宮の正宮七十二種三百四十一点外宮の正宮六十七種百四十七点別宮十四社三百八十六種五百九十七点、一方御神宝においては、内宮正宮十九種百九十九点外宮正宮三十種五十五点別宮十四社百四十種二百三十七点とこんなに多数の品々が新調されます。御装束は、殿舎に鋪設するもの、殿舎内の神座に鋪設するもの、服飾および容飾とこれに関連する器物、遷宮に伴う道路上の仮設物及び威儀具に分類することができます。さらに、古典によって殿内に装飾される衣装の一つ一つについて調べてみますと、同一の用途でも外宮より内宮の方が、また別宮より正宮の方が大きい寸法で製作し文様も異なっていることがわかります。遷御は、絹垣と呼ばれる白い帳で隠され、神宮大宮司以下禰宜までの神職が御神体を納めた御樋代を御船代に納めて旧殿から新殿へお遷しするものです。

そして、その御列の御船代は、前と後ろを新調された御楯・御鉾・御太刀・御弓などに守られて参進されるのです。

次に第二の謎ですが、第六十二回の御遷宮が平成二十五年に斎行されます。では、二十年前に作られた御装束神宝はそれぞれ現在の社殿にお飾りされていますが、その品々はその後どうなるかという謎です。その行方は、遷御の翌日に「古物渡の儀」が行われ、造営された正宮の後ろの西宝殿へお移しし、それは二十年後の平成四十五年には神宮徴古館へ移して保管されます。また、神宮儀式課が収蔵庫を建設し、保存もされています。明治時代以前には、焼けるものは焼却し、できないものは土中に埋めたとも記録されています。ただし、御師に撤下された品もあったようで、そこから地方の有力な檀家の手に渡って、現在神宮の御装束神宝と推定されているものが多々見受けられます。

三つ目は、御装束神宝は全て新調されることがお分かりいただけたところですが、新調された品を神殿にお移しするには旧殿へいつの時点で運び込まれるかという謎です。その手順ですが、新調の御装束神宝は、遷宮前々日に「御装束神宝読合の儀」が四丈殿で行われます。目録と照合しその尺丈や文様などに誤りがないか否かを一点ずつ厳しく点検されます。その後、五十鈴川のほとりに斎場を舗設して二十合の辛櫃に収められた御装束神宝

を並べ、祭主以下奉仕者一同がお祓いを受ける。これが、「川原大祓」です。そしてお祓いを受けた御装束神宝は新宮に飾られます。

最後は、式年遷宮は神宮だけしか行われないのかという謎です。『延喜式』に「住吉・香取・鹿島等の神社では二十年に一度改造せよ」と規定されており、神宮と同様の式年遷宮が行われていました。神宮から出版されている『神宮遷宮記』の寛正三年遷宮記（一四六二）はその前年の様子を示しています。遷宮が遅延し、千木鰹木は落ちて御階の高欄はうち損じ、御板壁は低下し御板敷も御萱葺も落ちました。雨漏りがひどく御装束等は湿損湿気でべとべとになり、御神体が雨露に浸される危険があると記され何度も幕府へ申し入れがされ三十五年目に奉仕したと記しています。それ以降も百二十年間中絶し、仮殿遷座のみ行われ、復活するのは近世に入ってからでした。現在も古例によって、諏訪大社では七年毎、香取・鹿島神宮や貫前神社では十三年毎、春日大社・宇佐神宮は三十年毎、弥彦神社は六十年毎、そして上下賀茂社のようにもと二十一年毎だったのを後に五十年に改められた神社もありますが、このように式年遷宮が多くの神社で行われています。

神宮式年遷宮の経費は、終戦を期にして国費から国民総奉賛へと展開されますが、それぞれの時代において「国の重儀」と捉えられ、今年で千三百十八年ですが、私たち一人ひ

とりが世界に比類のない長い歴史と伝統を連綿と伝えていく必要があります。二十年ごとの造営は時代錯誤であるから、技術の進んだ今日では永世不朽の造営をする方が宜しかろうと申す者もいるが、それは大変な間違いであろう。神宮のご造営というものは、我が国の固有の建て方これをみてはじめてこの国の建国の古いことを知り、神宮を介してはじめて我が国の建国の基を知るのであるから、現在の建て方は永世不変なものでなければならない。と『明治天皇の御日常』に示されています。古式に沿って二十年毎に全てを新調し、新たな気持ち「甦り」を抱かれる神様に私たちは日々感謝し、「おかげ」で元気に過ごさせていただいているのであります。皆様には、神宮大麻を通してご健勝にお過ごしされますようご祈念申し上げます。

（滋賀県　老杉神社　宮司）

「一日神領民」となりて

牟禮照子

「一日神領民の行事への参加は、〝聖地エルサレム〟への巡礼の旅と同じです」

平成五年の御遷宮の年、伊勢で世界の宗教指導者が集まり、世界平和シンポジウムが開かれました。そのレセプションの席で、白いターバンを頭に巻き、白のガウンを着たアラブからの参加者が言った言葉です。

前回の第六十一回の御遷宮には、世界各国から参加者がありました。その方々も日本人と同じ、規定の白の法被（はっぴ）に日の丸の鉢巻、白いズボンに白の手袋で一日神領民となって御奉仕して下さいました。彼等は外国の方々ばかりで、一台の山車（だし）を曳いて、宮川から積まれた白い石を新ご殿地に運ぶ行事に参加しておりました。

私は平成元年、今は亡き佐古幸嬰先生のお供をして、アメリカへの神道講演の旅に同行させて頂きました。その時、バークレーの神学校でお会いしたポーキン博士も参加されており、五年振りにお会い出来たのですが、博士も覚えていて下さって大変に感激なされ、

伊勢神宮のご遷宮の行事に参加出来た事を、「一生の思い出です」と仰ったのが、今も印象に残っております。

神社本庁のお呼び掛けで全国から一日神領民が伊勢に集まりました。私も長野県女子神職会から参加させて頂きました。宮川から運ばれた白い石を、一人一つずつ白い布に包んで恭しく新ご殿の敷地に静かに置き納めました。その時初めて瑞垣内の新しい神殿を拝見したのですが、そこは二十年に一度、しかも「神領民」にならなければ、見る事も入る事も許されない、禁制の「神域」でございます。檜の香りも真新しい唯一神明造、掘立柱に萱葺屋根、回廊の欄干には七宝焼の五色の玉が等間隔に飾られた新御正殿。想像以上に神々しい「古代の神殿」が、今私の目の前に蘇り、思わず息を呑みました。そして私は驚きました。たとえ匠の粋を盡しても、人間の力だけではこれだけの神殿は出来ない、そのような神々しさが漂っているのです！どうしてこの様な神々しいご神殿が建てられたのでしょうか？

伊勢神宮の式年遷宮は、二十年毎に正宮、別宮を新たに造り替え、殿内にお納めする御装束・御神宝をすべて新調して、真新しい御殿に天照大御神様のご神霊をお遷しすると云う、古代から続いている一大事業でございます。神宮の東西に御敷地が広がっていますが、

その場所は二十年毎に東西交替で御殿が建てられます。常に祭場を新しくしてお祭りを行うのが神道祭祀の原則ですが、御敷地は土持、砂持、石持と云うように、土を運んで砂を敷き、その上に白い石を敷き詰めて、正に新地とするのだそうです。御正殿の周り、白い石が敷き詰められた瑞垣内は、本当に清々しさに満ち溢れています。

遷宮本来の意義は「心御柱（しんのみはしら）」の奉建にあると云われています。遷宮諸祭のはじめに斎行される山口祭、木本祭（このもとさい）では、宮域から心御柱の料材が深夜に奉採されるそうです。そして心御柱が奉建される深夜、古儀によれば禰宜が中臣祓を唱え、次いで御巫内人（みかんなぎのうちんど）が一緒になって一切成就祓を一万回も唱え上げ、天地浄化を祈るところに遷宮の真義が秘められているとの事でございます。庭上で祭祀を行う神宮にとって、神籬に当たる心御柱が何よりも大事なのです。ご遷宮の重要性は、造営によりこの御柱（みはしら）から壮麗な神殿へと移りゆく様にあるのです。

天照大御神は「伊勢神宮内宮に永遠に祀るように」との御神意を発し、八咫鏡を御霊代に奉斎され、皇祖神として、また日本全国民の総氏神様として仰がれています。

年中祭祀の中でも、秋の神嘗祭は最も重要なお祭りですが、それを二十年毎に祭場を整えて、神宝、神殿すべてを新調し、鄭重な形で執り行われる大神嘗祭がつまり、御遷宮で

あります。御神霊が旧御殿から新御殿にお遷りになられる時、天皇陛下は土下座なさって拝礼なされると承っております。

大御神様に籾種を授けられたお孫様が地上に天降り稲作を始められました。そして年毎に収穫された新穀に感謝を捧げるのが新嘗祭です。この収穫感謝の祭りを通して天上と地上、神と人が一つになるのです。この新嘗祭の約一ヶ月前に神宮で斎行されるのが神嘗祭です。

二十年に一度の御遷宮、大神嘗祭の当夜（九月十六日）午後十時、古殿にて由貴夕大御饌（ゆきゆうべのおおみけ）が行われ、天照大御神様に旧穀を差し上げます。翌十七日午前二時、木の香も清々しい新宮で斎行される朝大御饌（あしたのおおみけ）では新穀を差し上げます。いずれも天皇陛下は大御神様と共に召し上がります。輝かしい御神威により天皇御自らも瑞々しく蘇られると云う、これは誠に神秘的な儀式なのです。朝大御饌では神座も穀物も共に「旧」から「新」へ切り替わると云う秘儀があるそうです。

一日神領民にならせて頂き、私は聖なるものの神髄に魅せられた感激で一杯でした。日本国民ばかりでなく、外国人も感動させる天地の浄化、神と人とが一体となる伊勢神宮の式年遷宮は、古代がその儘蘇って、永遠不滅にあり続けるのです。

外国の神殿はすでに廃墟ですが、二十年毎の蘇りにより、日本の伊勢神宮の神殿は、古代のまま瑞々しく生き続け、日本民族の誇りと希望と夢を伝えて世界に輝いております。

平成二十五年には、第六十二回の式年遷宮が行われます。私も神道人として一生の感謝の誠を捧げたいと思う今日この頃でございます。

（長野県　冨士浅間神社　宮司）

お伊勢さまと神宮大麻について
―老人学級の年賀祭において―

綾川憲子

皆様あけましておめでとうございます。

今年も又皆様のお元気なお姿を拝見いたしまして大変うれしく思っております。

常日頃、神社の事に関しましては色々とご支援ご協力を頂き、誠にありがたくお礼申し上げます。又昨年からご無理をお願いしておりますお伊勢さまのご遷宮のご寄付につきましては、たくさんの方のご奉賛を頂いております。昨日も或る方が「うちの宮司より遷宮のご寄付を少し多くお願いしたいと頼まれ協力させて頂いた所、〝参宮章〟をもらったが、あれを持って行けばどうなるのか」と聞かれました。本日参拝の皆様方のなかにも、参宮章をお持ちの方はいらっしゃるのではないかと思いますが、お伊勢さまへ参拝の折は必ず忘れないでお持ち下さい。内宮、外宮前に神職さんが詰めている所がありますので、そこで参宮章をお見せ頂くと御垣内の参拝ができます。その時に気をつけて頂きたいのは、男

性は背広にネクタイ着用、女性はスーツ又はそれに準じたものとされています。平成五年の遷宮の際、私共の神社で参宮致しました時、注意はしてありましたのに一人の方がジャンパーのまま入ろうとして、「御垣内の参拝はご遠慮下さい」と注意され、一人外で参拝をしたと言う事がありましたので、十分気をつけて下さい。

さて、今日はせっかくですのでお伊勢さまの遷宮と神宮大麻について少しお話させて頂きたく思います。

この地にも修行石などが残るあの西行法師が伊勢の地に於いて「なにごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と詠まれましたが、伊勢の神宮にはどなたをお祀りしているかと申し上げますと、神宮には内宮、外宮を中心に別宮や摂社、皆様のお宮で申しますと境内社の様なものですが、色々な神様が百二十五の社にお祀りされ、これら全て合わせて神宮と言われています。内宮にお祀りされています天照坐皇大御神様は、天地に照り輝く美しい神様、太陽のごとく全ての物に恵みを与える貴い神様で、皇室を始め日本人の御祖神、総氏神様として尊ばれています。大御神様をお祀りして五百年位後に大御神様の朝夕の大御饌を調えるべく、お米を始め五穀豊穣と衣食住をつかさどる、産業の守り神として外宮に豊受大御神がお祀りされました。

神宮では毎年行われる十月の「神嘗祭」、六月の「月次祭」など年間沢山のお祭りが行われます。そして今回皆様にご奉賛頂きます式年遷宮ですが、二十年に一度、正殿を始め諸殿舎すべてをお建て替えして、御装束・御神宝も全て新しく調えて新殿へお遷り頂くお祭りです。式年とは「定めの年」との意味で、六八五年に天武天皇はこのように仰って式年遷宮を制定されました。「二十年前と同じものを造れ。決して大きなものを造ってはいけない。小さなものを造ってはいけない。同じものを、同じ方法で造りなさい。そして、二十年ごとにお社を遷し替える」

しかし天武天皇は、実際式年遷宮を斎行する前にお亡くなりになり、持統天皇により最初の式年遷宮が行われました。（ある説には、二十の数字は手の指の数が十、足の指の数が十、これを合計して二十です。命を見つめるときには、自分の手足の指を見たらいいと言われ、だから式年遷宮は二十年毎なのだと）何十回と行われてきました遷宮ですが、敗戦により式年遷宮も国の手から離れ、一法人神宮の事業となりましたが、神社界中心に国民一致協力して奉賛活動を開始して、式年より四年遅れの昭和二十八年に第五十九回の遷宮が無事斎行されました。

持統天皇の御代から一、三〇〇年にわたり続けられた、世界に類を見ない長い歴史と伝統

の式年遷宮が、なぜ何百億円（今回は、五五〇億円）もの浄財を使って行うのかと、そう皆様も思われるかも知れませんが、明治天皇の御代にもご用材の生育などを考えた、当時の大臣たちが天皇様に「掘立柱の古い建築法を改め、柱の下に礎石を置きコンクリートで固めたら二百年は持つのでは」と申し上げました所、明治天皇様は「二十年毎の造営は時代錯誤であるから技術の進んだ今日では、永世不朽の造成をする方が宜しかろうと言う事を申す者もいるが、それは大変な間違いで神宮のご造営と言うものは、我が国の固有の建て方である。これを見て初めてこの国の建国の昔の古い事を知り、神宮を介して初めて我が国の建国の基を知るのであるから、現在の建て方は永世不変の物でなくてはならない。決して建築工法が進歩したからと言って煉瓦やコンクリートで造るべきものではない」と懇々と諭され、「もし木材が足らぬようであれば、このようにしたら良いのでは。御扉とかその他大材を要するものは形が出来ておればよいので、何も四尺大の一枚板を使わなければならぬと言うものではなく、継ぎ合わせ形を整えるならば宜しいのではないか。又檜がなくなると言うのであれば他の木でもさしつかえはない。とにかく永世不変の工法を絶対に変えてはならない」とご沙汰があり、木曽、神路山などに御用材の確保を計画したとのことで、式年（二十年）とは殿舎の耐用期間、技術の習得具合など古義を伝承するに適当

な年数ではないかと考えた天武天皇様のご見識は、私達も考えさせられるものがあると思います。

国民の奉賛により建国の基である平成二十五年第六十二回の遷宮が無事斎行される事と思いますが、遷宮に関する行事は平成十七年の山口祭から平成十八年・十九年の御木曳、今年二十年には鎮地祭が四月二十五日に行われ、平成二十一年には宇治橋渡始式が十一月にあり、まだまだ二十五年まで多くの遷宮行事が続きます。そのお伊勢さまの御神札は、その昔は御師と呼ばれる人がお祓いをしながら頒布していたので「お祓いさん」、明治四年よりは「神宮大麻」と呼ばれ、これらは伊勢神道の祓い清めの信仰より生まれた呼び名だそうです。昔から正直者の頭に神宿るとされ、「清浄」「正直」がなにより尊ばれてきました。だからこそ私達は、日々はもちろん年末には大掃除をしてお清めしました神棚、宮代に氏神様よりお受けした新しい神宮大麻と氏神様の御神札をお祀りすることで、より一層の御神徳を頂くのです。

今後皆様が日々家族の幸せを祈りながら生活する事で、今年も一年無事明るく楽しく過ごされますことを祈念致しまして新玉のご挨拶とさせて頂きます。

（香川県　滝宮天満宮　宮司）

御遷宮

西村純子

皆さん、「遷宮」とはどういうことかお解りになりますか？お聞きになったことはあると思いますが、神殿、神さまの御殿を造り替え、「神霊」をお遷しする儀式のことです。

さて、二十年に一度の「神宮式年遷宮」は、「御社殿」「御神宝」「御装束」に至るまで新しく造り替え、大御神さまにお遷りいただく、千三百年の伝統ある日本最高の「大祭」で、世界でも例を見ないかけがえのない歴史と伝統を有しています。平成五年に第六十一回神宮式年遷宮が執り行われ、次回は平成二十五年に斎行されます。すでに準備が着々と進められています。ご造営にあたり、まず最初に御用材を伐採する山口祭が執り行われます。そして木遣り音頭も勇ましい「お木曳行事」が平成十八年から十九年にかけて行われ、全国から多数の方々が「一日神領民」として揃いの法被姿で参加されました。前回は二十万人の参加があったそうです。参加できるということは有り難いことです。何でも前向きに参加できることは幸せです。

丁度今年の二十年四月二十五日には、「鎮地祭」が内宮・外宮共新しい御敷地で斎行されました。「鎮地祭」は大宮地に坐す神を鎮めまつり、御敷地の平安と造営の安全を祈願する祭儀で、「トコシズメノマツリ」とも称され、日時は天皇陛下が定められるのでございます。一般で行う「地鎮祭」にあたるものです。

さて、「お伊勢さん」「お伊勢さま」「伊勢神宮」といろいろ親しみある呼び名でお呼びしていますが、皆様は何とお呼びしていますか?正式名称は「神宮」とお呼びします。皆さまご存知のように、内宮では「天照坐皇大御神さま」をおまつりし、外宮では「豊受大神さま」をおまつりし、両正宮を中心に別宮、摂社、末社など合わせて、百二十五社のお社からなり、皇室の「御祖神」で日本人の総氏神さまとして尊ばれ、広く国民に親しまれて、最高に貴いお宮でございます。ですから皆さまのお宅、全国津々浦々の神棚には、神宮の神札「神宮大麻」を中央に、そして氏神さまの神札を右に、崇敬神社の神札を左におまつりします。神札は朝な夕なに手を合わせて拝み、神様を仰ぐ「みしるし」であります。

「神宮大麻」は「氏神さまの神札」と共に毎年暮れに各神社を通じてお受け頂けますので、お家の神棚におまつりして清らかな一年になるようお祈りしましょう。

また、お参りの仕方は、神社に参拝するときと同じです。「二拝二拍手一拝」の作法で朝

夕に感謝をこめてお参りしましょう。

さてさて、色々なご遷宮行事がありますが、平成二十五年には「お白石持ち行事」があります。「お木曳き行事」と同様、地元の旧神領民に加え、全国の一日神領民が「お白石」を完成した真新しい御正殿の敷地に奉納する行事です。前回は二十一万人が参加したそうです。私共生名八幡神社の氏子総代、敬神婦人会役員等も一日神領民として意義のある行事に参加することができました。本当にありがたく、今では掛け替えのない良き思い出となっております。

平成二十五年には「第六十二回神宮式年遷宮」がうるわしく執り行うことができますように、それぞれの立場で奉賛の誠を捧げましょう。

（愛媛県　生名八幡神社　宮司）

ご奉賛のお願い

黒田明司

以上をもちまして氏神様の月次祭滞り無くご奉仕いたしました。今月も早朝より境内を綺麗に清掃奉仕をしていただきまして、神様もさぞお喜びになり、優しく皆様を守ってくださると思います。

さて、私達の家庭には氏神様と共に、大神宮様と呼ばれる御札がお祭りされています。日夜私たちをお守り下さっている大事な神様です。大神宮様は三重県伊勢におまつりされ、天皇陛下のご先祖の神様天照大神様のことです。そしてこのお宮では二千年以上前から、皇室の弥栄、国家の安泰、私達国民の幸せを祈るまつりが一年間に千回以上繰り返されています。日本国民の総氏神様と仰がれ、一番尊いお宮です。

日夜私たちをお守り下さっている、日本で一番尊いお宮の最も大切なお祭が式年遷宮というお祭です。式年遷宮とは定められた年二十年に一度、お宮やご神宝を新しく造り替えて、神様にお遷りいただくお祭です。神様の甦り、神様の若返りといわれています。

この祭は、今から一三〇〇年前に天武天皇がお定めになり、持統天皇の四年（六九〇）に第一回目が行われました。長い歴史と伝統を受け継ぎ、国をあげての大祭と重んじられてきました。そしていよいよ平成二十五年秋には第六十二回のご遷宮が斎行されます。

神宮の「唯一神明造」の建物はいつでも新しく変わらぬ姿を求めて二十年ごとに造り替えることにより永遠をめざしました。二十年ごとに生まれかわるという発想は日本独自のものです。神宮が新しくなることで、神様のより新しい御光をいただき、日本の国の「イノチ」を新鮮にして、日本全体が若返り永遠の発展を祈るまつりです。

二十年に一度の式年遷宮を通じて、その時代を代表する最高の技術者によって、日本古来の伝統的な神社建築様式と工芸技術を今に伝え、その精神と技術が確実に今日に伝えられているところに、意義があると思います。

ご遷宮に必要なご用材の檜は一万本余りです。なかには、樹齢四百年以上の巨木も用いられます。殆ど木曽の国有林から調達されますが、近年では困難になりつつあります。神宮では昔のように神宮の宮域材でまかなえるように、大正十二年から二百年計画で檜の造林事業を進めています。今回の遷宮にはその宮域材がはじめて使用されます。

そして九州では熊本にも神宮林があります。以前にもお話したことがございますが、平

成十七年に見学しました。そこには神宮の森林経営計画の基に、営林部の技師の方や地元の林業の方が、植樹、夏の草ひき、枝打ちの作業を毎年繰り返して将来の遷宮の為に備えています。機会があれば、作業奉仕をしてみたいなと思います。そして、平成四十五年第六十三回の遷宮には熊本で育った檜が御用材として使われる予定だそうです。熊本県民としては特別な楽しみがあります。元気で長生きしたいです。今年も神宮林では、四十年、六十年後、いや二百年後の遷宮の事を考えて御用材を育成しています。将に、遷宮は永久に続くことを実感できます。私は遷宮奉賛活動に邁進する勇気をもらいました。二百年後は見ることは出来ませんが、後に続く後輩が受け継いで立派な御用材を育ててくれるでしょう。将に遷宮は「天地悠久の大道」であります。

私達は今、次期遷宮の募財活動の真最中です。目標額が集まるだろうかかと不安もあります。しかし、「遷宮は天地悠久の大道」です。二百年後も永遠に続きます。私達にはそのうちの第六十二回目の式年遷宮にご奉仕できる喜びと責任があります。それは後輩や子孫に繋がる天地悠久の大道であります。

式年遷宮は昔から国家の重要な祭として国の費用で行われてきましたが、昭和二十八年の第五十九回の御遷宮より、国民のまごころ込めた浄財によってご奉賛申し上げることに

なりました。平成二十五年の第六十二回式年遷宮では極力経費節減につとめておりますが、五五〇億円が必要とされ、その内二二〇億円を国民の奉賛によることになりました。熊本県の割当額は二億八〇〇〇万円。玉名支部には三〇〇〇万円。そして当神社には一三七万円の依頼が来ております。神宮大麻をお受けいただいているご家庭を中心に一軒千円以上ご協力いただけますと、目標額に達します。

皇室の弥栄、国家の安泰、私達国民の幸せを祈る、日本で一番尊いお宮お伊勢さんのこと、式年遷宮のことをご理解いただきまして、二〇年に一度お伊勢さんにお神酒を一升お供えするような気持ちで皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。そこには、お伊勢さんの為に役に立てた満足感と、あなたを優しく守ってくれる神様を感じることができます。

大神宮様は天照大御神さまで天の恵み、氏神様は地の恵みです。天地自然の恵みを頂いて氏子の皆様のご安全とご多幸をお祈り申し上げまして、ご奉賛のお願いのご挨拶に替えさせていただきます。

（熊本県　四山神社　宮司）

杜と米づくり

熊谷房重

五月の終りに、阿蘇山の仙酔峡に深山霧島の花を見に行きました。一つの谷全体がピンクに染まりとてもきれいでした。ついでに、ケーブルに乗って中岳の噴火口をのぞきに行ってみました。振り返って山裾の景色を見ると、折から田植えのシーズンで、整然と碁盤目に並んだ田んぼに水が張られて、水田風景が広々と続いておりました。

かつて、ＮＨＫ教育テレビで見た「阿蘇の水を作る話」と題され、アンコールの再々放送までされた「米づくり・森づくり」の話を思い出しました。

阿蘇山は火山灰土で、水もなく緑も土もない、灰色をした山で、江戸時代まで手のつけられない所でありました。

江戸時代に、その阿蘇の外輪山の山裾に人々は入植をしようとするが、水がない。そこで、村中総出で半世紀に亘って山へ行き、杉の植林をする、それは厳しい重労働であった。木がないのだから穴を掘っての穴居生活であり、苗木を他から購入するので費用もかかる。

そのようにして親から子へと何百万本も植え続けて、半世紀たつと、森から水がとうとうと流れ出て来る。そこで人々は一の用水、二の用水と、水を引き、入植をして行く。

これが、熊本県阿蘇郡一帯の村のおこりであり、川の源流なのであります。人々の植えた森林は、今では国が学術参考林として特別に保護するほどのうっそうたる森林になって、外輪山の山裾に広がっているのであります。

阿蘇郡ばかりでなく、阿蘇山の周辺がみなそうであり、また、こういう傾向は多かれ少なかれ日本中同じような歴史を持っているという事であります。ただ阿蘇の場合、何もない所に森林を作り、土を作り、水を作り、川を作り、そして田んぼを作ったので、話がわかりやすい、というだけのことであったのであります。

このように、森づくりは米づくりのためであった、森林は米が作った、というのが日本の森林学者たちの常識であります。

『日本書紀』には、素盞嗚尊が林業の神様として登場しており、万葉人も

「いにしへの人の植ゑけむ杉が枝にかすみたなびく春は来ぬらし」

と詠んでいます。神代以来、日本人は木を植えては切り、また植え継いで緑を絶やさなかった民族なのであります。

それこそが、米を主食とした民族の知恵であります。稲を育てる水。まさに、その水ゆえにこそ、森林は神聖なるものでありました。日本人にとって、山とは、神様のおわす所であり、それは田の神様、水の神様であり、その神様のこもれる所が杜であり、「おーい」と呼べば「おーい」と答えるこだまは木の魂・木の神様でありました。

また、稲作には、水を引くにも土を耕すにも、米を運ぶにも貯蔵するにも、すべて木材が必要でありました。登呂遺跡の弥生時代の水田からは、長さ二メートル、幅三、四十センチ、厚さ五センチの杉板が大量に出土しておりますし、水路や畦は杭や矢板で補強され、二反ばかりの水田に二千枚もの矢板が使われておりました。木製の農機具、鍬や鋤から田下駄に至るまでは、昭和の戦後まで使われて来たものであります。

『日本書紀』で、素盞嗚尊は、自分の髭を抜いて播くと杉になり、胸毛を抜いて播くと桧になり、尻の毛は槙に、眉毛は楠になる、そして、杉と楠は船に、桧は宮殿の建築に、槙は棺桶に使えと、木材の用途を示し、植林をせよと勧めるのであります。そのお子様でありますす五十猛命も、天から下る時に沢山の樹の種を持って来て、すべて大八洲国に植えつくして緑の列島になされるのであります。

この素盞嗚尊は、この植林を勧める前の段では、あの有名な大蛇退治をなさり、奇稲田

姫を救い結婚なされるのでありますが、八岐大蛇とは、出雲地方の人々の間では斐伊川の洪水を意味すると語り伝えられているそうであります。洪水を退治なされて稲田を救われた神様が、次の下りでは植林の神様となられているのであります。

天照坐皇大御神のあの「斎庭の神勅」によりまして、お米は日本人の食べて行くべき主食として神代の時代より受け継がれて来ており、米づくりは神ながらの道そのものであります。

こういう歴史を考える時に、先人たちが命がけで長い年月をかけて築いて来た田んぼが、今では荒れはて、放置されているのを見ると、実に心が痛むのであります。田舎の方の小規模農家には農業後継者がいないのであります。農業人口の減少は、そのまま、神社や祭を支えている氏子の家の後継ぎがいないという事であります。日本の伝統文化を伝承する後継者がいないという事であります。

ご先祖たちが、血の汗を流して作り上げた財産である水田を、私たちは、国土の保全のためにも、食糧安保のためにも、日本の文化の伝承のためにも、しっかり守って行かなければなりません。世界的な食糧危機はもう目の前にまで迫って来ているのであります。

日本人が、米を見直し、米づくりを大切にする心に目覚めなければならない時期に直面

していると思います。

米づくりは、森づくりであり、水づくりであり、土づくりであります。そして、日本の国づくりであり、それを支える人づくり・日本人づくりでもあるのであります。そして、村づくり・町づくりであります。

（福岡県　八幡古表神社　宮司）

感謝

湊　久昌

神職の道に入ると、神社に生まれたものとそうでない私とでは、あまりに開きがあると思い知らされることばかり。そんな中でもご神縁をいただいて神職としてここにいる、それも日本の神社のなかでも最も古いお社の一つで奉職させていただけるとは、なんと有難いことなんだろうと心から思います。お社に生まれなかった分、よけいに強く感じるのだと思います。その気持ちは、自分の中で常に忘れずに大切にしていきたいです。

奉職してから今までつらいと思ったことは一度もないですね。企業で仕事をしているときは、仕事の悩みや苦しみがつらいと感じることがよくありました。

当時の私は、将来自分が何をするか、一向に見当がついていなかった。懸命に背伸びをしながら、確信というものが持てなかった。今は別の大変さはあるけれども、ただ純粋に神様を拝み続けていられる、これほど幸せなことはないです。まだまだ修行が足りないから単純にそう思うのかもしれません。神社でのお勤めを毎日誠実に果たす、健康な体を維

持する、精神力を鍛えていく、すべてが修行です。

師である、今は亡き石上神宮名誉宮司森武雄氏にも繰返し教えられました。苦しい、しんどいと思うと出来ない、修行だと思うとたいがいのことは乗り切れる。させられているんじゃなくて、させていただいているのだと。理想は遠くにあって憧れるものでなく、ほんのささいな日常の所作の中に込められるものである。日常の生活そのものが修行なのだと。それから、感謝のこころを持ちなさい。感謝のこころがあれば欲がなくなると。ただし、感謝の気持は世間に対してではありません。世間には遠慮、気兼ねはしないこと。ただ神に感謝するのです。その感謝の気持があなたを幸せにさせてくれると。とてもとても有難い深いお言葉でした。私の今までの人生は、結局今ここに来るまでの準備段階じゃなかったのかと思います。

先頃、親戚の叔父が病で他界致しました。叔父は、「この病気が治るならなんでもするよ。でもお陰で生命の重さと尊さがはっきり分かったよ」と言っていました。歩くことも、目が見えることも、生きているからこそ味わうことができるのです。その有難さを感じ、より丁寧にも生きていかなければならないのです。生きていく上ではこれからも多くの悩みや苦しみがあるでしょうが、その中で神の世界に導いていただいたことに心から感謝して

います。

最後に、最近、毎日のように親子で殺し合う・他人を平気で傷つけるニュースを見ます。なんて悲しいことでしょう。これは家から神棚・仏壇がなくなってきたからではないかと考えています。大神様・ご先祖様に毎日手を合わせていたら間違っても親子で殺しあうことは出来ないんじゃないかと思うのです。どんな人でもご先祖様がいて、ご先祖様がいるから自分があるのです。毎日、神棚・仏壇に手を合わせ、家族そろって日々感謝の祈りを捧げていたらそれを感じるはずです。信仰せよと強制しているのではありません。大神様・自分のご先祖様に手を合わせ、感謝してほしいと切に願っています。

いつの日か、苦しんでいる人が少しでも楽になるお手伝いが出来たらと思います。どうぞ長い目で見てください。

（奈良県　石上神宮　権禰宜）

伊勢参宮の思い出

今村早紀子

本日の月次祭にご参列いただきまして誠にありがとうございました。

皆様方は既にご承知のことと存じますが、伊勢神宮では平成二十五年に六十二回目の式年遷宮が行なわれます。その関連として今日は伊勢神宮へお参りした時のお話しをさせて頂きたいと存じます。それは、かれこれ八年程前のことでした。宮司と私は、光栄にも伊勢神宮の「月次祭」を奉拝する機会を得ることができました。奉拝という言葉は、参拝とは違いまして、言うなれば「祭事の空気・神気に触れる、その空間を奉仕する神職と共有する」と言ったところでしょうか。具体的に言えば、深夜松明と月明りの中で、祭主様を先頭に冠に木綿鬘を付け、清浄を極めた白装束の大宮司以下の神職の参進の姿を恭しく拝する、御垣内の奥深くで行われる祭事を、遠く離れた御門の御帳の外から伺い拝み、神威を体感するという、大変貴重な体験をさせていただきました。実はこうした機会を得ましたのは、あるご婦人とのご縁をいただいたことによりますが、この事につきましては後ほ

どお話させていただきます。

伊勢神宮は、私たちが「お伊勢様」「大神宮」と親しみを込めていっていますが、正式には「神宮」といい、皇室のご先祖の神、日本人の総氏神さまと仰がれている最も尊い神社です。天照皇大御神さまをお祀りする「内宮」と、天照大御神さまのお食事を司られる豊受大御神さまをご祭神とする「外宮」、この二つのお宮を中心に、十四の「別宮」と百九の小さな神社をふくめて神宮といいます。

神宮のお祭の特徴は、天皇陛下のお祭り、つまりわたくしたちの日本の国のお祭りであることです。お祭は、今日までの長い年月の間、天皇陛下の御心の下、皇室の平安と国家の繁栄、国民の幸福を祈り永々として続けられています。

数あるお祭りの中で、恒例祭として重要なものが「三節祭」といわれる、十月の「神嘗祭」、六月と十二月の「月次祭」です。それから冒頭にお話しした二十年に一度、大御神さまに新宮にお遷りいただく「遷宮祭」があります。それは神宮で最も重要なお祭りで、「唯一神明造」というお宮のほとんどを檜で建替えご調度の品々も新調します。戦前まではその大きな費用は国より支出されていましたが、戦後は国民のご浄財で行われてきました。多額な費用を要しますので、どうか皆様のご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

さて月次祭は、私どもの神社では毎月行われる小祭ですが、神宮では大祭です。神宮のお祭りの多くは夜に行われます。それは神代の昔より祭事は満月の清らかな月明りのもとで行なわれる定めがありました。浄闇の中、灯明の仄かな明かりと、清めの光とされる月明りに照らされた白玉石の神のお庭で厳かで古式ゆかしく執り行われ、神宮特有の作法、最高至上の礼をもっておもてなしする姿がそこにあると聞いております。

私たちは、外宮の六月十五日に行なわれました由貴夕大饌（ゆきのゆうべのおおみけ）の儀と翌日の奉幣の儀に奉拝が許されたわけです。神宮は「外宮先祭」といって外宮のお祭りの後、一日遅れて内宮の祭りが行なわれる仕来りとなっております。又三節祭の中でも神嘗祭は別格で、天皇陛下自らお手植し、刈り取られた稲を捧げられます。因みに、遷宮祭は、神嘗祭の中でも大神嘗祭といわれます。

時間の都合もあり、伊勢神宮のほんの一端のご紹介しかできませんが、これより奉拝の機会を得たきっかけを、お話しさせていただきます。

安徳天皇をお祀りする壇ノ浦の赤間神宮に参拝し、宮司さまと面談の折、先程お話したご婦人と親しくなりました。その方は、重病の身を奇しきご神恩に救われたことにより感謝の誠を捧げるため、全国のお社を巡拝され、次第に深くご神慮を賜る御身になられたと

いうことでした。当社へのご招待を申し上げたところ、ほどなく参拝においで下さり、その後は当社に数々のご奉納もなさいました。

ある時、私は続けさまに皇室に関わる夢を見ました。その夢があまりにも不思議に思い、その方に電話でお尋ねしました時に、伊勢参宮のお誘いをいただきご一緒することになったわけです。

奉拝の後、「御垣内参拝」をさせていただき、その後神楽殿でお神楽の奉納を致しましたが、貴賓室での待ち時間に接待をして下さった神職さんのお話はいつまでも心に染入りました。

神職さんは、「ご神前で多くの方々が、それぞれ深い願い事を託されます。でも残念ながら全ての方々の願いが叶うわけではありません。あなたはご自身に徳を積まれたからですよ。」と話され、ご婦人の人徳を称えられました。それから私たちにも、「敬いの心、感謝の念を忘れないものに、そっと後押しをし、守ってくださるのが神様なのではないでしょうか」とお話下さいました。このお言葉は私の心に深く刻まれました。またご婦人より鎮西諏訪明神の奉仕者として、「西の方」をしっかりお守りするようにとのご神意を告げられ、唯々恐縮致しました。皆様方のお力をいただきまして神明に尽くしていきたいと存じます。

どうぞ宜しくお願い申し上げます。

最後に恐れ多いことですが、私は常に心においております、昭和天皇さまの

「日々の我行く道を正さんと隠れたる人の声を求むる」

という御歌に、国民の幸せを唯ひたすら願い、常に神様とお心を合せて祈られていたお気持ちを想い、いつもかたじけなさでいっぱいになります。

私たち国民は、ご皇室の限りないご敬神の心を己が心として、日々の生活に祈りを忘れず暮らしてゆきたいものです。

（長崎県　大浦諏訪神社　禰宜）

心のふるさと

松坂公宣

全国植樹祭が、霧島の隣町である牧園町で開催された昭和五十九年五月二十日、昭和天皇様が、霧島神宮に御親拝されました。御参拝の後、陛下は霧島の山々、鳥たち、そこに生きている植物たちを興味深く御覧になられていたそうです。この様に自然を愛した昭和天皇様が、那須の植物誌に寄せられている序文の一節を御紹介させていただきます。那須に来ると、夜明け前に森の奥から鳥の声がひびいて、爽やかな朝を迎える。遠く山裾まで広野が続いて、緑が一面に広がつている。幾年かの間に植生の変化が現われてきてはいるものの、那須の自然は生き生きとしている。ここでは動物もいて、爽やかな朝を迎える。遠く山裾まで植物もその本来の生を営むことができるような環境の中にある。私はこんな自然環境がいつまでも保たれていく事を願つてやまない。私達の御心を慰めた、爽やかで、すがすがしく雄大な那須の自然がしのばれ、読ませて戴く度に心が洗われる様であります。そして自然を愛しみ、山や森を育て、国土を大切にされた御心に大きな感動を受ける次第

であります。今や世界を取り巻く自然環境は、文明という名の破壊によつて、今日も地球上から貴重な森が失われています。これらの変化は、地球の財産である豊かな自然や、生物を壊滅させるだけでなく、世界の気候にも大きな変化をもたらすと言われます。我が国に於いても、自然林が減少しています。

戦後、緑化推進が叫ばれて久しいが、近年その関心も高まりつつあります。四月二十九日は、昭和の日として全国の神社で昭和祭が斎行されました。また平成十八年までは、みどりの日として制定されていた事もあり、各県で植樹祭も実施されたようであります。神宮では、自然保護と遷宮に備えて、春の訪れと共に、毎年植樹祭を行つています。五十鈴川の宇治橋を渡り参道より見られる森は、神域の尊厳を保持するための杜です。しかしその奥には御造営の用材を育成するための、檜を主とした針葉樹と、楠、樫等の広葉樹の入り混じる森があります。二十年毎の御造営には、一万立米、本数にして一万本という、多量の御用材を必要とするそうです。その為に二百年後には、伊勢の神宮自体で供給出来るように、大正の時代から遠大な計画のもとに、本格的な山造りが続けられています。昨年、神宮のお木曳き行事に参加させて戴いた折り、内宮で御垣内参拝の機会を得ることができました。参拝が終わり清々しい気持ちで参道を歩いていた時に境内を清掃されている苑守

さんにお会いしました。その苑守さんのお話によると、参道を掃き清めて木の葉を集めとる時に、必ず砂利が葉と一諸に入ると言われるのです。それでしょうか、苑守さんは、木の葉を丁寧に拾われていました。おそらく全国の神宮崇敬者の方々から御寄付戴いた砂利を大切にしなければという思いからではなかろうかと思いました。遠い昔より、神宮を護り伝えているのは、日々の祭祀を司る神職だけでなく、神域にただずむ森の尊厳をまごころ込めて見つめておられる多くの職員の方々のたゆまない努力の御蔭なのです。日本国民の心の故郷である神宮の御遷宮が日一日と近づいてきます。神社に奉仕している神職として、平素なかなか逢い難い人達と遷宮という大義のために膝を交えて懇談をするという心の交流があります。二十年に一度の御遷宮を通じて、氏子の教化、さらに大きく言えば神道教化の場が、ごく自然に持てるのです。神社と氏子とを結ぶ心の絆が、遷宮という共同の目的の中で神宮に結集し、推進されていくとしたら大いに意義ある事ではないでしょうか。今、ふるさとを失いつつある人が多い中、我々神職が、今この時代に存在している意味を、この神宮の森が改めて問いかけている様に思えてならないのであります。

（鹿児島県　霧島神宮　権禰宜）

開拓前夜

芦原高穂

本日は、ＡＮＡミステリーツアーご一行の皆様御参拝ご苦労様です。

表題の通り凍て付く北海道か灼熱の沖縄なのか行き先不明な旅に、寒空の中参加されるとはなかなかの度胸だと思います。

先ほど伺うとある方が、「旭山動物園！私三日前に来たばかりよ」と言っておられましたが、しかしそのお陰で旭川神社に参拝し、お陰をいただけるんですから、企画した全日空に感謝しなければなりません。

折角凍て付く寒空の中お越しいただいたので、開拓のこぼれ話を聞いていただきみやげとさせていただきます。

この旭川神社が鎮まります旭川市特にこの東旭川地区は今から百十五年前屯田兵によって開拓の鍬が入れられたところです。

入植は明治二十五年。高砂丸等の客船が、先ず本州各地を経由して、屯田兵とその家族

を乗せ小樽の港に上陸し、入植の場所を決めるくじを引きます。一番から四百番までで、天国と地獄といってもいいくらい環境は違いますが、その後鉄道に乗って敷設間もない空知太といって今の滝川辺りまで移動しました。

そして数日の休息の後、石狩川沿いの開削された馬車道を東に徒歩で移動したわけですが、愛媛県から入植の屯田兵で大原萬作という人がいました。

家族は両親と弟一人妹二人の六人で一番下の妹はシマノと言ってまだ七歳の少女でした。しかし、軍が運んでくれる荷物は一家で柳行李七つという制限もあって、徒歩での入植ながらみんな両手や背中に溢れんばかりの荷物を書っての行軍となり、未だ小さいシマノも身の丈の荷物を背負わされ、行軍が始まりました。

そうはいっても少女の脚、自分の事で精一杯の大人たちが誰も気付かないうちに歩く速度について行けずいつの間にか列の最後尾となり、その内それからも後れを取り、ひとりぼっちとなってしまいました。

肩の荷物は少女の躰を上から押しつぶし道に埋めてしまうように感じられ、日はいつの間にか暮れてしまい、前を行く列も何時しか見えなくなり不安に思っていたときであります。

突然躰を押しつぶそうとしている荷物がスーッと軽くなったのです。
ワーッどうしたんだろ、
これはきっと背中に化け物が乗り移ったんだ、もう少し山に入ったら私を食べようとねらっているんだわ
ヤダヤダ、こんなところで死にたくない
あーっどうしようまだ死にたくないよう！
お父さんお母さん助けて
しかし、余りの恐ろしさに声も出ない有様で、がたがた震えながら、しかし、こわくて背中を見る余裕もありません。
そうこうしているうちに沢伝いに進んで山を越え平地に出ました。
そして遠くに駅停の明りが見えました。
シマノは「わー燈だ！」と叫んだその時軽くなっていた荷物が思い出したようにずしりと躰に重くのしかかってきて、漸く後を振り返ると年配のメノコが来た道を戻っていくのが見えたそうです。つまり、おくれて歩く少女をアイヌのメノコが後から支えてくれていたわけです。

こうして入植した、八月十五日に決断の式典を行い、そこで、最初に決定されたのが、八月十五日を開拓の記念日とし、村社一宇を建立し、来年の八月十五日には村祭りを実施することでした。

爾来大原家では、アイヌの人たちが鮭などを売りに来ると必ずこれを求め、お茶や食事などを饗して歓待したそうです。

アイヌの人たちは小さなコタンを川辺に形成し、狭い人間関係の中で暮らしてきましたので、挨拶をするということ、風呂にはいるという習慣がなく、当時の和人に多分に誤解されやすいものがありましたが、一方で開拓以前に入ってきた商人の中には、アイヌをだまし迫害を加えるものが多かったのも事実です。しかし当時の国際状況はロシアの南下西欧列強との対峙など国際社会の状況は、一人北海道だけアイヌの暮らす別天地として成り立たせるほど甘くありませんでした。

また北海道の開発なくして明治における二つの戦争の勝利はなかったと確信しております。

兎に角アイヌの献身的な協力なくして北海道の開拓は成立しませんでしたしアイヌの人たちも日本人として同化しようと努め、家を構え神社の世話役や総代を務めた人もいまし

た。

先ほどご参加のご婦人より社務所の玄関に貼ってあったポスターを見て、「ここでも式年遷宮ですか、全国でやっているんですね」と言われましたが、貼っておくものですね、そうなんです、ただ今平成二十五年の正遷宮に向けて、全国の神社界が挙げて取り組んでおります。

ここで、御奉賛のお願いをするつもりはありませんが、どうかご帰宅なさいましたら、ご自宅近くの神社へ赴き、御奉賛の真心をお届け下さいますようこの場をお借りいたしまして、お願いいたします。

千三百年の歴史の風雅を今に伝える大切な国家行事です。次世代への置き土産として、僅かでも御奉賛下さいますよう重ねてお願いいたします。

（北海道　旭川神社　宮司）

お伊勢さま

佐々木　美津子

昭和十八年、この世に生を受けた私は、太平洋戦争、終戦の激動期から高度成長期の中で成長しました。素晴らしいこと、楽しいことが多くある中で、悲しいこともたくさんありました。友達とお互いに助けあい、いたわりあい、先生には常に尊敬の気持ちを、そして父母や祖父母には感謝の気持ちを持ち、苦しければ苦しい程、しっかりした絆で結ばれた生活をしておりました。そこにはその精神のより所として常に氏神様があり、お伊勢様がありました。「神様は、お空から、そしてまわりの木や花となって見ておられ、まじめに働き正直な生活をすれば、いつか良い恵みを下さるのよ」と幼い時、祖母に言われた一言を信じてきました。

顧みますと、お伊勢さまへの最初の参拝は高校二年の修学旅行、折りしも伊勢湾台風直後のことで、大きな木々が途中から折れた無残な姿が記憶に残っております。あれからすでに三十数年の歳月が流れ、二度目に訪れたのは神職の道を歩み、受講した女子神職研修

での参拝でした。ご神木が天をさし、しっかりと根をおろす雄大な自然、信仰の歴史を物語る荘厳な建物、青葉の匂い、その景観のすばらしさに感動致しました。その後種々の研修会でその度々参拝致しております。

ご遷宮なされます御殿地の清掃奉仕の時には、やがてご造営工事に入られる神宮のご様子を胸にいだき、一列になって一つ一つ木の葉をひろい、ところどころにはえている草をぬきました。

昨年は新穀感謝祭に参列致しました。朝霧にけむる五十鈴川、「聖」と「俗」の境界。五十鈴川の架け橋として参拝者をむかえる宇治橋をわたり、小さな砂利を踏みしめての参拝は、心洗われる格別のものがありました。今回の参拝は、新穀感謝祭とあってか、全国各地より大勢の参拝客でいっぱいでした。

話はかわりますが、永年の願望であった皇居勤労奉仕の夢がかなえられ、平成十六年十一月、岩手県神社庁皇居勤労奉仕団に参加する事ができました。深い森に囲まれた皇居、桔梗門より皇居内に入った時、四日間奉仕することへの喜びでいっぱいでした。赤坂御用地をはじめ吹上御苑内、皇居東御苑内の清掃を真心こめて奉仕致しました。担当職員の皇居内の説明も丁寧にして下さり、宮殿、宮殿東庭、二重橋、富士見櫓、桃華楽堂等々ゆっ

くり拝見させて頂き、すべてが心に残る思い出でありました。皇居長和殿を目前に拝見した時は、御誕生日や新年一般参賀におでましになられる天皇陛下のお姿が、生物学御研究所構内の水田では、お田植えをなさっていらっしゃるお姿が目に浮かびました。

特に昭和天皇陛下が昭和五十五年の歌会始で「桜」という御題のもと

紅のしだれざくらの大池に
かげをうつして春ゆたかなり

と詠まれたそのしだれ桜のすぐそばで休憩した時は、昭和天皇、香淳皇后両陛下のありし日のお姿が心に甦り、言葉で言いあらわせない感動を覚えました。皇居勤労奉仕最後の日には、天皇陛下、皇后陛下、紀宮様がおでましになり、又東宮御所では皇太子殿下がおでましになられ、気品あるやさしい微笑みでねぎらいのお言葉を賜り、涙の出るほどうれしく、皇室のますますのご繁栄を心からご祈念申し上げました。

〝神の都と皇の都〟と言われます。

神の都・・・皇祖天照大御神を奉斎します伊勢の神宮

皇の都・・・天皇陛下のおられる皇居

この両方を参拝、奉仕することが出来ましたことに感謝し、「神様は、いつか良い恵みを

くださいます」と言った祖母の一言をしみじみ実感致しました。

平成二十五年、神宮式年遷宮斎行にあたり、二つのことを努力したいと思っています。

一つ目は、第六十回、第六十一回の奉祝神宮参拝を氏子さんと共に行った前宮司の遺志をついだ参拝旅行の計画です。

二つ目は奉賛金です。金額の大小は別にして、一人でも多くの人々に協力を願い、伊勢の神宮、お伊勢さまと氏神さまへの祈りの意識を高めることです。

人々の心が乱れ、神々に対する敬いの心と感謝の気持ちがうすれている今日、この努力こそ日本人のふるさと「お伊勢さま」を次の世代が受け継いで行く基になると確信しております。

「神様は見ているよ。きっといいことがあるから・・・」と言った祖母の一言をしみじみ実感しております。

（岩手県　天照御祖神社　宮司）

天照皇大神宮と刻み込まれた自然石に学ぶもの

川崎太久美

肥前風土記に出てくる山裾の集落には、径の辻や道端に「天照皇大神宮」あるいは「天照大神宮」と刻み込まれた自然石が方々にあります。また、人里離れた山間の氏神様の境内にも同じように「天照皇大神宮」あるいは「天照大神宮」と彫り込まれた自然石が四基も五基も立ち並んでいます。その中でも、小さな堂の中に祀ってあるのならまだしも、雨曝し日曝しになっているものは刻み込まれた文字が判読できないものも少なくありません。いかに長い年月風雪に耐えてきたかがよくわかります。

「天照皇大神宮」といえば、国民挙って本宗と仰ぐ大御神さまであるのに、どうして径の辻や道端あるいは山間の氏神さまの境内に祀ってあるのだろうと不思議な感に捕らわれて調べてみますと、その自然石には建てられた年号が刻み込まれているものとそうでないものとに分けることが出来ます。いったい、どうしてそういう違いがあるのでしょうか。それは、年号が記されているほうはその集落の中に伊勢講というものがあって、その講の代

表が何年おきかに参宮した記念に建てられものであり、一方年号のないものは講社組織がないために、参宮をしたいのはやまやまなのに参宮が叶わないことから、せめてもの思いで、氏神さまの境内において「天照皇大神宮」と刻み込んだ自然石を通して伊勢神宮を遥拝したのであろうということであります。

建てた年号が刻まれているものの中に明治二十三年とはっきりわかるものを見付けました。今年が明治維新百四十年の記念すべき年に当たりますので、ちょうど今から百八年前に建てられたことになります。当時の交通事情からすれば片田舎から伊勢までの往復は並大抵のものではなく、どのような手段の行程であったかは定かではありませんが、いづれにしても、並々ならぬ大変なものであったろうと想像されます。

奈良・平安時代はいうに及ばず、鎌倉・室町・江戸・明治そして、平成とつづくどの時代にも神宮への参拝は後を絶ちませんが、とくに昭和の初期までは伊勢路に行列をなしてお伊勢参りをしている絵や写真が沢山あります。おそらく足を頼りの参宮であったろうし、今からすれば至難の業というべきものであったと思われます。それだけの労力を払ってでも、なんとかして伊勢の皇大神宮に参拝したいという思いや願いはどこにあったのでしょうか。

そのことを思っておりますと、ふと母方の祖母が口にしていた言葉を思い出しました。それは「人はこの世に生まれてきたからには、一生のうちに必ず一度は伊勢の皇大神宮さまに参拝するべきだ」という趣旨の言葉でした。その言葉どおり、昭和二十七、八年ごろだったと思いますが、伊勢路を辿り目出度く参拝を成し遂げて帰ってきました。帰ってきたときのその顔は、まるで別人のように、今まで見たこともないような人が生まれ変わったときのような喜びと感激に満ちあふれた、実に晴れやかな清々しい様子をしていました。どうしてこうもなれるのだろうと子ども心にも不思議な感に捕らわれたものでした。

ちょうど今から三十五年前になりますが、第六十回式年遷宮のときに、私の仕えていた宮司が県下全部の神職に呼び掛けて、神宮のご遷宮の様子や神宮に関する映画を機会あるごとに各地で上映して回り、三回に分けて参宮団を結成しましたが、その第一回目のときに私も責任者として三百五十数名の人々と生まれて初めて神宮に参拝いたしました。内宮は宮司が外宮は私が御垣内の鳥居の下で参宮団を代表して玉串を奉りましたが、そのときは鳥肌がたち身震いするほどの感激をおぼえました。

その後、宿泊先の神宮会館でも勝浦のホテルでも参拝団の人々はまだ感動さめやらない状態で、会話を交わすひとごとに「神宮に参拝して本当によかった、感動で涙が出ました」

とか、「本当に伊勢神宮はすばらしいですね、心の底から洗われた感じをうけました」や「神宮にお参りしたら生まれ変わった気分になりました、有り難いことです」といったたぐいの言葉がつぎつぎに口から出てくるのです。

かの有名な西行法師が伊勢の神宮を参詣したときに詠んだとされる「何事のおはしますをば知らねどもかたじけなさの涙こぼるる」という和歌があります。「どなたさまがいらっしゃるかは知らないけれどもただ恐れ多くて涙がこぼれることだ」と感動のためこみあげてくる涙を押さえきれずにいる西行の姿がそこにあります。

難を押してでも伊勢講をたちあげ神宮に参宮したのは、天照皇大神さまの御神徳を直に拝んだ人々に共通する感激や感動に浴することができるからにほかなりません。これこそが太古の昔から現在に至るまで、日本人であれば誰しもが一度は伊勢神宮に参拝したいという強い願望をいだいてきた真実の姿であると言えるのです。

自然石に「天照皇大神宮」と刻まれたもののうち、年号のあるものは参宮のときの感激や感動の記念としていつの世にまでもそれを残そうとした思いが込められたものであり、年号が記されてないものは、いつかはきっと神宮に参宮して、人づてに聞いた感激や感動に浸りたいという強い願いをいだきつつ、氏神さまの境内から神宮を遥拝したときのもの

であろうと思われます。

（佐賀県　福富神社　宮司）

御遷宮のこころ

山下裕嗣

皆様ご存知の通り、伊勢神宮…正式には単に神宮というのですが…では、平成二十五年十一月に、二十年に一度の式年遷宮が斎行されます。御遷宮は千三百年の歴史を持ち、今回は実に第六十二回を迎える我が国の伝統行事です。今日はこの節目にあたり、「御遷宮のこころ」と題しましてお話をさせて頂きます。先ずは御遷宮の始まりについてご紹介致しましょう。

皆さま大化の改新はご存知かと思います。これは明治維新と共に日本の歴史の一大事変で、飛鳥時代、蘇我氏などの豪族中心の政治から、天皇中心の政治に戻そうと、中大兄皇子（後の天智天皇）と中臣鎌足（後の藤原鎌足）が中心となってクーデターを企てるわけです。神武天皇の建国より、公の天皇の国であった我が国が、豪族の台頭により私の支配する国土になっていた所を、再び天皇の治める公の国に戻し、天皇の下の国造りを進めて行ったのがこの改新です。公地公民の制度、班田収授の制度、国郡制度、租庸調の税制な

ど、中央集権国家の創造を進め、正に「天皇を中心とした神の国」造りを始めます…石川県出身の某大物政治家の先生がこれをおっしゃって話題になりましたが…。この時は第三十六代孝徳天皇が即位され、斉明天皇、天智天皇と引き継がれるわけですが、その総仕上げをされるのが第四十代の天武天皇です。天武天皇は甥の大友皇子（第三十九代弘文天皇）との皇位継承を巡って壬申の乱を企て勝利します。

天武天皇は『日本書紀』には、才能に恵まれ、武徳に優れ、天文・占術も心得ていたとあり、優秀な才能を持って国造りにあたられた方です。天武天皇の国造りの仕上げは、天皇の地位の普遍的な確約であり、天皇＝「すめらみこと」の呼び方は、この時代に定められたといいます。践祚大嘗祭や三種の神器などもこの時期に定められたといい、『古事記』『日本書紀』の編纂と共に、「天皇を中心とした神の国」…あえて何度もいいますが…の確立はこの時期にあるわけです。

さて、話を主題の「御遷宮のこころ」に繋げて参りますが、天武天皇は即位されると直ぐに第一皇女の大来皇女（おおくのひめみこ）を神宮の斎王に遣わします。推古天皇期より途絶えていた斎宮の制度を復活し、以来南北朝で途絶えるまで、約六百五十年間続けられます。そしてこの頃、天武天皇は神宮にも新しい社殿を造営して、普段の年の神嘗祭よ

り一層重厚な大神嘗祭を行い、神宮の御遷宮の制度を定められたといいます。

御遷宮は、天武天皇ご崩御の後に即位された皇后、持統天皇に引き継がれ、第一回目の御遷宮は皇紀一三五〇年（持統天皇四年）、西暦では六九〇年に行われております。以来応仁の乱等の戦国時代に中断された他は、先の大戦で四年間の越年を余儀なくされた以外、二十年毎に繰り返され、今に至っております。こうやって御遷宮の成立を歴史上の事柄で見て来ますと、何やら政治的な、ともすればきな臭い背景も感じられます。ましてや或る学者などは、『古事記』『日本書紀』の歴史は天武天皇の捏造である！といった様な事を提唱する者も居ります。しかし、そうであれば現在まで御遷宮は続いたでしょうか、何を於いても千三百年続いている事が、その心を物語っています。では、「御遷宮のこころ」は何処にあるのでしょう。二十年という節目は何を根拠に定められたのでしょう。

御遷宮のこころについては、生命の連続であるとか、古代のままに建造物を残すものであるとかいわれており、二十年の根拠については、人生の一つの区切りであるとか、技術の伝承に合理的な年数であるとか、中国の暦法からきているとか、神宮の社殿の尊厳を保つ為であるなど、諸説多くの理由を挙げています。しかしながら、定説は無く、神職の口伝えや研究者が推し測った論議である事は事実であります。それも、現代人の生活の中、

現代人の発想を以って当時を予測し考察した現代の考えです。いかに現代の科学が進歩しても、その時代を生き、その時代の背景を再現し、考えまでも当時のままにという様な事は不可能です。

私は「御遷宮のこころ」についてはこう考えます。御遷宮には理屈も歴史考証も要りません。御遷宮に必要な心は、千三百年伝えられて来たものを、しっかりと受け継ぎ伝えて行く事です。御遷宮の諸行事を体感する事こそが、心なのではないでしょうか。幸いにも今は一日神領民として、お木曳き行事やお白石持行事に参加させて頂けます。また多くのメディアを通じて、八年にわたる御遷宮の諸行事を知る事が出来ます。皆さん！この御遷宮の時期に、一人でも多くの国民が伊勢の神域に触れて下さい。一人でも多くの国民が遷宮の事を心に留め置いて下さい。ただそれだけで良いのです。そして次の御遷宮の時にそれを思い出し、家族や地域で語って下さい。二十年毎のこの繰り返しこそが、「御遷宮のこころ」なのだと思います。

（石川県　白山神社　禰宜）

三つ叱って・・

田代壽興

御還宮については昨年話させていただきましたので、今日は初宮詣の折りの話を延ばして話させていただきます。

以上をもちまして、初宮詣のお祓いを終わります。かわいい赤ちゃんをお授け戴いた神さまへの御礼と赤ちゃんの健やかなご成長とご一家のご繁栄を心を込めて氏神様にお祈り申し上げました。

今日のお二人は、赤ちゃんが神さまより授かったと判ったその日から親になられることを自覚され、宝物を扱うようにいろいろなことに気を配られ、ご誕生の日を迎えられたことと存じます。そしてご誕生のその時、無事に生まれたことに対する感謝の気持ちをお抱きになったことと存じます。お二人のお喜びとともに、ご家族・ご一統様のお喜びも如何ばかりかと思います。晴れて本日お宮参り、真におめでとうございます。

さて、親になったということは、喜びであると共に、子供の養育についての責任・義務

が生じてくるということでもあります。

子供の養育に当たる、これを家庭教育と申します。家庭教育を家造りに例えると、家の土台、基礎を造ることだと言われています。学校教育は柱を立てること、社会教育は屋根を葺くこととも言われております。土台が悪いと家は保ちません。人生も同じです。

この家庭教育に大切なことを二つ申し上げます。

一つは「宗教心を養う教育をぜひ行っていただきたい」ということ。

一つは「三つ叱って五つ褒め、七つ教えて良い子に育てよ」ということです。

宗教教育というと、難しくて自分たちにはできないと考えられるかもしれませんが、実に簡単なことです。ご飯を戴く時に「いただきます」食べ終わったら「ごちそうさま」と必ず言うようにし向ける。こういうことが宗教教育なのです。

私の娘の子、孫が三歳か四歳になった時、幼稚園が近くにはお寺しかないからどうしようかと相談して参りました。その時、寺でも良いではないか、幼稚園にやることが大事なんだと返事をしておりましたが、暫くして訪ねた折り、ご飯を食べる時何と言って食べるのと聞いてみましたら、孫が「お父さん・お母さん、お百姓さん、仏さま有難うございます。残さないように、こぼさないようにいただきます」と言って食べるのだと教えてくれ

ました。

ここまで教える幼稚園教育は素晴らしいと感じたことでした。

近年は、学校で「いただきます」を言わせないでくださいと言う親も現れたとか聞きます。自分の稼いだ金で食べるのだから「いただきます」は不要だというのです。驚きました。

イギリスの将軍で、ナポレオンをワーテルローのたたかいで破り、のち政界に入り、イギリスの首相になったウエリントンは、「宗教教育のない教育は、利口な悪魔を作るに等しい」と言ったそうです。今の学校教育にはこれは望めません。教育基本法には「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は教育上これを尊重しなければならない」と述べられてはいますが、学校も行政も宗教にはできるだけ近づかないように、避けているのが現状だと思います。

これを補うのに一番良い方法は、家に神棚を祀り、毎朝夕、神様とご先祖さま・仏壇に手を合わせることをお子様と一緒になさることです。覚えると自分一人でできるようになります。目に見えないものを尊ぶ心、これが大切です。

今、お家に神棚が無かったら、紙製ですが、組み立て式の簡易神棚を差し上げますので、お伊勢さまの御神札とお住まいの氏神さまの御神札をお祀りしてください。氏神さまとは、

住んでおられる近くのお宮のことを言います。本日は、ご参拝の記念にお母様の氏神さまであるこの八幡宮の神さまの御神札を差し上げます。年末になりましたら、お住まいの近くのお宮でお伊勢さまの御神札と氏神さまの御神札をお受けいただきたいと思います。初穂料はお伊勢さまが八百円、氏神さまのもほぼ同額と思います。神さまや仏さまに祈る、感謝をする、この心が将来大人になるのに根本的に大切なことではないかと確信しております。

さて次に、二番目の「三つ叱って五つ褒め、七つ教えて良い子に育てよ」と言うことですが、昔から伝えられている子育ての基本です。意味を説明するまでも無いことと思います。教育の仕方に何が大切かということです。

「褒めて育てる」ことと、それ以上に先ず教えること、家造りではありませんが、土台がしっかりしていないと家は保ちません。基礎工事が大切です。〇〇ちゃんの長い人生の基礎工事を行うのが今からのお父さん・お母さんのお務めです。お子さまの将来のために、神さま・ご先祖さまに祈りを捧げること、又褒めて育てることを心がけていただきたいと思います。本日は真におめでとうございました。

（熊本県　牛深八幡宮　宮司）

心意気

原　茂子

私がご奉仕致しております夜疑神社は、大阪府の南部・関西国際空港から車で三十分の岸和田市にご鎮座です。全国どこへ行っても、「岸和田です」と言うと「あ、あのだんじりですね。」とか「家の軒先を壊したり、大勢の人が怪我したりする荒っほいお祭りのようですね」と言われることが度々ございます。お宮は夜疑・夜（よる）と疑（うたがう）の二文字で表しておりますが漢字には意味は無く、ひらがなの、や・ぎとおなじことです。又地域の漢字は八木・八（はち）と木（き）で、二文字をくっつけると米となり、大昔から稲作がなされていたようでお米にご縁のある土地柄なのです。家を建てる時などあちこちから遺跡が出ています。私が嫁ぎました四十数年前は、鎮守の杜の周りは見渡す限り水田ばかりでした。けれども、大阪市内から電車で三十分ということもあり、宅地化が進み、あっという間にお宮の杜も家に囲まれてしまいました。現在、宮司の夫と私・長男と嫁でご奉仕していますが、夫が五歳のときに父が戦死し、母は着物の仕立てをして、細々と

姉二人と夫を育てあげ、夫の高校卒業式当日が葬儀でした。大学を出たばかりの夫と私・二十歳そこそこの夫婦が、今日までどうにかお宮のお守をさせていただけたのは、お百姓さんの気風が残る、心豊かな人達が住んでおられる地域だったから・・・と感謝の気持ちでいっぱいでございます。

ジエーン台風で倒れたままの大鳥居の再建に始まり、五年毎と申し上げていいほど次々とご浄財のご寄付をお願いし、平成元年の社務所改築の折には、総代さんから「神主さん、寄付を貰うて普請するのはこれが最後やな。これからは時代が変わるし、考え方も違うてくるよって、お宮さんもちゃんとお金貯めとかんとあかんで」と言われました。世代交代が進み、今の総代さんが居られなくなったら、お宮はどうなるのかな。サラリーマンが増えると、おまつりの日は平日のままやっていけるかな。長男は「神主になる。」と言ってるけど、伴侶が「うん」と言ってくれるやろか。考え出すときりがありません。

十年余り前のことですが、農地解放で地元の人の手に渡っていた神饌田（神様にお供えするお米を作る田）が、相続のために売りに出されていることを知りました。「隣接地は嫁を質に入れても買え」と言う諺があるらしく、幸い私は質草にならずにすみましたが、農協で借り入れをして参拝者用の駐車場として活用することになり、やっと完済出来たのが

昨年であります。

皆様の地域もたぶんそうだと思いますが、明治四十年代に国の施策として各村々のお宮を合祀することになり、当社も十一ヶ村のお宮が夜疑神社にお遷しされ、八木郷の氏神さまとして今日までお祀りされてまいりました。そして来年合祀百年の節目の年になります。これを機に〝合祀百年記念事業〟として御社殿の改築をと四月十五日、春祭後の氏子総代会の席で宮司が願い出ました。現在のご本殿は明暦二年の墨書があり、四代将軍家綱の時代に改築されその後三五〇年の間、修理とお屋根替えで済まし、昭和十五年の皇紀二千六百年の折も、資材の乏しい時で充分な修復が出来なかったようで、古材を使ってあることなどを話し、ひれ伏してお願いしました。「お宮さん、なんぼお金あるんや」「全額寄付貰うんかいな」「大きな事業やな。お金寄せ大仕事や」「そんな急な話あかんで」等たくさんの意見や、神職への厳しいお叱りもありました。数回に渉る種々の会議を経て、つい先日の六月十日、氏子総代三十八名と関係町会代表十二名の合同会議において合祀百年記念事業を推進する決定をいただきました。宮司・禰宜は勿論のことですが、部屋の外で息をひそめて成り行きを見守っていた私と嫁もほっと一息、有り難く、有り難く、座長さんの「全員賛成の挙手をもって決まりました。」とのお声に胸が熱くなりました。平成元年

の社務所改築後、家族や氏子がまっさらの建物を使いながら、神様は古いお住まいでお暮らしになっておられるのを、朝夕に、申し訳なく思い、こころ苦しくおもっておりました。

なんというありがたい土地柄でしょう。「こんなお社しか、よう建てんのか」と言われんよう十二ヶ町こぞって、神さんにも、氏子の皆さんにも、他の地域の人にも恥ずかしくない立派な社殿にしよう。との言葉もいただきました。「だんじり新調するのに、一つの町で二億もの金寄せするんやから、まあなんとかなるやろ」「割り当て額、よう寄せんかったら秋祭りに、だんじり曳いて宮さんに来れんからなあ」との冗談まじりのお話もありました。

だんじり祭りの時の心意気・その熱い情熱を氏神さまにむけてくださるその心意気は、米作りをとおして自然と共に暮らしてこられた祖先の思いであり、昭和の世に生まれ、数々の苦難のあった昭和の時代をたくましく生きてぬいてきた人達の心意気だとおもいます。

昭和の人達が、平成しか知らない世代と、まだ見ぬ子孫のために、神様のお住まいを真心捧げて建ち上げるのです。

私はまだまだ若いとおもっておりましたが、あるとき「貴方のように昭和のことをよく知っている人は、私たちにもっといろんなお話を聴かせてください」といわれたので、驚きと戸惑いを感じましたが、（成る程）と思いました。昭和が段々遠くなっているのですよね。

今のうちに私も機会あるごとに昭和生まれの心意気を語りたいとおもいます。

翻って日本の津々浦々まで、伊勢神宮の第六十二回式年遷宮の奉賛会が結成され、伊勢神宮では、種々のお祭りが執り行われてまいりました。伊勢の地に一泊すれば、一日神領民としての許しを得てお木曳きをさせていただけます。皆さんはお木曳き行事の参宮をなさいましたか。私は前回の御遷宮の折に、二〇年前はまだ四十代でしたからね、お木曳きをさせていただきました。台車に乗せられた御用材を曳く太い綱を握ったその手に伝わる感触は、幼い頃に曳いただんじりを思い起こさせ、自分のなかに温かい思いが湧き上がって涙がこぼれそうになりました。だんじりのように速く駆け抜けることはありませんが、心をひとつにして遥か遠くに見えるご用材を曳きながら、氏子の人達と御一緒に心なごむ一日でありました。また新宮殿が建ち上がったその足元に、布に包み宝物のように両手で持った白い石を、そっと置かせて頂くお白石持ち行事の折には、天高く聳えるお屋根・白木の掘っ立て柱・色とりどりの鮮やかな七宝焼きの装飾に圧倒され、神様がまだおいでにならないのに、その神々しさに感動しました。

第六十二回式年遷宮は、昭和生まれの心意気を、自然を尊び、祖先を敬い、平和願う日本人の心意気を、世界の人々に伝える大きな営みです。

私に「神道はすばらしい。」と教えてくださった今は亡き石井寿夫先生のお言葉を思いだしています。先生は、〝日本の神道は、世界を救う〟と言い切られました。その基であるお伊勢さまの二〇年毎の蘇りに、精一杯の真心をささげましょう。

これは境内に掲示していた、伊勢神宮平成二十五年第六十二回式年遷宮のポスターです。

あ り が と う

太陽に、光に、この星の温かさに、
ありがとう。
雨に、川に、きれいな水に、
ありがとう。
大地に、杜に、お米に、
ありがとう。
祖先に、父に、母に、私の命に、
ありがとう。
感謝するべきものに気づいたら、
大切なものを守ることが出来ます。

この鳥居の向こうでは、
二千年以上ものあいだ、
感謝の心を捧げる祈りがつづけられています。

（大阪府　夜疑神社　権禰宜）

御遷宮の出仕として

木下鋏二

昭和四十八年の夏、当時の副庁長坂本継雄先生より電話を頂いた。

「君、御遷宮に御奉仕しないか?」

「えっ、何ですか」

思わず問い返してしまった。

「第六十回伊勢神宮式年遷宮の臨時出仕の割当が、県神道青年会に一名だけ連絡が来ている。どうだ、御奉仕する気はないか」

「はー私がですか」

何かの間違いではないかと、わが耳を疑った。当時三十八歳、大江八幡宮の祢宜に就任したのが昭和四十年の九月、三十歳の時である。全く駆け出しの神職である。神青の役員でもなかった。それなのになんと有難い白羽の矢が立ったものか。

「お願いします。行かして下さい」

思わず大声を出してしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

十月十五日夕暮れ時、私は外宮の斎館前に整列する御遷宮の行列、先頭の祭員右側に松明を持って立っていた。

私の所役は松明係である。白丁を着装したときは全身に緊張が走ったが、列に立ったときは御奉仕出来る歓びに包まれていた。

斎館の前より板垣南御門までの参進はすぐに終った。お役御免の後の指示は受けていない。さてーと思ったとき、松明の左の相方から声が掛った。

「木下先生、きなっせ」

「えっ」

「良かけん、ついてきなっせ」

彼は宮崎県の代表K君である。

「どこさん行くとナ」

「よかけん」

彼に従って行くと、板垣を西に廻って蕃塀の所から板垣の内に入り、更に外玉垣の西の

門をくぐって内玉垣の内へと進む。そこには中重鳥居の両側に庭燎が焚かれていた。私達は玉垣に近い庭燎の後ろに静かに座った。

―これでいいのだろうか、何か大変な事を、本当に許されるのだろうか―

不安がよぎる。なるようになるさ。肝を据えて時の過ぎるのを待った。

どれだけの時が流れたのであろうか・・・

鶏鳴三声が「コケロー、コケロー、コケロー」

いよいよ遷御の儀。身震いするような緊張が五体をしめつける。庭燎の燃える音だけが聞こえる。

神さまを中心に焔が輝く、神官の影が映る浄闇のなかで「遷御の儀」が斎行されている。厳かに神さまがお渡りになっている。全身が凍り付いたよう、心が打ち震えている。鼓動が大きくなっている。

現今と千三百年前が一点に結合したようだ。

なんとも有難い感動につつまれる。

先刻読んだ神宮会館の裏に建つ、俳祖とたたえられる荒木田守武の句碑

元日や　神代のことも　思はるる

が思い出される。

眼前の絵巻き物は時空を越えて、現実（いま）と神代とを一線に結ぶ。「神代今に在り」の感激を現実のものとできた歓喜が静かに湧き出してくる。

・・・・・・・・・・・・・・・

世の人々が、口を揃えてお伊勢さんを〝心のふるさと〟と讃えるのは、その神域に足をふみ入れたとき、神々のふところに抱かれて「わらべ心」を思い起こし、心の安らぎ、清々しい神性に立ちかえるからに他なりません。そして「おまつり」に御奉仕出来た歓びが加わって大きな感動を醸成していったのです。

かたじけな　おごそかにして　したはしき
大御祭も　今しつかへぬ

元神宮祭主　北白川　房子

（熊本県　大江八幡宮　宮司）

神宮の祭祀と神主の使命

佐古一洌

私は、去る昭和四十三年より同五十三年迄の十年間、神宮に奉職させていただいておりました。

今思い起こせば、丁度昭和四十八年の第六十回式年遷宮を中にはさんでの最も恵まれた時期のご奉仕でありました。

日本人の心のふるさと・伊勢の神宮に短期間ながらお仕えした、しがない一神主が膚身で感じ体験し得ました神宮の祭りとその祈りについての私見を述べさせていただきたいと存じます。

かつて、後(のち)神社本庁統理にもなられました徳川宗敬大宮司様が、

「神宮のお祭りにお仕えして深く感じたことの一つは、総べてが自給自足の精神で貫かれていること」

であると感慨深く申されました。

事実神宮の神々にお供えする神饌、多くの方が既にご存知かと思いますが、お米、酒はもとよりのこと、

海の幸―鰭のヒロモノ・鰭のサモノ・沖つ藻菜辺つ藻菜

山や野の幸―甘菜・辛菜の野菜・果物

は言うに及ばず、塩、水、調理のための火、そしてこれらを盛る土器に至る迄全て神宮とその周辺内で栽培、採取、製造されるものばかりであります。

自給自足

自給の「給」は生産生活のこと

自足の「足」は消費生活のこと

神宮が見事に守り伝えている暮らしの手振り、それは我々人間が生きてゆく上に絶対に欠かすことの出来ない生活の両面、生産と消費とを落ちなく包み込んだものであります。その源流を辿れば『記紀』の神話が理想として描く高天原の神々の暮らしを、地上に実現したものに他なりません。

神宮の祭りとは、実に神話の宇宙観・国家観・人生観を大神様の暮らしの手ぶりとして荘厳に守り伝えることを意味します。それはとりもなおさず、天の太陽＝日の神の信仰と地の

稲＝米づくり　文化の堅持継承であります。この神代ながらの原初の姿を只管元々本々＝はじめをはじめとし、本を本として来たのが式年遷宮を含めた神宮の祭でもあります。

神宮祭祀は、恒例祭典四十種類、そして正宮別宮、摂末社所管社のおまつり全てを含めれば、実に年間延べ一、五〇〇回以上にも達するのであります。

これら年中祭典の目的趣旨はそれぞれ異なりますが、古今を通じて祭の中に籠められる祈りの内容は唯一つであります。

手前味噌になりますが、十年間の奉職中、私は神宮神主の使命、或いは理想像は奈辺にあるのであろうかと懸命に模索してまいりました。そしてある時遂に、神宮のまつりの祝詞に籠められた祈りに只管徹することが、神宮祠官のつとめであると思い至ったのであります。

幸い神宮には、上代から中・近世そして現代までの各種祭祀の祝詞が数多く残っております。その祝詞文・語句には、時代により多少の変化はありますものの、次に申し上げる祈り・祈願の精神はいささかも変わるものではありませんでした。すなわちそれは、一言で言えば天皇の御長寿と皇室の弥栄・国民平安・五穀豊穣を祈ることに尽きるのであります。判ってみれば当然、コロンブスの卵の感は致しますが、これは重大な真実であります。

神宮最古の正当なる古典『皇太神宮儀式帳』禰宜職掌任務の段に、

聖朝大御寿手長乃大寿止湯津如二石村一久堅石尓常石尓伊波比与佐志給比伊加志御世尓佐岐波閇給比阿礼坐皇子等乃大御寿乎慈備給比百官供奉人等天下四方国乃人夫尓至麻弓長平久作給留五穀物乎慈備給部止朝夕祈申

―朝夕祈申より前の文言は恐らく奈良時代当時の祝詞文でありましょう―

とあり、「天皇の御長寿」「国民の平安」「五穀豊穣」を日毎朝夕祈申＝祈りつづけるのが、神宮禰宜つまり神主の務めであるということになります。

儀式帳を解釈した江戸期内宮祠官荒木田経雅は、このことをしっかり踏まえて、

禰宜職は　君が八千代と　天が下の
　　静かなるとを　ねぎ祈るのみ

と和歌を詠み、神主の本分を喝破しているのであります。

そして、この神宮の祈りは又、全国八万神社の祈りであり更に皇室の祈りでもあります。

その宮中祭祀と言えば次のような逸話がございます。

昭和二十年八月十四日深夜、総理大臣室にいた鈴木貫太郎首相のもとに、阿南惟幾陸軍大臣が挨拶に訪れます。

阿南陸相は御前会議の席上、敗北を潔しとせず、本土決戦も辞さずと徹底抗戦を主張した人であります。しかしながら陸相は声涙下る天皇陛下のご聖断を拝するに及んで、謹んで大御心に従った史実はよく知られております。

かくて終戦が決定し、ひそかに自刃を覚悟していた阿南は、鈴木首相に対して今生の別れの挨拶に出向かれたのであります。

入室するや、阿南陸相は直立不動の姿勢でこう口火を切られました。

「終戦の議が起こりまして以来、私はいろいろと申上げましたが、この事は、総理にご迷惑おかけしたことと思い、ここに謹んでお詫びを申上げます。私の真意は一つにただただ国体を護持せんとするにあったのでありまして、敢えて他意あるものでは御座いません。この点は何卒御諒解下さいますように」

うなづきながら聞いていた鈴木首相は、阿南の覚悟を察し、その真意を深く理解して、

「そのことは、よく判っております。しかし阿南さん、日本の皇室は必ずや御安泰ですよ。何となれば、今上陛下は春と秋の御祖先のお祭りを必ずご自身で熱心になさって居られますから」

これに対し陸相は、両頬に涙を伝わしながら、

「私もそう信じます」

と言い、敬礼をして静かに退出されたのであります。

千鈞の重みを持つ、この会話をされたご両人は、実はかつて昭和天皇の側近として共にお供えした間柄であったのであります。

鈴木貫太郎首相は、昭和四年一月から昭和十一年の二・二六事件で負傷する迄侍従長として、阿南陸相も昭和四年から四年間、侍従武官として陛下のお側近くに仕えております。誰よりも陛下の日常に近侍し、厳修される宮中祭祀にも精通した側近中の側近だったのであります。

かくして昭和天皇様の宮中祭祀を通して絶ゆまぬ真剣な祈りがあってこそ、我々は神々に護られ未曾有の危機を見事乗り越え、今日の平和と繁栄を礎くことが出来たと言わなければなりません。我々は、その偉大なご聖徳を讃え感謝して止まない次第であります。

神宮の祭も又然り。営々二千年の絶ゆまぬ真剣な祈りがあってこそ、我国は神々に護られ万古不易、天壌無窮の弥栄の道を辿って来られたのです。

我々は、父祖先輩達が誠心をもって黙々と勤しみ仕え来たった式年遷宮を含め、この悠久の神事とその祈りに、満腔の感謝と景仰の念を捧げて止まぬと同時に、将来の重き使命

を茲にはっきりと覚醒するものであります。

（京都府　松尾大社　宮司）

食の至誠

村田和之

とうとう来るべき処迄来たのでしょうか?このまま黙って見つめているだけでよいのでしょうか?荒廃した世相、強悪な事件も「またですか」と連続して起る何時もの事件に、マンネリ化して聞き流してしまう時代。日本の品格も地に落ち、世界の中から身放されようとしている日本、遂に戦後教育の利己中心的な英才教育の結末が先日発生してしまいました。

平成二十年六月八日、東京都秋葉原での悲惨な殺害事件。人間の温かい心が伝わらないインターネットを操る人々、近代科学技術文明は必ず滅びると言い続けた知識人の指摘の如く現に科学技術は人間の心を次々とうばい取ってしまいました。

アレキシス・カレン博士の『人間・この未知なもの』の一部に『人間はもう現代文明の進歩について行くことができないし、その文明が進めば進む程、人間が退化して行くから、どうしてもこの辺で一度、それが人間に、どんな影響をあたえるのか、人間をはたして幸

福にしているか、不幸にしているか、はっきりと見極めておく必要がある』。と指摘されました。

アインシュタイン博士も『知識を神としないように』といましめました。『知識は何ら人格を持たず、人間を導くことはできない、知識は方法や手段に対しては目が利いているが、目的や価値に対しては盲目だ』と・・・。

又、非行化に走る少年達の中に、その原因の一つに食生活にあるという注目すべき、データーが発表されました。

食の崩壊は家族の崩壊に継がると言いますが、少年院に入っている少年の食生活を調査すると清涼飲料水、肉、インスタントラーメンを主に食べた生活、又、朝食を抜きにした子どもが多いという結果が発表されたのであります。

さて、私達、生きている動物は何か食物を食べずして生きては行けません。少しの期間断食として過すことはできますが、米や、野菜、果物、魚、動物等、それぞれ生きようとしているものを人間の都合で食べ頃の良い時刈り取り、或は殺し何気なく食べているのであります。尊い生命を人間が生きて行く上で勝手に食べて生きているのです。人間が食べることは受け継ぐ生命の継承と言える尊い儀式になるのであります。

その尊い物を口にする食べ物を、只、利益のために走るばかりに大変な事態が発生しました。

昭和五十五年の森永ヒ素混入ミルク事件、続いて雪印・米国のクーロン牛肉、マクドナルド、白い恋人、鳥インフルエンザ、赤福、吉兆、中国の毒ギョウザと続き私達の食卓に出てくる食品が続々と汚染され、毒や賞味期限に振り回されているのであります。今だに続く農薬、殺虫剤をふんだんに使用した中国食品、身体をこわすのは人間が弱いからと取り合わない中国、日本人は温厚な人種、のどもと過ぎれば熱さを忘れる如く三ヶ月も過ぎれば過去のこと、「まさか」が「またか」と軽く受け取り毒入りの中国食品は未だ『まさか』と思い込み食べている日本人、未だに平然とDDTという毒薬を使用した中国食品を日本人は知っているのでしょうか。

今、中国で起っている広東人の男性、DDT使用の結果四十年前の精子の濃度が、一ミリリットルに五千万から一億あり正常を維持していたものが、現在では三千万しか無いと言う現状、五十年後には大多数の人が生殖能力を失うと言われているのであります。

しかし残念ながら日本の食卓から中国の食品を取り除けば日本の和食が消滅するとまで言われている家庭、されど家計を切り詰め節約しても中国食品を食べ、尊い生命を失って

は元も子ないのであります。被害を拡大させた責任は中国だけだと責めることができるのでしょうか。

安いからと外国の輸入食品にたより、日本の稲作民族を忘れ、山の谷間で汗を流し伝え来た米作りを忘れていいのでしょうか。減反政策、米作りを忘れ資源の少ない日本人は生き残れることができるのでしょうか。そうです、今迄伝え来た豊作を告げた鎮守の森の太鼓の音色も、秋祭りも忘れ去られ、品格のある日本の国は失なわれてしまうのではないでしょうか。

どんなに小さな山里の鎮守の杜の社でも、お祭りには豊かな品々が供えられ私達は生き伝えて参りました。そうです神も人間も共に食べ生き永らえて来たのです。

私達の日本民族の祖神、天照皇大御神は、皇居でご一緒にお住まいすることは、恐れ多いことと、第十代崇神天皇六年、紀元前九二年皇居より倭笠縫邑（やまとかさのえのむら）に移り今の伊勢を聖地と定め、紀元前五年、垂仁天皇二十五年三月に鎮座、次で二十一代雄略天皇ご即位二十二年、夢の中で天照大御神より『我御饌都神（われみけつもののかみ）、豊受大神を我許（わがもと）に』とのお告げにより、丹羽の国から豊受大御神を伊勢の度会の山田が原に移され、外宮として、天照大神のおめし上る食物の神としてご鎮座、私達の生活をささえる一切の産業をお守り下さる神として以来

一五〇〇年『日別朝夕大御饌祭として天照皇大神様に毎日朝夕二回食事をお供えされて今日に至っているのであります。しかもその内容は、中国産の毒入でなく、全て自然の中で培い育ちできたもの、農薬も一切使用しない完璧な無農薬食品、しかも食器に至る迄、一度しか使用しない新しい容器を使用しているのであります。

日本民族は神代より伝えられた『齋庭の稲穂の神勅』と言う尊い教えが守り伝えられているのです。高天原という神世の聖地に植え育った神聖なる稲の種を、この世に天下られ邇邇藝命（ににぎ）に日本民族の主食として育て生命の基として食べて行けよとおおせにより、今の世の天皇陛下は神勅のまにまに籾を蒔き育て神に感謝し、お供えしておられるのであります。したがって神宮の神事は全て稲穂に繋がる神事が営なまれ豊葦原の水穂の国と言われる所以なのであります。

これぞ食の至誠、十月に齋行される神嘗祭、十一月に齋行される新嘗祭はその最たるものといえるのであります。

最後に奈良県薬師寺の管主であった高田好胤の話を申し上げ締とさせて頂きます。

内宮の宇治橋前にある「紀乃国屋」の主人山中隆雄氏より伺った話でございますが、数十年も前、伊勢市の商工会のお世話をされていた時、伊勢市で記念講演を計画、高田好胤

氏を招き拝聴、その中で『神嘗祭』について知っている人はいますかとの問に、山中氏以外知る人が無く、びっくりすると共に、伊勢の住民がそのようなことではいけないと論され、以後毎年十月、神嘗祭に奈良県の薬師寺の信者を百人引率、三十年間続けたと聞きます。又、神宮に夕方六時集合、夜十時に始まる神事迄の間、七時から九時迄毎回神嘗祭の講話をされました。又、夕食を取られる時、今出された米は、古米ですか、新米ですかと訪ねられ新米と聞かれた高田好胤は古米を求められ、陛下も神嘗祭が済む迄、古米を食べておられるのに、我々一般市民が、陛下より先に新米を食べる訳にはいかないと、毎年古米を食べられ、本人自身は、地方に講演に巡行される折にも古米を持ち歩き、神嘗祭が済む迄は古米を食べ通したと言われる程の潔癖な人であります。天皇陛下を始め、高田好胤氏の日本人として生きる姿を、自から示され、実践されている姿、私達は見習わなければいけません。一時の欲心があればこそ、食品に関する事件が続々起るのではないでしょうか。今一度、日本人の品格ある生きざまは如何にあるべきか考えてみたいものであります。

朝よひに物くふごとに豊受の神のめぐみを思え世の人（本居宣長）

（広島県　長束神社　宮司）

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりを願い神明奉仕に励んでいますが、講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

Ⅰ　何のために語るか（祈願）

1 神命をかしこんで立つ

2 まず祈れ

3 正しい志を

4 まじめな生活を

5 話は生きている

Ⅱ　何を語るか（内容）

その一　体験を語る

1 体験を語る

2 体験を反省する

3 二つの「門」

① 自然のいのちのなかに神様を見る

② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二　講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな
2 位に中す
3 講録をつくる
① 話の材料を集める
② 話の材料を選ぶ
③ 話をまとめる
④ 特に切り捨てについて

Ⅲ いかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る
① 話はわかりやすく
② 自分の言葉で語る
③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を
④ 話には〝うねり〟を
2 至誠をもって語る
① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもって語る
③ 遺言の覚悟

3 自然に語る
① 講録をはなれて
② 自然に語る
③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十四回神道講演全国研修大会・伊勢大会の記録

於　神宮会館

神社本庁総合研究所所長　矢田部正巳

顧　問　阿部　信（神社本庁長老）

〃　石上　紀男（三重県神社庁庁長）

〃　真弓　常忠（住吉大社宮司）

〃　大野　俊康（元靖國神社宮司）

〃　矢野　憲一（元神宮禰宜）

大会会長　髙城　治延（神宮少宮司）

実行委員長　村田　和之（長束神社宮司）

実行副委員長　佐古　一洌（松尾大社宮司）

実行委員　芦原　高穂（旭川神社宮司）

〃　生嶌　經和（松尾大社権宮司）

〃　小串　和夫（熱田神宮宮司）

〃　落合　偉洲（久能山東照宮宮司）

〃　木下　鍒二（大江八幡宮宮司）

〃　薗田　稔（秩父神社宮司）

〃　谷田　勉（櫻山八幡宮宮司）

〃　長曽我部延昭（伊豫豆比古命神社宮司）

〃　戸内　康雅（心清水八幡神社宮司）

〃　中野　幸彦（多賀大社宮司）

〃　二楊　一彦（砥鹿神社宮司）

〃　波多野　學（高見神社宮司）

実行委員

塙　東男（笠間稲荷神社宮司）
原　茂子（夜疑神社権禰宜）
宮川　脩（福井県護国神社宮司）
山田　一孝（静内神社宮司）
山村　稔晴（高知大神宮宮司）
山本　行恭（椿大神社宮司）
渡邉　知宣（疋野神社宮司）
和田　年彌（神宮禰宜）

々
々
々
々
々
々
々
々

―実行委員五十音順―

事務局長　畠田　明彦（松尾大社権禰宜）
事務局員　村田　和弘（長束神社禰宜）
〃　村瀬　佳子（長束神社権禰宜）
〃　石井　昌孝（松尾大社権禰宜）
〃　佐藤　勇穂（北海道神社庁録事）
〃　鈴木　明子（立木神社権禰宜）

神道講演全国協議会　役員名簿　―幹事五十音順―

顧　問　阿部　信　神社本庁長老
顧　問　真弓　常忠　住吉大社宮司
顧　問　大野　俊康　元靖國神社宮司
顧　問　矢野　憲一　元神宮禰宜
会　長　村田　和之　長束神社宮司
副会長　佐古　一洌　松尾大社宮司
幹事長　木下　鍒二　大江八幡宮宮司
幹　事　生嶌　經和　松尾大社権宮司
幹　事　小串　和夫　熱田神宮宮司
幹　事　落合　偉洲　久能山東照宮宮司
幹　事　薗田　稔　秩父神社宮司
幹　事　谷田　勉　櫻山八幡宮宮司
幹　事　長曽我部　延昭　伊豫豆比古命神社宮司
幹　事　戸内　康雅　心清水八幡神社宮司

幹　事　中野　幸彦　多賀大社宮司
幹　事　二橋　一彦　砥鹿神社宮司
幹　事　波多野　學　高見神社宮司
幹　事　塙　東男　笠間稲荷神社宮司
幹　事　原　茂子　夜疑神社権禰宜
幹　事　宮川　脩　福井県護国神社宮司
幹　事　山田　一孝　静内神社宮司
幹　事　山村　稔晴　高知大神宮宮司
幹　事　山本　行恭　椿大神社宮司
幹　事　和田　年彌　神宮禰宜
幹事・監査　芦原　高穂　旭川神社宮司
幹事・監査　渡邉　知宣　疋野神社宮司
事務局長　畠田　明彦　松尾大社権禰宜

平成二十年六月現在

あとがき

平成二十年六月、第二十四回神道講演全国研修大会・伊勢大会が伊勢市神宮会館で開催されました。

平成二十五年の第六十二回神宮式年遷宮を控え、人々に御遷宮の意義を説き遷宮の諸祭・諸行事が恙無くおこなわれ、教化の一助になればと計画、実施させて頂きました。

タイトルは「言霊で遍く伝へむお伊勢さん」と題し、神宮御遷宮を基本テーマとし、神社本庁研修所、矢田部正巳所長主催、大会会長に高城治延神宮少宮司をいただき六月十七日より十九日迄の二泊三日間、参加者六十二人の研修会でありました。

記念講演に「國作りと御遷宮」と題して神宮司庁の渡邊和洋参事より拝聴、次で参加者全員一分間スピーチ、又、分科会で講演構成法、実習にと早朝より深夜迄研修に励みました。何時もと違い「神宮・御遷宮」のテーマにしぼりましたが角度を変えた多くの発表がなされました。講評は、会長、副会長、幹事長が当り各実習終了後は摸擬講演として、村田会長、佐古副会長、木下幹事長、原幹事が実践をふまえ各二十分間の講演を行いました。

北海道から鹿児島県迄全国各地より馳せ参じご参加ご協力に厚く御礼申し上げます。又

毎回このように講話集を製本し各県神社庁・神職養成機関等配本しておりますが、発表者はもとより事務局員の皆様方が印刷タイプ打等、神明奉仕の合間をみての協力や開催中の日陰になっての援助奉仕があればこそ完遂しているのです。

関係各位に紙面を借りて厚く厚く御礼申し上げます。

この講演研修会は昭和四十六年第一回が神社本庁で開催され、以来先輩諸先生方のご協力を得て、各ブロック地区の組織活動より、全国協議会と改称、神社本庁直轄研修、本庁主催と移り変り今、協議会が主管となりお世話させて頂いているところです。

諸兄には多額な旅費を費し短い期間の研修ではありましたが研鑽された貴重な体験を各地区に帰郷され実践に活用、神明奉仕頂ければ所期の目的が達成されるものと確信いたします。参加協力に感謝申し上げ尚一層のご活躍を祈ります。

平成二十年師走

第二十四回神道講演全国研修大会

伊勢大会実行委員長　村田和之

講話集　**神風のむすび**
－第二十四回　神道講演全国研修大会　伊勢大会－

発　行　平成21年5月1日
編集者
装幀者――神道講演全国協議会事務局
印刷所
製本所――株式会社　ユニックス

発行所――神道講演全国協議会
〒六六〇―〇〇二四　京都市西京区嵐山宮町三　松尾大社社務所内
TEL（〇七五）八七一―五〇一六　FAX（〇七五）八七一―三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします